
陽だまりの吸血鬼

マサムネ・ナルタキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽だまりの吸血鬼

【Nコード】

N9047V

【作者名】

マサムネ・ナルタキ

【あらすじ】

不思議な夢を見た。

ただそれだけならば良かったが、その日から、街で異変が起こり始める。

平穏だった街から、次々と人が消えていく。

しかし——それをどうにかする術など、俺は持たない。

そう、持たないはずだった。

あの日、出会うまでは。

「私を――殺してください」

閉ざされたはずの記憶と力。その力は、俺の小さな世界を大きく揺るがす。

その先に何が待っているかなど――知らなかった。

プロローグ

草木も眠る丑三つ時。

そんな時間にもなると、都会でも音は聞こえなくなる。小さな村であるならば、尚更のことだ。

村の建物からは灯が消え、世界は夜の闇の閉ざされる。だが星はない。あるのは、ぼんやりと夜空に浮かぶ月だけだ。

だがその月も、今は雲に隠れて見えなくなっている。

「誰？」

無音の世界に、その小さな声が響き渡った。夜の闇に溶け込むような黒い髪をした一人の少年が、虚空へと語りかけたのだ。

その声に答える代わりに、足音が少年の許に近付く。

少年は特に警戒することもなく、その足音の主を待った。数秒後、足音の主は少年から十歩ほど離れた場所まで来ると、口を開いた。

「お前は、オニサキか？」

「うん。そうだよ」

少年は、相手の言葉に頷く。相手はその言葉を聞いて唇を歪めた。快楽を喜ぶように。

その時、月が雲から姿を現し、少年と男の姿がはっきりと現れた。少年の方はまだ四、五歳くらいの子供で、相手は二十を迎えたばかりぐらいの若い男だった。

「ねえ、みんなを知らない？」

少年が、男に問う。男は少年に背を向けながら、短く答えた。

「いずれ会える」

男の姿は、すぐに見えなくなった。月の明かりが消えると共に、闇夜に紛れてしまった。

少年はそれに首を傾げ、男とは別の方に歩いていく。

そして、少年は見た。

気を狂わせるには十分なほど醜い、惨劇を。

真っ赤な血。むせ返るような死臭。臓物を撒き散らし、散らばった死体。一人、二人ではない。そこには、何十という死体が転がっていた。

だが少年にはそれが何かわからない。生暖かい液体の感触を足で感じ、歩いていく。

「お母さん……？ お父さん……？ おじちゃん……？」

呟きながら、それが何なのかを理解していれば気が狂ったであろう世界の中を、少年は歩いていく。そしてようやく、生きている人を見つけた。

そいつは、少年と全く同じ姿をしていた。

少年と同じ髪の色。少年と同じ目の色。同じ顔。同じ体。同じ服。ただ一つだけ違うのは、そいつは全身を血で真っ赤に染め上げていたということだ。

「あ……っ……！」

少年が気付く。四、五歳なれど、そいつの異質さは直感で理解した。逃げようとするが、足が動かない。

「ヒヒッ……」

右手にナイフを持った自分が、笑う。

「ヒハハハハハハハハハッ！」

壊れたようにそいつは笑い、少年に飛びかかる。少年は逃げようとして、できなかった。

ナイフが、胸へと突き刺さる。

そこで、少年の意識は消えた。

誰かが、少年を呼んでいた。

「俺が殺された！」

目を覚ました瞬間、かなり面白いことを口走りながら涼牙^{りょうが}は目を覚めました。彼は周囲を見渡し、今の夢だったことを悟ると、ため息を吐いた。

「……自分が死ぬとは、どんな夢だ」

自分自身にそうつつこみを入れ、涼牙は起き上がる。時間はまだ午前五時と少しだが、目が覚めてしまった。

布団をたたみ、自身が通う高校の制服に着替えながら、ふと涼牙は考える。

「最近、変な夢を見てばかりだな」

妙な夢。それは、最近の彼を悩ませているものでもあった。
不意にその夢は彼の脳裏に現れ、そして、誰かが彼を呼ぶ。その誰かの正体はわからない。最初は無視していたが、何度も同じ夢を見ているのなら話は別だ。

ただ、今回の夢はいつもと違った。
最後に自分が殺される夢は、初めてだ。

「いよいよ、精神科にでも行くべきなのか？」

半ば本気で涼牙は考え——やめた。『変な夢を見ます』なんて医者
に言うのは、高校生である彼には少し抵抗があるものだったからだ。
無視するしかない。そんな結論に至り、涼牙は自分の部屋を出た。
天気はいい。ただどこか、涼牙はしつくりこない気分だった。

ブログ（後書き）

高校時代に書いたものを死蔵させるのもあれかと思い、投稿することにした。

できるだけ早く、全話を投稿するつもりですので、よろしくお願いします。

第一話 吸血鬼

白鷺市。^{しらぎ}都会から離れた場所にある、小さな町だ。人口もそこまで多くなく、都会からの観光客もほとんど来ないのんびりとした田舎町である。

そして、その町の北部にある白鷺高校も、普通の高校だ。偏差値が高いわけでもなく、低いわけでもない。かといって、不良が多いわけでもない学校。

近年の少子化の影響を受け、この町に高校はこの学校しかない。そのため、この町を出て他の学校へ通う者も少くない。おかげで白鷺高校の全校生徒は九百人程度である。

だが活気はあり、現に今も広い体育館に多くの生徒が集まって、試合を観戦していた。

みなが口々に応援の言葉を発し、中心に用意された試合場の上では竹刀の音が響き渡る。剣道の試合だ。だがこれは対外試合ではなく、内部の試合である。

「胴オオオオッ！」

片方の、剣道部の部長である生徒が裂帛の気合と共に、竹刀を振る。だが、白い袴を着た相手はそれを軽く受け流すと、一気に攻撃に移った。

「面エエエエェン！」

先程の部長の気合を遥かに上回る気合と共に、白い袴を着た男子生徒が竹刀を振り下ろす。剣道部部長は反応さえできず、それを喰らった。

そして、それと同時に審判が手を上げる。

「面あり！ それまで！」

同時に、歓声が湧き起こる。白い袴の男子生徒は一礼すると、面を外した。拘束されていた黒髪が、それによって解放される。

『すげー！ 五人抜きだぜ！』

『かみや神谷くーん！ かつこいいー！』

剣道部部員相手に五人抜きを達成した高校二年生の男子生徒は、その歓声に片手を挙げて応える。若干顔が照れているのはご愛嬌だ。黄色い声援が上がり、剣道部の面々は渋い顔を作る。男子生徒は気恥ずかしそうに顔を赤くしながら、逃げるように更衣室へと入った。彼の名は、かみやりようが神谷涼牙。

今年の春に白鷺高校へと入学した、ごく普通の高校生である。手入れていない黒髪は適当にはねていて、身長も平均的だ。ただ彼の体は、普通より数段引き締まっている。剣道で鍛えた体に、無駄はない。

「ふう……」

小さく吐息を漏らし、涼牙は袴から制服に着替える。もう六月に入ったというのに暑い袴を着せられて、少々参っていた。

「いやー、お疲れさんやで」

その更衣室に、一人の男子生徒が入ってくる。メガネをかけた、すこし茶色のかかった髪の少年だ。先程審判をしていた少年でもある。

「誠也か。本当に疲れたぞ。面倒なことをさせてくれるな」

「そう言わんと。剣道部連中かてええ勉強になったて。それに、今回は負けたら自分を勧誘せーへんゆう約束でのことやったしな。これで自分も付き纏われんで済むやる?」

「まあ、そうだが」

言っていることはその通りなので、涼牙は頷く。今回やった剣道部員五人抜きは、しつこく涼牙を勧誘してくる部長を諦めさせるためのものだった。

涼牙の友人である関西弁のこの少年、二夜誠也ふたよせいやはその口利きをしてくれた。ただ、裏側で何か儲けていたようではあるが。

涼牙が制服に着替え、袴などを袋に詰めていると、誠也がポツリと呟いた。

「それにしても自分、相変わらずバケモンじみた強さしとんなあ」

「バケモンというのは正直嫌な例えだが……そうだな。物心つく前から祖父に叩き込まれていたらしいから、それなりになっているんじゃないか?」

「らしい?」

「俺の記憶はどうも曖昧なんだ。よく覚えていないことが多い。それだけだ」

言って、涼牙は袋を担ぎ上げる。彼の剣道の技術は祖父に教えてもらったものだ。その祖父も今は温泉旅行とやらでないが、まあそれはどうでもいい。

「ま、これで自分はムサイ男たちに付き纏われんで済む。めでたしめでたしや」

「ああ、本当にそれは助かる。俺は剣道をもう一度する気はないんだからな」

「もったいないなあ。自分、中学時代は二年生で全国制覇したのに」

言葉ほど残念に思っている風はなく、誠也が言う。涼牙は苦笑しながら返した。

「昔の話だ」

そう、昔の話だ。無理やりに参加させられ、気が付けば全国大会で優勝していた。本当に小さい頃から学んでいた剣道が、実を結んだ時だ。

だが周囲は、そう見てはくれない。

取材、噂、望んでもいないのに集まってくる取り巻き……。本当に疲れるものだった。

だから、辞めたのだ。ちやほやされるのは性に合わない。それだけの理由で。そして、それとは別に納得させるだけの理由も作った。

「それにしても、去年のあれはやり過ぎやろ？」

事情を知る数少ない友人は、呆れたように言う。涼牙は苦笑した。

「あれぐらいがちょうどいい。剣道で彗星の如く全国制覇を成し遂げた中学生の本性は、不良だった。それぐらいでなければ、辞めることを許してはくれなかっただろう」

「まあ、年上十人相手に一方的にボコボコやもんなあ。そらみんな怖がるて」

「そういうことだ。俺自身、そんな奴には近寄らないからな」

自嘲するように、涼牙は言う。誠也はさよか、と言っただけでそれ以上は何も言わなかった。そして涼牙が剣道の防具を片付けると同時に、誠也が口を開く。

「ほな行こか。もう放課後やし」
「そうだな。戻るとするか」

言つと同時に教科書用の鞆と剣道の防具、竹刀を涼牙は背負つ。そして更衣室を出ると、誠也が思い出したように言つた。

「ああ。そついやわい生徒指導に呼び出されとつたんや。すまんけど、ここでさいならや」

「元々、お前と俺の家の方向は真逆だから校門前で別れることになるんだがな。それより、また呼ばれたのか？ 今度は何をした？」

半ば呆れながら涼牙は言う。実はこの男、生徒指導に呼び出されることは日常茶飯事なのだ。しかも大抵が、反省文絡みの説教である。そしておそらく今回も怒られるのであろう友人は、首を傾げて呑気に言つた。

「さあ？ 心当たりがあり過ぎてわからへん。まだ今日は何もしたらんのにな」

「まだつて、何かするつもりか？」

「人生何が起こるかわからへんしな。この後、わいが校舎の硝子を粉碎せえへんとは限らんやろ？」

「少なくともそれは回避できることだ。心構え次第で」

気をつければ回避できることのはずである。そんな風に涼牙はつっこみを入れると、誠也を見送つた。

「それじゃあ、また明日」

「おう。また明日や。バイバイ」

別れの言葉と共に、迷いなく誠也は校長室に向かつていく。……生

徒指導室ではなく校長室とは、今度は一体何をしでかしたのだろうか？
だがまあ、あの男なら心配は必要あるまい。そう判断し、涼牙は歩き出した。

白鷺の人口は前述したとおり、決して多くない。
数は一万人に満たないし、高層ビルがあるわけでもない。南部には海が広がり、北部には山が聳え立つ隠れ里のような町だ。
そして、このように小さな町ほど、噂が充満しやすい。

「……………」

不意に涼牙は足を止めた。その視線は、店頭に置かれたテレビの画面に注がれている。

『……………今月に入ってから白鷺では二十人の行方不明者が出ており、警察は捜査を進めています。また……………』

この町のことを伝える地方テレビとでもいうべきニュース番組は、ここ数日、同じことばかりを伝えている。
神隠しと囁かれる失踪事件。それについて。

最初の被害者は、若い男性だった。会社帰りに家で待つ家族へと帰宅の連絡を入れ、失踪した。そしてその事件をきっかけとしてか、それから毎日のように誰かが消えた。

今日の日付は、六月二十一日。気温も高くなってきた、暑い日だ。
そして、最初の失踪者が出てからちょうど二十一日目になる。もし

かしたら、今日もまた誰かが神隠しに遭うのかもしれない。

『……それでは、行方不明の方々の名前と写真を放映いたしますので、見つけた方はすぐに警察へと連絡を——』

そこまで聞き、涼牙は再び歩き出した。失踪者の中には、何人か彼の知る名前がある。

だが彼には何もできず、ただ見ていることしかできない。だったら、下手に事件のことを知らないほうがいいとさえ思えてくる。

（まあ、要するに逃げだな）

自嘲するように、涼牙は心中で呟く。何もできないことは事実だ。だが、何かをしようとさえしないのは、逃げ以外のなにものでもない。笑い、涼牙は歩いていく。

神谷涼牙。彼に両親はいない。そしてそれ故に、彼は普通とは違う人生を歩んできた。

彼が親を亡くしたのは、幼少時代だと聞いている。原因は交通事故。涼牙だけが奇跡的に助かり、彼は独りになった。

保護者という立場でなら、涼牙には祖父がいる。唯一の肉親だ。

だが彼の祖父は基本的に家にいることはなく、涼牙は五歳の頃よりすべてを独りでこなしてきた。すべての家事と、生活に必要な手柄をすべて独学で学んだ。

人は己の死と向き合う時、強くなる。

当時五歳の涼牙にしてみれば、毎日が地獄だった。一応、最低限のことは祖父が彼に教えていたが、当時五歳。まだ小学校にも行かないような子供である。料理を始めとした生きるために必要なことは、彼には辛かった。

だが彼はそれをこなせてしまった。故に、誰にも頼ることができない。

小学生になった後も、涼牙の生活は変わらなかった。同年齢の子供たちが遊んでいる間、彼だけは家に帰り、黙々と家事をこなす。精神が擦り切れてもおかしくないような状況だった。事実、彼は何度も逃げ出そうと思ったことがある。

しかし、逃げ場などない。死という現象は、彼にとっては恐怖でしかなかった。

そして彼が続けた、剣道という武術。涼牙の祖父が教える武術は多少剣道と毛色は違うが、精神を鍛えるということは同じだ。そしてそれが彼の支えともなった。

そして今の、神谷涼牙が出来上がる。

表面上は社交的に。だが、絶対に一線は越えさせない。それは親友と信じる二夜誠也に対してもそうだし、気を許せる隣人であっても変わらない。

そしてそれはこれからも同じだ。

そう、涼牙は考えている。

玄関のチャイムを誰かが鳴らし、台所にいる涼牙にも音が届く。涼牙は電気コンロを消すと、濡れた両手をエプロンで拭きながら玄関へと向かった。

そして、涼牙が玄関を開けると同時。

「やつ」

黒髪を肩口で短く切り揃えた、いかにも快活そうな少女が敬礼するように手を上げ、涼牙にそう挨拶した。

「ああ。入れ」

涼牙も敬礼の真似事をし、その少女を招き入れる。少女は靴を脱いで入ると同時に、快活に口を開いた。

「お邪魔しまーす」

「邪魔をするのは困るな」

「言葉の綾よ」

「知っているさ」

いつも通りの軽口を叩き合い、二人は居間へと歩いていく。そこにはすでに涼牙による手料理が用意されていた。それを見て、少女が表情を変える。

「うわ、豪勢！何かあったの？」

「冷蔵庫の中身をそろそろ片付けないといけなくなっているな。ちようどいいから全部使ってみた」

「……待ちなさい。賞味期限は大丈夫なのよね？」

「大丈夫だ。……多分」

最後だけ小声で涼牙は口にする。一応全部賞味期限は過ぎていないし加熱処理はしてあるが、夏の近いこの季節だ。ちょっと危険かもしれない。

少女は疑り深い視線をしばらく涼牙に向けていたが、結局席に着いた。

「まあ、作ってもらってるわけだしね。贅沢言えないわ」

「殊勝な心がけだ。誠也あたりなら文句たらたらといったところなんだがな」

肩を竦めて涼牙は言う。あの悪友はクレーマーである。それも重度の。少女もそれを知っているため、苦笑した。

「言いそうね」

「だろう？……まあそれはいい。とにかく、冷めないうちに食べるぞ」

涼牙が言い、二人は向かいあう形に座って料理を食べ始める。最初は疑っていたようだが、涼牙が何の躊躇もなく食べているのを見て少女も食べ始めた。

この少女の名は、しらかわあいな白河藍那。涼牙と同じ白鷺高校の生徒であり、涼牙と同じ二年生だ。

藍那の家は涼牙の家の正面にあり、涼牙の祖父と藍那の両親が親しかったため同じ中学に進んだ時からこうして夕食を共にするようになっている。両方とも夜は一人で食事をしていたから、その寂しさを紛らわそうとしたのだ。

だが寂しさを紛らわすということ以外に、藍那にはもう一つ理由があった。

「美味し〜！ あんた絶対料理人になれるわ！ あたしが保障する！」

「そいつはどうも。だがこの程度で料理人になれたら世の中苦労しないぞ？」

「でもあたしのより百倍は美味しいし」

「……………」

思わず涼牙は無言になる。以前藍那の作った料理——もはや毒薬と呼んでも差し支えがないものだった——を思い出したためだ。

想像するだけで胃の中から込み上げてくるものを堪え、涼牙は口を開いた。

「……お前のあれは料理じゃないだろう」

「なっ、失礼ね！　こう見えて家庭科は4なのよ！」

「何故他の教科は5なのに、家庭科だけは4なんだ？　つまりそれは実技が悪いということだろう？」

冷静に涼牙は箸を突きつけてくる藍那に言う。この少女、頭脳明晰で運動神経もいい。そのため成績も抜群に良いのだが、一つだけ欠点があるのだ。

「大体、米を洗剤で洗う時点でどうかしている」

うっ、と藍那が言葉を詰まらせる。涼牙は畳み掛けるように言った。

「調理実習の時、砂糖と塩を素で間違えた挙句に醤油とポン酢まで間違えたんだ。言い逃れはできないと思うが」

その言葉を受け、藍那がうなだれる。ちなみに、すべてが事実である。

藍那は俯き気味に顔を伏せながら、呟いた。

「……だって、誰も言ってくれなかったし……」

「常識だからだろう。まさかラベルの確認もせずにわざわざ冷蔵庫からポン酢を持ってくるとは誰も思わん」

「うっ……」

居心地悪そうに藍那が唸る。そう、この少女は料理が壊滅的にダメなのだ。

包丁を使えば指を切り、火を使えばボヤ騒ぎを起こす。本人に改善の意志がないため、一向に良くなる気配はない。

しばらく藍那は俯いて小さく愚痴を零していたが、不意に思い出したように顔を上げた。

「そうだ！ 涼牙あんた、今日剣道部の男子レギュラー全滅させたでしょ？」

「そんなことをしたか？」

思い出せない。そんなことをしただろうか？

本気で首を傾げ始める涼牙に、ため息を交えて藍那は呟く。

「これだもん。あの後あたしたちがどれだけ苦労したかも知らないで」

涼牙という男は、関心がないことはすぐに忘れる。約束事を忘れることは滅多にないのだが、こういった普段の行動についてはすぐに忘れることは多い。

そして今日の放課後に行ったことも、彼にとってはどうでもいいことなのである。

涼牙は思い出すことを早々に諦め、自分の目の前にある夕食を処理していく。藍那はそんな涼牙に、自身も夕食を食べながら話し始めた。

「あの後、主将が大暴れして大変だったのよ？ 『何故勝てんのだ』

』とか叫んで校庭百週して、貧血で倒れて病院に運ばれて」

「何をやってるんだ？ 剣道部は？」

思わず涼牙はつつこむ。思い出せないが、自分は剣道部と試合をしたらしい。そしてその結果、剣道部主将は暴走したということだろう。

……馬鹿か。

「馬鹿よね」

藍那と意見が一致する。心の中を読み取られた気分だ。

だがまあ、付き合いは誠也以上に長い。小学生の頃から藍那とはこの家にある道場で共に練習してきたから、それぐらい日常茶飯事だが。

そんな涼牙の心中の呟きに気付かず、藍那は腕を組んで口を開く。すでに藍那の分の夕食はなくなっていた。

「大体、涼牙は物心つく前からこの道場で剣道をやってたんだし。

その辺の学生とじゃ差があるに決まってるわよね」

「それはどうだろうな。俺より強い奴なんてごまんと思うぞ。中学時代はたまたま優勝できただけかもしれない」

「素人同士の試合じゃないんだから、たまたまなんてあるわけないでしょ」

少し語気を強め、藍那がきつぱりと断言する。涼牙は反論できず、苦笑した。

武術を含め、スポーツというものには基本的に偶然などというものは存在しない。確かに、不運というものはあるだろう。それがきつかけで負けることはあるかもしれない。

だが、そこに至るにはそれ相応の実力がなければならぬ。ましてや剣道は、一対一で正面から戦う競技だ。そこに偶然など、入り込む余地はない。

だから、神谷涼牙という少年が全国で最強であったのも、偶然ではない。

「まあ、俺は部活動でまで剣道をする気はない。全国大会優勝はもう、過去の栄冠だ」

剣道をやめてはいない。だが、部活動としてやるつもりはない。それは、涼牙が部活動を辞める時に決めたことだ。そしてそれはこれからも変わらない。

涼牙は立ち上がると、食べ終えた食器を運び始めた。その背中に、藍那からの疑問が投げかけられる。

「じゃあどうして剣道を続けてるのよ？」

その問いに、涼牙は即答した。

「また後悔しないためだ」

「何によ？」

追求してくる藍那。涼牙は振り返り、酷薄に答えた。

「俺もわからない。……俺は、一体何を後悔しているんだろうな？」

夜も深くなり、田舎町であるこの場所ではもう音はなくなる時間。白鷺市の北東部。洋風の家が立ち並ぶ中、唯一純和風の大きな家が存在する。そしてその家の敷地内にある道場に、一つの人影があった。

「……………」

瞳を閉じ、その手に刃を持ち、少年——涼牙がそこに在る。

窓から差し込む月光が、涼牙の体を照らした。同時に、彼が持つ得物の姿も露になる。

漆黒の空間で瞑目し、彼が持つものは刀だった。刃引もなはひきされていない、触れれば斬れる真正銘の刀だ。

とん、と音が響いた。僅かな足捌きによって生まれた音が、静寂に溶け込むように響き渡る。

涼牙は目を開けない。目を閉じたまま、ゆっくりと足を動かす。

そして、刀を正眼に構えた瞬間。

静寂を粉碎するような、雷鳴のような音が響いた。鋭く踏み込んだ涼牙の足が床を叩いた音だ。同時に、刀による風切り音が鳴る。

それだけでは涼牙は止まらない。より鋭い踏み込みと共に、より速く、刀を振る。

涼牙の瞳は閉ざされている。だが彼の瞳には、しっかりと相手の姿が映っている。

涼牙に刀の扱い方を教えた、祖父の姿が。

「——ッ！」

ここまで無表情に刃を振るい、踏み込んでいた涼牙の表情が変化する。想像上であるとはいえ、彼の祖父は強い。いや、むしろ涼牙が無意識に勝てないと思ひ込みながら生み出した偶像であるため、本来の姿よりも強いかもしれない。

涼牙の動きは止まらない。だが、明らかに彼は押されていた。

先ほどまで迷いなく振り抜かれていた刃はすべて防御のためのみに動かされ、攻勢に打って出ることができない。

もしここに第三者がいれば、あるいは影ぐらい見ることができたかもしれない。それほどまでに、涼牙の動きは自然で、美麗だった。

だがそれも、徐々に終わりへと近づく。

いつしか涼牙の額には大粒の汗が浮かび、その動きは徐々に鈍くなっていく。

そして、涼牙の動きが止まった。

正眼に刀を構え、己の力を振り絞って最後の一撃を入れようとする。防御など一切考えず、現実であるならば刺し違えるくらいの覚悟で踏み込んだ。

しかし、その刹那。

？もうすぐだぞ、涼牙？

「はっ……っ？」

誰かが涼牙を呼び、それと同時に集中力が切れた。涼牙の中にいた最強の男も姿を消す。

目を開け、涼牙は周囲を見渡す。誰もいない。ここにいるのは涼牙一人だ。

「……勘弁して欲しいな」

苦笑し、涼牙はその場に座り込む。刀を鞘に収め、道場の壁に背を預けた。そうして一息吐いてから考えるのは、今の声だ。

（幻聴か？）

真っ先に浮かんだことを涼牙は思案する。だが、偶像を浮かべて修練を積む時はこれ以上ないくらいに集中している。そんな状態で幻聴というのも考え難い。

そうなると、最近ずっと見ている夢が関係してくるような気がする。最後には必ず誰かが自分と呼んでいる夢だ。

涼牙が最初に妙な夢を見たのは、六月一日。一人目の失踪者が出た日だ。

やたらと古風な場所に涼牙は着物を着て立っていて、誰かが自分を呼んだ。ただそれだけの夢だったのだが、どうしてか忘れられなか

った。

そしてその日から、夢は少しずつ変わっていった。平安の時代にタイムスリップしたかと思えば、昨日見た夢のように惨殺死体の現場に出くわすこともあった。

だが最後は変わらない。最後は必ず、誰かが涼牙を呼ぶ。その誰かの正体は、わからない。だからこそ、不安だ。

「本当に精神がいかれてきているんじゃないだろうな？」

自分自身にそう問いかける。夢だけならまだしも、起きている時にまで呼ばれてはたまったものではない。

「……気にしないのが一番か」

眩き、涼牙は立ち上がる。どうせこれは一時のものだ。自分はまだ、壊れていない。

壊れかけてはいるが、踏みとどまっている。

ならそれでいい。そう決めて、涼牙は歩き出した。

「……綺麗な月だ」

夜空に浮かぶ月を眺め、そう眩きながら。

深夜。白鷺市の南西部にあるマンションの一室の前に、人影があった。

「入るぞ」

ノックをすると同時に、一人の少女がそう言つて部屋の中に入った。白鷺高校の制服を着た長い金髪をポニーテールにした美しい少女だ。その声も見た目通りというか、美しい。

「私だ。どこにいる誠也？」

しかし言葉遣いはどこか男らしい。気品のようなものを漂わせているため、それが妙に似合っているのだが。

その少女は金色の髪をたなびかせ、遠慮もなく他人の家へと入り込む。彼女にしてみればこの家は幾度となく来ている場所なので、今更遠慮も何もない。

「誠——」

「こつちやこつち」

意外と広い室内でもう一度相手の名を呼ぼうとした時、それを遮つて自分を呼ぶ声が聞こえた。少女は声がした部屋へと向かい、眠たそうに欠伸をしている少年を見つけた。

「元気やなあ、自分……。わいは眠いわ。今すぐ眠りたい気分でいっぱいや」

そう言いつつ、自分の分と少女の分のコーヒーを誠也は用意している。誠也がそれを机に置くと、少女は席に座った。

彼女の名は、フィティア・レウ・クラスハーケン。海外からの留学生であり、田舎町の田舎の高校である白鷺高校では少し浮いた存在だ。もっとも、白鷺高校は海外に兄弟校があり、そこからの留学なので別におかしくはないのだが。

誠也は席に着くと、コーヒーを啜って口を開いた。

「ファイア。自分……インターホンって知つとる？」

いきなりの発言に、ファイアが眉を寄せる。インターホンを知らない文明人などいるのだろうかといった表情だ。

そんなファイアに対して誠也は苦笑し、続きを補足する。

「だって自分、ノックして入ってきたやろ？ 普通インターホン鳴らさへんか？」

「近所迷惑になると考えてな。あれの音は必要以上に大きい。こんな時間に近隣住民の睡眠妨害をしたくなかった」

「ああ、成程。ま、ゆーてもこのマンションの防音は相当なもんや。せやから今度からは気にせんとインターホン使い」

「わかった。次からはそうしよう」

ファイアが頷き、コーヒーを口に運ぶ。普通なら裏で所属するものが対極にあるこの二人がこうして向き合ってコーヒーを飲むということとはありえない状況なのだが、二人とも特殊なため実現している。

味を確かめ、満足そうに一度ファイアは頷く。そして表情を引き締め、本題を切り出した。

「協会が私に指令を下してきた。鬼頭きとうがこの町に来ているとのことだ」

その言葉を聞いた瞬間、誠也が微かに反応した。手に持っていたカップを置き、珍しく真剣な表情でファイアを見る。

「……本当かいな？」

「協会の予測者が観測したことだぞ？ 万に一つの間違いもないだ

ろう。それは貴様が一番よくわかっているはずだ」

「まあ、そうなんやけどな」

見つめ返してくるフィアに視線を返し、誠也は改めてコーヒーを啜りながら思考する。その様子を眺めながら、フィアは言葉を続けた。

「この町には厄介な存在もいる。一波乱あるかもしれん」

「しれないどころか、絶対に起こる。因果があるさかいな。世の中偶然なんてことはありえへんのや。わいと自分がこの町におるのも、多分意味あつてのことやろ」

「原理法則、だったな」

感心したようにフィアが言葉を呟く。誠也は頷いた。

「世界はあらゆる原理法則に支配されとる。微妙な均衡の上で成り立つそれらによつて世界は未だに壊れないで現存しとる。まあその法則からちよいと外れたり、崩れた均衡を保つために出てきたのがわいらみたいな存在なんやけど……まあそれはええわ」

長くなりそうな話を誠也は途中で切る。こんなことは今更口にしても仕方がないような話だ。二人ともこの話は深く知り得ている。

「せやけど、いくら因果があるとはいえ何で今なんや？ まだ覚醒しとらへんのに……」

「だが、現実に来ている以上は是非もないだろう。私に下された指令は監視と状況次第での抹殺だ。鬼頭 相手では少々厳しいが、下された命は全うせねばならない」

拳を少しだけ握り締め、フィアは言う。組織の一員である以上、下された命には従わねばならない。一般企業ではないのだ。できなか

つた時は、死ぬ時だ。

そんなフィアを退屈そうに眺め、誠也は口を開いた。

「大変やな、自分。ま、頑張つてや。わいは適当に見とるさかい」
「待たんか、たわけ！」

真剣な表情を崩し、肩を竦めて言う誠也にフィアは思い切りつつこみをいれた。そして、見るからに怒気を漲らせて立ち上がる。

「貴様とて元とはいえ 十六夜八鬼いざよひはつぎの一角であろうが！ 世界の安定を守ることこそが我らの使命！ それを忘れたと言う気か！」
「ちよい、静かに。一応深夜やさかい」

凄まじい剣幕で怒鳴ってくるフィアに降参の意志を示すように両手を挙げて見せながら、冷静に誠也はフィアを宥める。

フィアは言われて気付き、椅子に座り直した。だがその目は、鋭い視線を誠也に向けている。誠也はため息のように息を吐き、言葉を紡いだ。

「自分の言うことはあつとるよ。わいらの存在理由は、崩れそうになる均衡を保つことや。そのために力は存在する。うん、何も間違つとらん」

「ならば何故何もしない？ 相手は 鬼頭 とそれ以上の化物だぞ？ 会合と協会。双方の力を合わせねば勝てる相手ではないだろう？」

「そう。その会合が問題なんや」

フィアが口にした、会合という言葉。それを取り上げ、誠也は語り始める。

「わいは離反した身や。まあ向こうも今更わいに興味なんかないやろし、普通に活動しとるだけやったら放つとくやろ。一応離反者は見つけ次第報告って形になつとるけど、わざわざわいに喧嘩売るアホはおらんやろし」

誠也がかつて所属していた場所は、裏切り者を許さない。だが、誠也の場合は違う。彼はあまりにも特出しているのだ。そのため、放置されている。

だが——今回の案件に関わった時、相手も出方を変える。

「今は除名されとはいえ、鬼頭は十六夜八鬼の一角。それも、魔の中では最強の一族や。力を求め過ぎて辺境へと追われたそんな化物どもを相手にわいが戦って解決してみい。十六夜八鬼——会合はどう出ると思う？」

「……お前を抹殺する、か？」

話の途中でその回答に至っていたらしいフィアは、苦々しく口にした。誠也は頷く。

「ご名答。考えてみれば当然やな。多少できがええだけの霊術師なら放置しとく手もあるやろうけど、鬼頭に匹敵するんやったら話は別や。そんなもんを生かしとく道理はこの世に存在せえへん」
「その通りだな。単騎で鬼頭に匹敵する霊術師も騎士も、会合か協会の下にいるならともかく野良であるならば危険でしかない」
「そういうことや。せやからわいは、ギリギリまで動けへん。第一、やらないアカンこともあるしな。まさか鬼頭が知つとるとは思えへんけど——念には念を入れとかなとな」

コーヒーを飲み干し、誠也は言い切る。その言葉に偽りはない。理不尽ではある。誠也ほどの実力者が今回ほどの非常事態に関われ

ないというのは。下手をすれば、ファイアたった一人で解決せねばならないのだ。

非常に危険だ。ファイアは、無意識の内に拳を握り締めた。その様子を目にして、静かに誠也が呟く。

「……まあ、ホンマに自分がやばくなったら助けるから安心しい。場合によっては自分が全部一人でしたことにすれば逃げられる思うし」

ファイアが顔を上げる。だがそこにいたのは、欠伸をするしまりのないう顔の少年だけだった。だがファイアにとっては別にいい。誠也の協力が得られる——それはファイアにとっては非常に大きいことだ。誠也は欠伸を噛み殺し、話題を変えた。

「せやけど、鬼頭の本家は十二年前に全滅しとるはずや。本家がある東北で起こったあの事件でな。せやのに協会が観測したとは

……」

「生き残りは考えられんか？」

「それこそ妙や。暴走しとっただけとはいえ、『あれ』は千年前の具現。当時おった鬼頭の誰よりも絶対的やった。生き残れるとは思えん。大体、魔に最も近い鬼頭は『あれ』に対しては何一つ対抗手段があらへん」

思案しながら、誠也は言葉を紡いでいく。正直、妙だ。

十二年前に起こったこと。それがどれだけのものだったかは記録で知っている。そして、生き残りがほとんどいなかったことも。だが、誠也は一つだけ思い出した。

（ん？ そういや、生き残った奴がおったって……）

確か、離反していた少女がいたはずだ。一人で生きることを選んだ、孤高の魔が。

「……ちょい待ち。これもしかしたら、わいの考えとる因果より相当ややこしいもんかもしれへん」

一つの仮説に至り、誠也が呟く。その仮説が現実となれば、これ以上なくややこしいものになってしまう。

「一体それはどんな因果だ？」

フィアが聞いてくる。だが誠也は首を振り、語るのを拒否した。

「これは仮説や。最悪の場合のシナリオ。今は考えんでええ」

そのシナリオ通りになるという確信を心のどこかで抱えながら、誠也は口にした。

これは、世界の裏側での物語。
開演間際の、ほんの序章の物語。

六月二十二日。天候、晴れ。

しかし朝のニュースはどれも明るくない。どの番組を映しても、同じことしか報道されていない。

「……またか」

朝食を食べながら、涼牙は呟く。おそらくこの言葉はこの町の住人全員の感想だろう。

『昨日、二十四歳の会社員大野さんが姿を消しました。自宅へ帰ると連絡した後、携帯電話と鞆を残して失踪した模様です。警察では一連の失踪事件と関連があると考えて捜索しており――』

憂鬱そうな表情をしたアナウンサーが、手元の資料を眺めながらそう伝えてくる。涼牙は食器を洗いながら思考を展開させ始めた。今日までの失踪者は全部で二十一人目。全員が十代から二十代の比較的若い人たちであること以外は、特に共通点はない。失踪の理由を書いたものなどは何一つとして見つかっておらず、周囲の人間も理由はわからないという。

（いや、共通点ならあるか）

共通点は、全員が荷物を置き去りにしているという点。
身に着けているもの――例えば財布や携帯電話などの貴重品を除き、手に持っていた鞆などは不自然に道端に転がっている。これはかなり妙な話だ。

そしてだからこそ、神隠しなどと囁かれる。

（やっぱりわからないな）

洗い物を終わると同時に、涼牙はそう結論を下す。時計を見るとそろそろ家を出なければならぬ時間だった。

テレビのスイッチを切ろうと、涼牙がリモコンを手取る。テレビの中では、『現代の神隠し！』などという煽り文句の下でアナウンサーと何かの専門家が会話をしていた。

『周囲の人間は失踪するとは思えないと証言しているようですが、どうなんでしょう？』

『そうですね。これも一種の心の闇なんじゃないでしょうか？周囲の人間が気付かなかっただけで、実は大きな悩みを抱えていたのかもしれない』

「知った風な口を。苦しんでいる奴の何がわかる？」

吐き捨てるように、テレビに映る自称・専門家に言葉を投げかける。心の闇を抱えていたから失踪など考えるのは、短絡的過ぎる。

待っている人がいるのに、その人たちをわざわざ悲しませるような真似を普通はしないだろう。失踪する直前に連絡を入れるようなことをするとも思えない。

『一部では宗教が関係しているという噂もあるようですが、どうでしょう？』

『それはないでしょう。現実的ではありません』

お前の論理より、よっぽど現実的だ。そんなことを思い浮かべ、涼牙はテレビを切った。

鞆を持ち、家を出る。通勤時間のためか、多少町は賑やかだ。その中を歩きながら、涼牙は何となく神隠し事件のことを思考する。別に深い意味があつてのことではない。それぐらいしか考えることがないだけだ。

（心の闇、か）

人は誰しも悩みを抱えているものだ。大小はあれど、それは間違いない。

そしてそれにはその者自身の価値観が関係してくる。他人から見れ

は取るに足りないようなことであっても、本人にとっては重大なものであることが多い。

だがだからといって――失踪など、考えるだろうか？

人の気持ちは涼牙にはわからない。仲のいい友人である誠也や藍那などの考えていることは、涼牙には理解できない。だから想像するしかない。だが想像してみると、失踪という行為は不自然に思えてくる。

本当に苦しんで追い詰められた者は失踪ではなく、自殺に走るのではないだろうか？

失踪はあくまで、逃げの手段だ。ただ先延ばしにしているだけで、本人の心がその苦しみから解放されるわけではない。

だが、死ならばどうなのだろうか？

一時期、涼牙も考えたことがある。死んでしまえば、苦しみから解放されるのではないかと。だからきつと、追い詰められた者は失踪などしないと思う。

「……考えても仕方がないか」

校門が見えてきたところで、涼牙は思考をとめた。そのうちこの事件も忘れられるだろう。少し待てば解決するに違いない。そんなことを考え、涼牙は校門をくぐる。

下駄箱で靴を履き替え、四棟ある校舎の二棟にある自分の教室へ向かっていく。

「うーっす、神谷」

「おはよう」

教室に入ると同時に投げかけられる挨拶に応じ、涼牙は席に着いた。鞆を席の横に掛け、軽く背伸びをする。すると、後ろから背中をつかれた。

「ん？」

「なあ涼牙。知ってるか？」

後ろの席に座りながら話しかけてくるのは、クラスメイトの倉本だ。全体的に軽薄で、同じクラスである誠也と仲がいい。

涼牙は体を横向きにし、倉本のほうへと視線を向けた。

「何をだ？」

「今日転校生が来るって話だよ」

「いや、それは知らないな」

涼牙は首を横に振って答える。こんな田舎に転校生とは、珍しいことでもあるものだ。

倉本は楽しそうに笑い、続きを口にする。

「しかもすんげえ美人らしい。こいつぁ期待大だ」

「どこからそんな情報を仕入れた？」

嬉しそうに語る倉本に、冷静に涼牙はつつこみを入れる。倉本はあっさりと答えた。

「昨日部活してたら先生たちの話を立ち聞きしたんだよ。転校生が来るってな。しかも先生たちが美人って噂してんだぜ？」

「大丈夫か？ この学校」

教師が美人の女子高校生が来ることで騒いでいていいのだろうか？

「まあ、校長が一番変人だしな。入学式であいさつ『入学おめでとぅ』だけだったし」

「ああ。あれには驚いた。本当に挨拶だけだったな」

その時のことを思い出し、涼牙は頷く。この学校へ涼牙たちが入学した時の校長の挨拶は、本当に挨拶だけだった。今ではちょっとした伝説である。

そんなことを話していると、いつも会話に乱入してくる男の姿がないことに涼牙は気付いた。

「誠也はいないのか？ あいつなら美人の単語ですっ飛んできそうなんだが」

「そっぴいや見ねえな。あいつは遅刻とかする奴じゃないから、休みかな？」

「あいつが風邪を引くところなんて想像もできないんだが」

「同感だけどよ。あいつは頭悪くねえぜ？」

肩を竦め、倉本が言う。少々納得がいかなかったが、涼牙は頷くしかなかった。

二夜誠也。あらゆる場所に首を突っ込み、授業などは真面目に受けているが色々と奇行が目立って有名なこの男子生徒、実は成績優秀である。

白鷺高校では各学年ごとに成績上位三十名を張り出す。各学年三百人ほどこの中で上位三十名というのは非常に名誉なことだ。そして誠也はそこで前回、一位をとった。

普段の行動は軽薄だが馬鹿では決していない。それが誠也である。

涼牙は思案するように腕を組み、倉本に聞いてみた。

「××は風邪を引かないというのは、誠也には適用されるのか？」

「微妙なとこだな。あいつは行動は馬鹿丸出しだけど頭悪くねえし」

「うーん……」

どうでもいいことを涼牙は考え、結論を出そうとする。だが、その前に。

キンコンカーンコン……………

授業開始のベルが鳴り響いた。みんなが話しながら席に座り、少ししてこのクラスの担任である乙夜香織^{いつやかおり}が入ってくる。白衣を着た科学担当の女性教師で、やる気なげな目と茶色のウェーブのかかった髪が印象的な教師だ。

まだ二十代前半と若く、とっつきやすい性格から生徒に好かれていく先生でもある。

「香織先生ってその気になればかなり美人だと思うんだけどなー。もったいねえ」

後ろで倉本がため息を吐きながら呟く。涼牙はあえて無視した。

だが実際、香織は美人の部類に入と思う。手入れをされていない髪とやる気なげな目がそう見せないだけで、実際はかなりの美人であるはずだ。

ちなみに香織は基本的に乙夜先生ではなく香織先生と呼ばれる。若いことと、仲良くなりやすい性格のためだ。

「はーい、静かにねー」

手をパンパンと叩き、香織は教室を黙らせる。そして静まるのを待たず、本題を切り出した。

「今日は転校生の紹介をするわ」

香織がそう言った瞬間、教室が騒ぎ始める。転校生という単語に反応してのことだろう。

「はい！ 質問です！」

そしてクラスを代表するかのようにな倉本が手を上げながら勢いよく立ち上がった。この思い切りの良さは正直すごいと思う。

香織は倉本にやる気名下げな視線を向け、発言の許可を出す。

「なに？ 倉本くん」

「それは女子でありますか？」

何故か敬礼しながら、軍隊のようにな質問を飛ばす。香織は頷いた。

「ええそうよ。女の子」

「私は嬉しいであります！」

またもやわけのわからないことを叫び、再度倉本は敬礼する。他の男子を見ると、何人かはガッツポーズを決めていた。……色々と面白いクラスである。

敬礼を続ける倉本に、香織が聞く。

「質問はそれだけ？」

「そうであります！」

「じゃあ座って」

「はっ！」

最後まで元気を全力で示し、倉本が席に着いた。香織はため息を一つ吐くと、廊下にいるのであろう転校生に声をかける。

「入っていいわよ」

「——はい」

廊下から鈴を転がしたような声が届き、扉が開いた。その瞬間、涼牙の頭に鋭い痛みが迸った。

「……………」

声を出さぬようにしながら、左手で頭を押さえる。幸い全員が転校生に集中している。涼牙の異変に気付く者はいない。

（なんだ……っ！ これは……！）

足音が響き、教壇のところへと転校生が来る。だが、涼牙はどんどん強くなる頭痛のせいで顔を上げることができない。

「——う、ゆ——で。——」

転校生の言葉が聞こえない。痛みをどんどん増していく頭痛に、涼牙は必死で耐える。

額に汗が浮かび、足が震える。自分に何が起きているのか、理解できない。

「——あ、——んは——く——に——」
「あ、——。——た」

香織と転校生のやり取りが少しだけ聞こえる。しかし、頭痛のせいで言っていることは全くわからない。

転校生がこちらに歩いてくる。その足音が聞こえる。

そしてその足音が、涼牙の隣で止まった。頭痛が、より激しくなる。

「ようやくお会いできましたね。涼牙さん」

「え——……？」

涼やかなその言葉だけが、何故か鮮明に聞こえて――

――涼牙の意識は、途絶えた。

夕日の光が窓から差し込んでくる。短い時間ではあるがこの時だけ、この学校の保健室は幻想的な空気を作り出している。その保健室のベットに横になっていた涼牙は、ゆっくりと目を覚ました。

「一体何があつたんだ……？」

すっかり痛みを引いた頭を撫で、涼牙は呟く。その瞬間、隣で声が上がった。

「よかった。目が覚めたんですね？」

涼牙の寝ているベッドの隣に座っていた少女が、安堵の息を漏らす。その姿を見た瞬間、涼牙は言葉を失った。

流れるような漆黒の黒髪に、吸い込まれそうな漆黒の瞳。整った顔立ち、間違いなく美人だった。大和撫子という女性がいるのならこんな女性なのだろうと、勝手に納得する。

だが見惚れていたのも一瞬。すぐに涼牙は我に返った。

「俺を看ていてくれたのか？」

初めて見る相手だが、ここにいるということは看病してくれていたということだ。

少女は涼牙の言葉に対して手を目の前で振り、苦笑しながら答えた。

「ずっとじゃありませんよ？ 私が声をかけた瞬間に倒れたから心配で、昼休みとかは見てたんですけど授業中は流石に放っておいていましたし……」

「いやそれでも礼は言わせて欲しい。——ありがとう」

涼牙はそう言つと、頭を下げた。見知らぬ相手であっても、礼節は尽くす。それは涼牙に取つては非常に大事なものだつた。
少女は照れたように頬を染めると、笑顔で頷いた。

「はい。どういたしまして」

いい笑顔だ。そんなことを思い、涼牙は今更のことを聞いた。

「そういえば、キミの名前はなんだ？」

「あ、やっぱり聞いてなかったんですね。転校してきた時に名前を言っただんですけど、涼牙さんはその時から苦しそつでしたし、そうじゃないかと思ってたんです」

「じゃあ、キミが転校生の？」

涼牙が重ねて聞くと、少女は頷いた。

「はい。鬼頭優飛きとうゆうひです。優しく飛ぶと書いて優飛。よろしくお願いします」

「ああ。こちらこそよろしく。俺は神谷涼牙。涼しい牙で涼牙だ」

自己紹介をし合う。それを終わると涼牙は鞆を持ち、ベッドから降

りた。

「こんな時間まで俺につき合わせてすまないな。送ろう」

日は既に傾きかけている。失踪事件のこともあるので、女子一人で家に向かわせることはできない。

だが優飛は、予想外のことを口にした。

「え？ でも今日から私、涼牙さんの家にお世話になるつもりなんですけど？」

「……………は？」

優飛は今何て言った？ 聞き間違いだとありがたい。だが涼牙のその願いも、一瞬で打ち破られることになる。

「ですから、涼牙さんの家にお世話になることになってるんです。三十郎さまがこの町に来るなら是非そうしろと言ってくださって」
「……………あの男はまたややこしいことを」

厄介な人物の名前を耳にし、唸るように涼牙は呟いた。

神谷三十郎。涼牙の祖父であり、道場の経営者兼家の持ち主である。一年ほど自分一人の全国温泉ツアーとやらに出かけていて会っていないのだが、一応祖父でありすべての決定権を持つ男である。

だがいくらなんでもそれは急過ぎる。そう涼牙が考えた時、優飛が鞆から封筒を一つ取り出した。

「涼牙さんに渡せと三十郎さまが」

「俺に？」

受け取って乱暴に封を開け、涼牙は中身を取り出す。そこには簡単

な文章が達筆で書かれていた。

『涼牙へ

事情があつて受け入れることになった。その子と同棲するように。拒否権はない。以上。

三十郎より。愛は一切込めずに』

その文章を見た瞬間、涼牙はその紙を思い切り破り捨てた。すぐにゴミ箱に放り込む。

「あの……」

その光景を見て不安になったのか、優飛が不安そうな表情をする。涼牙は慌てて手を振って否定した。

「いや大丈夫だ。少しイラッときただけだから。大丈夫。キミは下宿していい」

「よかった。断られたらどうしようかと思ってしまいました」

安堵の表情を浮かべる優飛。だが涼牙の内心は穏やかではない。どういふ経緯で出会ってそんな話になったのかはわからないが、そういう話なら断れない。同い年の女の子と同棲というのは少しどころかなり問題だが、幸いあの家は広い。自分が離れを使って優飛に母屋を使わせれば問題ないだろう。

そもそも、涼牙の生活は三十郎の財産と両親の遺産によって成り立っている。完全に養われている側の存在なのだ。その相手が決定したことを覆せるはずもない。

面倒ではあるが、無視もできない。ため息を吐くと、涼牙は改めて優飛に言った。

「あの男に言わなければならないことは山ほどあるが、まあそれは鬼頭には関係ない。とりあえず、よろしく」

「はい。それと私のことは優飛とお呼びください。私も涼牙さんと呼びますけど、いいですか？」

握手を交わしながら、優飛が言う。涼牙は頷いた。

「わかった、優飛。そもそも親しい友人はみんな涼牙と呼んでいるからそのほうがいい」

「はい！」

嬉しそうに優飛が笑い、二人は保健室を出る。廊下を歩く途中、優飛は涼牙に嬉々として話しかけていた。

「三十郎さまから話を聞いて、会ってみたいと思っていたんです。ちょうどこちらに転校することになっていて、楽しみにしていたんですよ？」

「それはまた光栄だが、優飛はどこであの男に会ったんだ？」

「新潟です。私の故郷は東北なんです」

こちらを見上げながら優飛は言う。優飛は身長がそこまで高くないので、どうしても涼牙を少し見上げる形になってしまう。

新潟。東北地方の県名を聞き、涼牙は感心した。

「それはまた遠いな。大変だっただろう？」

白鷺市は関西と関東の境界にある田舎町だ。そんな場所に来るのは相当大変だったはず。

優飛は頷き、感慨深げに言葉を紡いだ。

「大変でした。この町に着いたのが昨日の夜十一時で、涼牙さんの家もわからなかったのでホテルを探して泊まったんですけど、家出少女と間違えられて警察の方が来て事情聴取されて……」

「かなり大変な目に遭っているな」

感心したように涼牙は呟く。この少女、意外とワイルドだ。

「あ、でも大丈夫でしたよ？ 白鷺高校に連絡を入れてもらったら一人で転校してきたことを警察の方に教えてくれて、謝罪の意味も込めてとかでホテル代を代わりに払ってもらっちゃいました」
「たくましいな。凄いと思うぞそれは」

素直に賞賛の意志を涼牙は示す。実際、凄い話だ。

この町の警察は人情に厚い。田舎特有のものなのか、かなり民間と繋がりがあある。そのため、誤解があつた時などは誠意を持って対応してくれる。

優飛もそうだったただけだろうが、ホテル代を払ってもらったとは運がいい。

優飛は楽しそうに自分のことを語ると、今度は涼牙のことについて聞いてきた。

「そういえば涼牙さんって剣道をやってるんですよね？」

「何故それを——ああ、あの男か。確かに剣道はやっているな。この町の子供たちにも教えているし……」

自分の掌を見つめながら、涼牙は言葉を紡いでいく。剣道をやっていることは事実で、道場を開いているのも事実だ。

涼牙は毎週決まった曜日に剣道の道場を開いている。意外と門下生は多く、ほとんどが小学生だが、たまに年配の人たちも来る。結構繁盛しているのだ。

「だが部活はしていない。三年前に少しあってから、やらないようになった」

「そうなんですか？」

「俺は群れるのが苦手だから、仕方がない。部活というのは、どうも――……」

突然、涼牙の言葉が途中で止まる。全身を駆け巡る違和感が、彼の言葉を止めさせた。

足を止める。そしてゆっくりと振り返ると、そこには誰もいなかった。

だが、おかしい。――人の気配がなさ過ぎ。

「どういうことだ？ 何故、部活の声が聞こえない？」

涼牙が呟く。保健室にいた時から密かに感じていた違和感が、これだ。

時間は五時前後。まだ完全下校の時間には早い。部活動の声が聞こえるはずの時間だ。それなのに、吹奏楽の演奏も体育系部活動の掛け声も聞こえない。

ましてや教員の一人もいないとは、おかし過ぎる。

「……そういえば保険医もいなかったか。一体何が起きている？」

全身を警報が駆け巡る。この状況から逃げると命令してくる。

自然体で涼牙は身構える。すると、不意にその隣にいる優飛が口を開いた。

「人払いの結界……こんなものを秘密裏に展開するとは相当な術者ですね。どうやら涼牙さんに引き寄せられたのは私だけではないみ

「たいです」

「優飛？」

隣にいる少女に、涼牙は話しかける。真剣な表情の優飛は、涼牙に視線を向けると鋭く言った。

「詳しい説明をしている暇はありません。私たちは結界に囚われま
した」

「は？ 一体何を——」

「来ましたよ」

涼牙の言葉を遮り、優飛が振り返る。涼牙も振り返って、自分の目を疑った。

「……いつから俺はファンタジー世界の登場人物になった？」

思わずそんなことを呟いてしまうくらいに、目の前の現実の意味がわからなかった。

そこにいたのは、白い狼。人間一人くらいなら簡単に噛み殺せてしま
いそうなほどに巨大な獣だった。

「式神……。相手は陰陽術の使い手ですね」

「は？ 何だそれは？」

冷静に隣で呟く優飛に、涼牙は言葉を投げかける。だが優飛はその
問いには答えず、弾かれたように叫んだ。

「後ろに下がってください！」

「は、え——」

全く思考が追いつかない。半ば呆けたように涼牙は反応し、ほとんど反射だけで後ろに飛び退いた。

ガツンと、鈍い音が前方から響いてくる。一瞬で涼牙の目の前に肉薄してきた白い狼が、廊下を爪で粉碎した音だ。コンクリートが碎け、無骨な灰色が露になる。

（今日ほど、剣道に感謝したことはないな）

こちらを睨んでくる狼を見据えながら、内心で涼牙は呟いた。瞬間の反応と、この異常事態に対して平静でいられるのはおそらく剣道のおかげだ。普通ならここで混乱しているところだろう。

だが、だからといって状況がどうにかなるわけでもないが。ふう、と、涼牙は息を吐いた。その瞬間。

「涼牙さん！ 集中してください！」

優飛が叫び、同時に狼が涼牙に向かって飛びかかる。

——やばい！

生存本能と剣道で鍛えた反射神経が、その牙と爪を避けようと体を動かす。だが息を吐いた隙が致命的となり、避けきれない。

白銀の爪が、涼牙に迫る。死が、涼牙を誘い込む。

ドクンと、心臓が高鳴った。同時に、脳が焼けるように熱くなる。何かが自分の中を駆け巡り、狂わせようとする。

？何を恐れる??

一刹那の出来事のはずなのに、そんな声が聞こえた。そして——

「涼牙さん！」

その叫び声と共に、優飛が涼牙の前に躍り出た。そして、その掌が正確に狼の下顎へと叩き込まれる。

そして聞こえてきたのは、パンと狼の顔が弾けた音。だが吹き飛んだ狼の頭から血が流れることはなく、床に倒れると同時に狼は塵となって消えた。

その様子を見届けると、優飛は涼牙に向かって微笑んだ。

「大丈夫でしたか？」

「ああ、大丈夫だ。……一体なんだ？ 今のは」

優飛に答えながら、涼牙は狼のいた場所を見つめる。そこには何の痕跡もなかった。

だが、狼が砕いた地面だけは残されている。それが幻ではないことを示していた。

優飛は真剣な表情になり、涼牙に語りかけるように言葉を紡ぎ始めた。

「今のは式神です。霊術師の中でも陰陽道に通じる者たちが多用する使い魔の術式。おそらく、私と涼牙さんを狙ったのでしょう」

「わけがわからない。そもそも、優飛。キミは何者だ？」

頭を振り、すべての問題を一度置き去りにして涼牙は一番の疑問を口にした。

優飛は何かを知っていて、しかも狼を何の躊躇もなく叩き潰した。まずその正体から聞いておきたい。

そして、優飛はその問いにあっさりと答える。

「私は吸血鬼です。人間をやめた、不浄の化物ですよ」

この日の邂逅が、神谷涼牙から平和な日常を奪っていった。
だがそれはいずれ訪れるべきものであり、少し早くなっただけ。

——物語が、加速する。

第一話 吸血鬼（後書き）

というわけで、第一話です。

随分と長くなってしまい、すみません。

楽しんで頂けると、幸いです。

感想、ご意見お待ちしております。

ありがとうございます。

第二話 戻らぬ日常

適当に冷蔵庫から水を出し、二つのコップに注ぐ。この家には茶と水ぐらいしか用意されていない。

「水しかなくてすまないが」

「いえ。ありがとうございます」

申し訳なさそうに言う涼牙に、苦笑しながら優飛は答える。涼牙と優飛はテーブルを挟んで向かい合うように座っている。一瞬の沈黙を挟み、涼牙が口を開いた。

「帰りにも説明してもらったが、つまり優飛。キミは霊術師であり、吸血鬼となった魔の存在であるということだな？」

言いながら、涼牙は自分の口に行っていることについて苦笑した。霊術師だの吸血鬼だの、常識を疑う単語ばかりだ。

ただどこかこの言葉は気にかかる。理由はわからないが。優飛は頷くと、言葉を紡ぎ始めた。

「まず、霊術師とはあらゆる生命が宿す『霊力』という力を用いて奇跡を起こす存在です。全身を覆う血管と同じように全身に張り巡らされる霊力の通り道……『回路』を利用して方程式を組み上げ、世界に干渉します」

「……すまないが、もう少しわかりやすく頼む。意味がわからない」
手を上げ、涼牙は言う。正直自分は頭がいい方ではない。わけのわからないことを並べられても理解できないのが現実だ。

優飛は苦笑すると、少しだけわかりやすく話し始めた。

「つまりですね。生物は意識的に認識していないだけで、全員が靈力という力を持っているんです。それを使って本来ならありえないような出来事……例えば道具なしで火を生み出したり、先ほどの狼のような使い魔を作り出すのが靈術師です」

「魔法使いみたいなものか」

頷きながら、涼牙は自分なりの解釈をする。手順はあるが不思議なことができる。それは世にいう魔法使いだろう。

だが優飛はその言葉に対して苦笑しながら首を横に振った。

「魔法使いと靈術師は違いますよ。靈術師には限界があります。方程式を構築してもそれは一時のもので、世界の原理法則を一時的に騙すことしかできません。大規模なことをするのは難しいんです」

「原理法則というのが何なのかはわからないが、要するに万能じゃないということか」

涼牙が呟く。その言葉に、優飛は頷いた。

「魔法使いに不可能はありません。現存する魔法使いは世界でも五人を数えませんが、彼らは絶対的な力を行使できます。その気になれば、一人で国一つ滅ばせますよ」

「それはまた恐ろしいな」

まさに人間兵器だ。そんなのが本当に存在しているなら、恐ろしいことこの上ない。

本当に。その単語が浮かんだ瞬間、涼牙の脳裏に希望的な観測が宿った。

（これはすべて、夢なんじゃないか？）

実は霊術師とか吸血鬼とかはすべて夢の中の出来事で、これは全部自分の妄想なんじゃないだろうか？
そんなことを考え、涼牙は首を横に振る。

（馬鹿か俺は。あれは本物だ）

心中で呟き、涼牙は包帯の巻かれた左手を見る。実はあの時、狼の爪が左手の甲に届いていたのだ。そこから流れた血も、痛みもすべてが現実だった。

そうでなければ、涼牙はこんな話を信じたりはしない。

目の前であの狼を優飛が排除したところを見ていなければ、信じたりはしなかった。

涼牙は水を飲み干し、次の質問をする。

「それで、吸血鬼というのは？」

「文字通り、血を吸う化物です。もっとも私は真祖しんそですから、機能はありますけどその必要はないんですけどね」

「機能があるのに必要じゃないというのは変じゃないか？」

涼牙は疑問を口にする。機能があるということは、必要であるということと同義だ。吸血能力があるのなら、それを使わねばならないのが道理のはず。

優飛もそのことは説明するつもりだったようで、言葉を続けた。

「昔は必要としていたそうですね。ただ、長い年月を過ごすうちに必要でなくなつたみたいです」

「長い年月か。……吸血鬼と人間の違いはそれだけか？」

「そうですね……吸血のために発達した犬歯と、人とは隔絶した力の満ち欠けによる力の变化と長い寿命、それと普段隠している翼ぐらいでしょうか？　あくまでこれは私のような真祖に関してですけどね」

考えながら、優飛は言う。涼牙にはそれで十分だった。人と隔絶した力というのは、おそらく先程見たあの力だろう。女の子の細腕で狼の頭部を粉碎するなど、人間業ではない。そんな風に思考を巡らせた後、涼牙は呟くように言った。

「……これだけは聞いておきたいんだが、あの男も霊術師か？」

短絡的な考えだが、霊術師にして吸血鬼であるらしい優飛を家に住まわせようとしたあの男……神谷三十郎も、もしかしたら霊術師なのかもしれない。そしてその答えは、かなり簡単に返ってきた。

「はい。凄腕の霊術師ですよ？　だから涼牙さんもそうなんじゃないかと思っただけですけど、違っただけで驚きました」
「……あの男、絶対楽しんでるだろうな」

苦々しく涼牙は呟く。あの男は本当に何を考えているのだろうか？

（……考えてもわからないか）

だがその疑問に対する答えは一瞬で出た。あの変人の思考を考えたところで、時間の無駄でしかない。

「しかし十年近く共に過ごしてきたのに気付かなかったとは、俺もとぼけているな。普通なら気付くそんなものだが」

愚痴を零すように涼牙は呟く。しかし、優飛はそれを否定した。

「霊術師は世界の裏側に存在する、隠れた者たちですから。そう簡単に素性を明かしたりはしませんよ。ただ、普通は親類に対しては頃合を見て研究を授けたりするものなのですが……」

「あの男が他人に何かを任せる姿なんて想像もできないな」

「確かにそうですね」

優飛が苦笑する。あの男は他人に頼るような男ではない。霊術師のことを涼牙に黙っていた理由は不明だが、どうせろくなことではないだろう。

そして、こうしてある程度涼牙が霊術師に関して知識をつけた頃を見計らって、一番の問題について優飛が語り始めた。

「昼間のはおそらく、私たち両方を狙った襲撃だと思います。それもおそらく実力を測る程度のも。近いうちに次の攻撃があるはずですよ」

「ちよつと待て。俺もだど？」

聞き捨てならないことを聞き、涼牙が反論する。今でこそ知識を入れたが、涼牙は本来ただの学生である。狙われる理由はないはずだ。

だがその希望的観測も、一瞬で打ち破られる。

「私よりもむしろ、涼牙さんが狙われているんだと思いますよ。あの式神、涼牙さんを狙っていましたから」

「……なんでまた、そんなことになるんだ？」

呟きながら、その通りだと納得する。あの獰猛な狼は間違いなく涼

牙を狙っていた。つまり、狙われているのは涼牙ということだ。

だが勿論、涼牙に狙われる心当たりはない。ましてや霊術師などという規格外から狙われることなど、ありえないの一言だ。

優飛は呻くような涼牙の問いに考え込むように沈黙した後、ゆっくりと口を開いた。

「……私にはおそらくですが、狙われる理由がわかります。ですが今は話せません。不快だとは思いますが、聞かないでいてくれませんか？」

「理由があるんだな？」

「はい」

優飛の答えには、一切の迷いもなかった。涼牙はため息を漏らすと、頷いた。

「理由があるなら仕方がない。聞かないでこつ」

正直気になるといえば気になる。だが本人に話す気がないのなら、聞いても無駄だ。強引に自分をそう納得させ、涼牙は席を立った。

「すみません」

目の前で、優飛が謝る。涼牙は苦笑した。

「謝られることじゃない。狙われる理由は俺にあるんだ。要するに俺が悪いだけなんだから優飛が謝る必要はない」

「ですが……それは……」

言いたいけれど、言えない。そんな様子を全身で示しながら、優飛が唸る。

自然と、涼牙の口元も緩んだ。

「とりあえず夕食にしよう。大したものは作れないが、勘弁してくれ」

言いながら、涼牙は冷蔵庫を開ける。作るのは、三人分だ。

「ありがとうございます」

どこか嬉しそうに、優飛は頷いた。涼牙は、電気コンロをつける。妙な話になったな、などと考えながら。

チャイムが鳴らされる。涼牙は料理を並べ終わると、玄関へと向かった。

「やつ！」

「ああ。入れ」

「お邪魔します」

「邪魔をするならご遠慮願おう」

「言葉の綾よ」

来訪者——藍那と何度目かもわからない軽口の叩き合いを演じ、二人は居間に向かう。そこにはすでに、料理が用意されていた。それを見て、藍那が簡単な吐息を漏らす。

「ほえ……。何があつたの？ 偉く豪華じゃない」

「ああ。それは当たり前だ。歓迎会の意味も込めているからな」

「は？……ってちよつと待って。何かが変よ」

不意に、藍那が足を止めた。そして食卓を眺めながら、何事かを思案し始める。

そして、彼女は辿り着く。

「わかつたつ！ 一人分多いのよ！」

遅すぎる結論へ。

「まさか二人分あたしに食えと？ あんたあたしを太らす気？」

「お前を太らせて俺に何のメリットがある。今日からはこれでいいんだ」

エプロンを脱ぎながら、涼牙はため息混じりに言う。その説明を求めようと藍那が口を開きかけた時、答えが顔を出した。

「涼牙さん。荷物は母屋に運んでおきましたけど、いいですか？」

ひょっこりと、長い黒髪の美少女が顔を出す。涼牙は頷いた。

「ああ。俺は離れを使っているからな。母屋を自由に使ってくれたらいい。後で掃除に行くから、待っていてくれ」

「え、でもそこまでさせるわけには——」

「薄汚れた部屋に女の子を住まわせるわけにはいかないだろう？ いいからやらせてくれ。ちょうどいい機会でもあるしな」

優しい笑顔で、涼牙は言う。優飛は反論できず、小さく頷いた。

と、そこで涼牙は重要なことを思い出す。

「そ、そ、そ……」

涼牙の後ろには、震えながら立つ藍那の姿。涼牙は慌てて口を開いた。

「ああ、藍那。紹介——」

「その子一体何なのよ——ッ！」

一際大きな叫び声が、神谷家の広い家に響き渡った。

余談だが、翌朝涼牙は彼のご近所さんに昨日の叫び声はなんだったのか、と聞かれることになる。

夕食を終えて、少しした頃。優飛と藍那は真剣にテレビドラマを見ていた。その後ろでは、涼牙が食器を洗っている。優飛はわからないが藍那は家事が致命的に駄目なので、涼牙はやらせようと思っていない。

(……一瞬で仲良くなったな)

二人に視線を送りながら、涼牙はそんなことを考える。優飛を紹介したら「不潔だ」だの「不純だ」だのと最初は藍那も喚いていたのだが、それもすぐに収まった。今ではもう、すっかり仲が良くなっている。

二人のしているドラマは、恋愛ものだ。故郷で幼馴染と再会した少年が、町の住人と触れ合いながら少しずつ想いに目覚めていく物語。現実にあるかと言つとありえない類のものだが、異常なくらいに視聴率がいいらしい。平均視聴率は二十%を超えるのだとか。

変だな、と涼牙は唐突に思った。

今、自分が眺めている光景。それは何の変哲もない日常の一コマだ。女子二人がドラマを見ている後ろで洗い物をするというのは少々（かなりか？）変ではあるが、別に変わったところがあるわけではない。

先程聞いた霊術師の話も、こうして聞いていると大したことじゃないと思えてくる。

（気負い過ぎていたのか？）

あの異常な状況に出くわして、わけがわからないままに狙われていると言われて。

流されて、知らず知らずのうちに気負っていたのだろうか？

（俺らしくない）

自分の状況を確認すると同時に、涼牙は苦笑した。どのようなことであっても、受け流し、のんびりとこなしていく。それが、神谷涼牙だ。

群れず、一人で。深く相手に関わらず。

そうして、生きてきた。親がおらず、頼れる人がなくなった地獄の中で。自分は一人で生きられるとそう言い聞かせて、そうして自分を保ってきた。

だから、こんなのは自分らしくない。もっと自由に。それが流儀のはずだ。

ならば自分らしく、のらりくらりと切り抜けよう。涼牙はそう決めると、洗い物を終わらせた。同時に、ドラマも終わる。

「面白かった〜！」

「初めて見たんですけど、面白いですね」

「初めて？　嘘お！　これ凄い有名なのよ？」

優飛の初めてという単語に過敏に反応し、藍那が驚く。それを少し離れたところで聞いていた涼牙も少し驚いた。

今のドラマは、しょっちゅう特集が組まれるような人気ドラマだ。原作が小説とかで、その小説も馬鹿みたいに売れている。この国は基本的に流行り物が好きだから、そういったことに興味がない涼牙でさえ見たことぐらいはある。

だが優飛はそれを見たことがないと言った。続けて。

「だって私の家、テレビがないですし」

今のご時世では考えられないことを、優飛は言い切った。

「……………」

「……………」

流石に涼牙と藍那も言葉を詰まらせる。今の時代でテレビがない家とは、どんな家だろうか？

そんな得に意味もない思索に涼牙は耽る。すると、優飛の目の前にいた藍那がその肩を掴んで言った。

「頑張れ」

……何を頑張れというのだろうか？

涼牙は思わずつつこみを入れそうになった。だがそこは自制する。優飛はその言葉の意味を図りかねたのか、首を傾げ、最後には頷いた。

「はい！」

満面の笑顔だった。……なんとなく、うまくやっていけそうな気がした。

鬼頭優飛は、学校内ではかなり目立つ存在だった。

元々、転校生などありえないに等しいくらいの確率でしかやってこないような学校だ。加えてあの容姿。大和撫子を髣髴とさせるその容貌に男子生徒は必ず振り向いてしまう。

そしてその少女と一緒に登校できるという周囲の男子に妬まれて殺されそうならいいいいポジションにいる少年、神谷涼牙は眠たそうに目を擦りながら優飛と共に学校へ向かっていた。

「眠そうですね」

微笑みながら、優飛が涼牙に言う。どこかからかっているような仕草だ。

涼牙は木刀の入った袋と荷物を背負い直しながら、眠そうに応じる。

「昨日の夜の鍛錬に集中し過ぎてな……。気がついたらほとんど朝だった」

「涼牙さん、凄かったですね」

「あれぐらいやらないと意味がないからな。優飛は大丈夫なのか？昨日は俺に付き合っただけ寝るのが遅かっただろう？」

「あ、いえ私は――」

「りょーがーっ！」

優飛が涼牙の言葉に応じようとした時、その言葉を掻き消して一人の乱入者が現れた。涼牙と優飛の前、道路の中心に立つその男は朝日を後光のように背に浴びて腕を組んで立っている。

「……………」

自分の名を呼ばれ、涼牙はその男の正体を見極めようとするが逆光のせいで顔がわからない。だが、次の瞬間には相手が教えてくれた。

「な・に・を！ 朝からラブラブの夫婦登校しとんねんっ！」

「ああ。このエセ関西弁は誠也か。おはよう」

「うん。おはようさんや——って違っつ！ 爽やかに挨拶しとる場合やない！ それとわいはエセ関西人ちゃうわ！」

逆行でシルエットしか見えないエセ関西人は、地団太を踏みながら叫ぶ。登場した時は決まっていたのに、今はもうただのやられ役Bだ。

涼牙は付き合いきれんといった様子で、冷ややかに言葉を紡ぐ。

「一人漫才なら文化祭の壇上でしたらどうだ？ 生憎と俺はお笑い番組で笑えるような性質じゃない。お前のギャグでは笑えん」

「おっと、そりゃ聞き捨てならんなあ。わいのエンターテイメント精神を馬鹿にしたらアカンで？ その気になつたら鉄仮面の一人や二人、全力で笑わしたる」

「それは凄い。どうやってだ？」

「下ネタオンリーで」

グッ、と親指を立てて誠也が（何故か）誇らしげに言う。涼牙はポケットから携帯電話を取り出した。

「待っている。今すぐ警察を呼ぶ」

「何でや？」

「ここに変態がいるからな。今すぐ逮捕してもらって留置所で絞ってもらおうと思う」

「冗談やる？」

「一応な」

絶妙な軽口の叩き合いを演じ、二人は視線を交し合う。絶妙すぎる掛け合いのため、優飛はただ見ていることしかできなかった。

その優飛に誠也は気付き、手をひらひらと振りながら軽薄な口調で話しかけた。

「話は聞いとるで。自分が優飛ちゃんやな？ わいは誠也いうねん。涼牙とは中学時代からの腐れ縁やな。昨日は用事があって会えへんかったけど、一応同じクラスやさかいよろしゅうな」

「あ、はい。よろしくお願いします」

優飛は律儀に頭を下げる。誠也は嬉しそうに笑うと、うんうんと頷いた。

「やっぱ真面目な子もええなあ」

「本当に節操ないなお前は」

呆れたように涼牙は言い、腕時計を見る。……時間は結構過ぎていた。

「そろそろ行こう、優飛。このエセ関西人に付き合っていると遅刻する」

「はい。わかりました」

かなりあっさりと優飛は受け入れ、二人は通学路に戻る。元々涼牙たちはここで曲がるつもりだったのだ。変人に絡まれて突っ立っていただけで。

二人がさっさと行こうとすると、案の定誠也が騒ぎ出した。

「待てやーっ！ まだわいの目的は果たされとらんで！」

「また馬鹿なことでも企んでいるのか？」

呆れながら、涼牙は律義に立ち止まる。なんだかんだいって、人が良いのがこの少年の特徴だ。

そして思い立ったら即行動なのが、彼の悪友である誠也の長所であり短所である。

「馬鹿言うんやない！ アホって言えや！」

「どうでもいい」

「よくないわ！」

「くだらない会話だったら俺は行くぞ」

今度こそ本当に行こうとして、涼牙は改めて歩き出す。その背中に、やたらと芝居のかかったエセ関西人の声かけられた。

「甘い、甘いで涼牙。わいの好きなスイーツ各種よりも激甘や！」

「お前が甘い物好きなのは知ってる」

振り向かず、面倒臭そうに涼牙は答えた。二夜誠也というこの少年は、甘いもののためなら必死で戦う熱血漢なのである。……どうでもいいが。

そしてその熱血漢は、ポーズを取りながら叫んだ。

「自分だけが幸せを教授できると思うんやないで！ 総員、出でま

せえっ!」

『おうつ!』

同時に、周囲からいくつもの人影が現れる。それは、全員が涼牙のクラスメイトの男子だった。思わず涼牙はつつこむ。

「いや、何だこれは?」

「ひとおおおおうつ!」

『男とは、孤独を愛する狼なり!』

「無視か」

涼牙のつつこみは完璧に無視される。誠也の号令と共に、男子高校生たちが往来の真ん中で叫んでいた。

「ふたああああうつ!」

『男とは、愛を捨てる侍なり!』

「みiiiiiiiiうつつ!」

『我らは、漢おとこに生きる兵つわものなり!』

そこまで男子生徒が叫んだ後、大きく息を吸い込んで誠也が叫んだ。

「我らは鋼よりも固き絆で結ばれし最強の同盟っ! 幸せ壊し隊なりiiiiiiiiっ!」

「意味がわからん」

馬鹿丸出しの叫びを、涼牙は一瞬で切り捨てた。毎度毎度ご苦労なことである。……何故か隣では、優飛が拍手をしていたが。

誠也はしみじみと頷くと、首を振りながら口を開く。

「ええか、涼牙。この同盟はな、幸せな奴を消すために存在するね

ん」

「最低の同盟だな」

「しかも、幸せか否かは隊員たちが独断と偏見で決定する。そいつの反論は一切受け付けへんのや」

「迷惑な同盟だな」

先程と少し言葉を変え、涼牙は一応つつこみを入れる。だが、無視された。代わりに誠也はこちらを向き、楽しそうに聞いてくる。

「ここまで言えばわかるやろ？」

「皆目見当もつかない」

「そう！ 自分は幸せだと認定されたんや！」

「人の話を聞け」

無駄と知りつつもつつこみを入れる涼牙は、やはり人が良い。色々な意味で。

だが相手はそんなことをいちいち考えない。意味不明な言葉は続く。

「よって、消えろや涼牙——ッ！」

『うおおおおっ！』

誠也が叫び、周囲の隊員たち——涼牙と優飛、誠也のクラスメイト——が突進してくる。

「仕方がない」

涼牙は眩き、鞆を下ろした。四方より、隊員たちが突っ込んでくる。

「涼牙さん！」

流石に心配になったのか、優飛が叫んだ。涼牙は一步前に歩み出ると、短く答える。

「いつものことだから大丈夫だ」

その涼牙の逃げ場を塞ぐように隊員たちは円形になって涼牙を取り囲む。見事な連携だ。

そしてその中の一人が涼牙に掴みかかった瞬間。

——バシッ！

もの凄く痛そうな音が響いた。男子生徒の手首が、弾かれたように浮き上がる。

「あれ——」

「……………」

一瞬のことにわけがわからず呆然とする男子生徒。涼牙はその隙を見逃さず、袋に入れられたままの竹刀を横に振るった。たまらず、男子生徒が道路の脇に吹き飛ばされる。

「痛つて~~~~~！」

「中里隊員！　しつかりするんだ！」

脇腹を殴られて転げ回る男子生徒の側に、別の男子生徒が駆け寄る。その光景を見て、周囲の隊員たちは少しだけ後退した。

涼牙は竹刀を取り出すと、それを誠也に向けた。

「俺に武士道を説くことが無駄なことぐらい、お前は知っているはずだな？　相手がクラスメイトでも、危害を加えてくるのなら俺は

容赦しない」

「とても剣道しとる奴の言葉とは思えへんなあ」

「ほっといてくれ」

軽口を叩き合い、涼牙は竹刀を正眼に構える。すると、目に見えて周囲の男子生徒が動揺し始めた。

周囲に不穏な空気が漂い、誠也の隣に一人の男子生徒が歩み寄る。

「隊長。如何いたしましたしょう？」

「倉本副隊長。自分、こういう場合の作戦が一つしかないこと知ってるか？」

「いえ、知りませんけど」

倉本が首を傾げる。誠也はそれを聞くと、凶悪な笑みを浮かべた。

「……嫌な予感がする」

それを見て涼牙が小さく呟いたが、その言葉は誰にも届かない。誠也は真っ直ぐに涼牙を指差し、宣言する。

「覚悟しいや。涼牙」

「人を指差すな」

「全軍、わいの後ろに退避！ 秘密兵器を使うで！」

やはり涼牙の言葉を見無視し、誠也が高々と宣言する。すると、隊員たちが騒ぎ始めた。

「隊長！ あれを使う気ですか！」

「無茶です！ 隊長も死にますよ！」

「ちよつと待て。何だその危険な叫びは？」

涼牙の呟きも最後に混じった隊員たちの静止の言葉を受け、ゆつくりと誠也は頷いた。

「男にはやらかなアカン時があるんや！」

「少なくとも今じゃない」

「わいが開発した秘密兵器、とくにご覧あれええええっ！」

「一度でいいから俺の話を聞け」

無駄と知りつつ涼牙は口を挟むが、誰も聞いていない。いや、優飛だけは聞いていたが苦笑するだけだった。

誠也が隊員たちから何やら大きい袋を渡される。誠也はその中から玩具のような形をした爆弾を取り出した。

「……爆弾、ですか？」

涼牙のつつこみよりも小さい声で優飛が呟く。すると、誠也は嬉しそうに頷いた。

「せや。名を、？撲滅爆弾十一号？いうてな。バラエティー番組でよく使われる胡椒爆弾やら唐辛子爆弾やらに加え、山葵に辛子。ドリアンのきつつい匂いもプラスした拳句に催涙スプレーも仕込んだ究極の爆弾や」

「ちよつと待て。それは最早兵器だ。法律的に大丈夫なのか？」

「安心しい。食べ物を混ぜることは法律に反してへん。催涙スプレーかて合法や。というわけでこの爆弾は法的に問題あらへん」

言って、誠也が叫ぶ。

「有効半径は百メートル！ 往生せいや涼牙ああああっ！」

「周囲への迷惑を考える馬鹿野郎！」

流石の涼牙も大声を張り上げる。鞆を持ち、逃げる体勢に入る。だが間に合わない。誠也は爆弾を地面に叩きつける。

「炸・裂っ！」

ダァンと破裂する音と共に、周囲に煙が撒き散らされる。すでに退避していた隊員たちは後ろの方でそれを見守っていた。

「くっ！」

優飛の手を取り、涼牙は走り出す。だがやはり煙の方が速い。

「ぶわつくしよい！ どうや涼牙——って喉が痛い！ 目も痛い！ 鼻が何かツーンとする！ めっちゃ臭いし！ キツイわこれ！ あ、でもわい今輝いてる！ 笑いをとれとるはずや——ってなんか気管に変なモンが」

爆心地の中心では、自爆した誠也が叫んでいる。馬鹿丸出した。あんな風になつてたまるか——そんな気持ちで涼牙は優飛の手を引いて走る。煙が、二人を押し包もうと迫ってくる。

そして、もう逃げられないと涼牙が半ば諦めた時、急に優飛が振り返った。

「おい——」

涼牙が振り返り、手を引こうとする。だが、優飛は自由な方の手で自分の眼前に何やら印を結び始めた。一つ印を結ぶごとに、空中に幾何学的な文様が浮かび上がる。

「——オン」

三角形の頂点のように三つの文様が浮かび、優飛が起動言語を唱える。

突風が、吹き荒れた。

空中に現れた三つの文様と、それらを正三角形の形に繋ぎ合わせる光の線。そこから凄まじい勢いの風が吹き、煙を吹き飛ばした。その結果を見届け、優飛が振り返る。

「行きましょう」

「あ、ああ……」

涼牙は頷き、優飛と手を繋いだまま走り出す。その後ろでは、クラスメイトの男子が全滅していた。

『ぎゃああつ！ 目が、目があつ！』

『これはヤバイって！ 鼻が死ぬ！』

『何か喉が痛い！ 喉が焼ける！』

『っ！かこれ臭えよ！ ドリアンってこんな匂いすんのかよ！』

朝の登校風景は、地獄と化していた。

昼休み。午前中の騒ぎのせいで涼牙を除く男子生徒は全員、午前中の授業を欠席した。涼牙は目撃証言から巻き込まれただけと判断されたのだ。

女子高に紛れ込んでしまった男子生徒の気分で涼牙は授業を受け、昼食を摂るために屋上に来ていた。四棟すべてにある屋上は風通しがよく、日当たりがいい。だが非常階段を使わねばならない手間のためあまり人気がない、隠れた昼食スポットだ。

そして涼牙は普段からここを一人で利用する生徒なのだが、今日は優飛もいる。

涼牙は鉄柵にもたれながら自分で用意した弁当を食べ、優飛に聞く。

「そういえば、朝のあれは霊術か？」

「はい。手で印を結ぶことで原理法則に干渉し、奇跡を起こす。人によってやり方は違うんですけど、私のは陰陽術を自己流に使いやすく改良しているので起動言語と印の両方が必要なんですよ」

「よくわからないが、別の術式もあるということか」

「はい。協会と呼ばれるヨーロッパ方面の退魔組織などはそれこそ魔法使いのように長い呪文を唱えて術を行使しますから」

「成程」

頷きながら、涼牙は詳しい話を頭に入れていく。ほとんどわからないが、霊術師というのがどういうものかは話から理解できた。

と、そこで涼牙は聞き覚えのある単語に気付いた。

「『きょうかい』と言ったが、それはキリスト教がどうかというあの『教会』か？」

「いえ、それとは別の組織です。一部では協力している面もあるでしょうが、協会は別物です。協力する会と書いて協会……彼らは古くより、大地に降りかかる災いを消してきました。魔女狩りや十字軍遠征、ナチスドイツによるユダヤ人迫害など、欧州で行われてきた異種族への弾圧さえも、霊術師の存在を明るみに出さぬためとしてなんの躊躇いもなく行ってきた者たちです」

「物騒な話だ」

涼牙は呟く。今の言葉は勉強が苦手な涼牙でも知っているような歴史的事実だった。現実を知らないから想像しかできないが、胸くその悪い話である。

優飛は頷くと、真剣な表情で続きを語った。

「ですが仕方のないことではありません。魔を討つための力として用いられてきた霊術。それが現実の技術として現れた時、世界はどうなると思いますか？」

「……戦争か。それも、物量の限界なき戦争。救いがないな」

優飛の問いに、静かに涼牙は答える。霊術とは、生物に宿る力を用いて行使する奇跡だ。逆に言えば、生物がいれば限界なく奇跡という現象を引き起こせる。

「だから私たちは秘密の存在なんです。世界の原理法則より外れながら、綻びという名の魔を討つ存在を世界は必要としました。そして秘密を保つため、霊術師は目撃者を生かしはしません。そういうシステムが出来上がっているんです」

「理解はできる。正直最初は霊術師のことも半信半疑だったが、朝のあれを見ては信じるしかないだろう。……優飛。お前も協会とやらの所属なのか？」

自分の弁当を片付け、涼牙は優飛を見据える。その目は真剣だ。

霊術師は秘密の存在。その理由は理解できるし納得もできる。誰でも今の話を聞けば目撃者を消す必要性を認めるだろう。

ならば——涼牙は？

優飛によって霊術師のことを教えられ、狙われる一般人。その存在は、消さねばならないのではないか？

暗に問いかけたその問いを優飛は理解し、頷く。真剣な表情だった。

「日本は協会の管理下にありません。この国に存在するのは、《十六夜八鬼》と呼ばれる十六の霊術師の一族と八の魔の一族による会合です。それらがこの国を管理し、秘密裏に魔を討ち滅ぼしてきました」

「だが、その会合とやらも目撃者を許しはしないだろう?」

「そうですね。普通なら許しはしません。ですが私は、すでに会合からは離反しているのですよ」

そう言つて、優飛は微笑んだ。どこか、寂しげに。

「会合も協会も、私を追っています。捕まる気は毛頭ありませんが、狙われる理由は十分にあります。それが、私に対する襲撃が納得できる理由です」

微笑んだまま、優飛は言う。美しい微笑みのはずなのに、どこかの姿は儚げだった。

涼牙は、呟くように問う。

「……ずっと、一人で逃げてきたのか?」

「え……?」

「昨日の化物のような相手から、お前はずっと一人で逃げていたのか?」

繰り返し、涼牙は問う。昨日感じた危機感は尋常ではなかった。いくら吸血鬼であつて力を持っていたても、一人では辛いはずだ。

優飛は呆氣にとられたように一度呆けた表情をすると、今度は苦笑した。

「覚悟の上でしたから。それにそう何度も襲撃されるわけではあり

ませんよ。私は大した術者でもないの、会合も協会も放置してくれています。秘密を守るといつても、霊術師の端くれである以上そう簡単に素性も明かせませんから」

「だがそれでも、辛いんじゃないか？」

誤魔化すように笑う優飛に、涼牙は食い下がる。優飛は困ったように頬を掻いた。

「優しいですね」

「目の前で辛そうにしている奴を放っておかないぐらいにはな」

立ち上がり、鉄柵の向こうに視線を送りながら涼牙は言った。優飛の表情が、笑みから驚愕へと変化する。

「目を見れば大体がわかる。昨日藍那と話をしていた時も、目の奥に憂いがあった。楽しんではいる。だが、心の底からではない。そんな雰囲気だった」

「……よく、わかりましたね」

「俺は親がいない、財産が残された子供だった。言い寄ってくる奴らが信用に足るか否か、五歳の頃から見極めなければならなかったからな。それなりに人の見分け方も覚えるさ。慣れてくればそいつの目を見ることで本質もわかってくる」

校庭で昼食後の運動をする男子生徒を見下ろしながら、淡々と涼牙は語る。不幸とも呼ばれる彼の境遇が手に入れさせた能力だ。彼自身、それなりに有用している。

もつとも、優飛のことで気付けたのは孤独と辛さのみ。その奥にある闇は見透かせなかった。……見透かす気もないが。

涼牙はため息のように息を吐くと、優飛に言った。

「正直最初は乗り気じゃなかったが、いい加減俺も腹を括ろつ。とりあえずは事が終わるまでは協力させてもらう」

「はい。ありがとうございます」

優飛は、無邪気に笑った。その瞳の中は、その時だけは憂いが消えていた。

「ん？」

騒がしい音を聞き、涼牙が視線を屋上にある扉へと向ける。瞬間、それが激しく開け放たれた。

「藍那に、ファイア……？」

突然現れたふたりの名を、ぼんやりと涼牙は呟くように呼ぶ。それと同時に、藍那が涼牙につかみかかった。

「ちょっと涼牙！　こんなところで何してんのよ！」

「何って、昼食を摂っていただけだが」

胸倉を掴まれ、鉄柵に押し付けられながら涼牙は律儀に答える。だが何故かそれが藍那の神経を逆撫でした。

「うつさい！　じゃあ何で優飛と二人っきりで昼食摂ってんのよ！」

「何でって……俺が優飛にここが穴場だと教えたんだ。優飛は転校生ということもあって注目を浴びているし、昼食ぐらい静かな場所だと思うてな」

これは事実である。美人であるため瞬く間に有名になった優飛は休み時間も質問責めにあっている。その中の質問に『涼牙との関係』

というものもあるのだが、涼牙はそんなことを知らない。
そしてその態度が、更に藍那を怒らせる。

「じゃあ何であたしを呼ばないのよ!」

「いや、お前はいつもクラスメイトと一緒に昼食を食べているだろう? だから——」

「そんな気を回さなくていいのよこの鈍感男っ! 馬鹿っ!」

叫ぶように言いながら藍那は涼牙を前後に激しく揺さぶる。そのせいで気分を少し悪くさせながら、涼牙は呟くように言った。

「……頼むから怒っている理由を説明してくれ」

だが、その言葉は届かない。

そしてそれを苦笑して見守っていた優飛に、金色のポニーテールの少女が声をかける。

「すまない。騒がしくて。私はフィティア・レウ・クラスハーケン。クラスは違うが、一応同じ学年だ。フィアと呼んでくれたらいい。留学生でな。何かと注目される」

「変わってますね。こんなところに留学するなんて」

「それはお互い様だ。お前こそ、こんな田舎に転校して来ているだろう?」

「それもそうですね」

フィアの微笑みに対し、優飛も微笑みを返す。要は二人とも変わり者だということだ。

そして優飛は微笑んだまま、手を差し出す。

「鬼頭優飛です。優飛とお呼びください。世間知らずの小娘ですが、

どうぞよろしく願いしますね」

「小娘か。それなら私も同じだ。よろしく頼む」

フィアがその手を握り、頷く。二人の間に、友情のようなものが構築された。

だが、二人の目の奥に宿るのは疑心。しかし、それに気付く者はいない。

「次からはあたしも呼びなさい！ いいわね！」

「わかった……わかったから……。酔う……」

人の本質を見抜ける少年は、昼食を吐き出しそうになっていた。

漆黒の闇の中に金色の月が浮かぶ夜、白鷺市に唯一存在する神社へと続く石段の前で、ジャージを着た一人の少年が眠たそうに目を擦る。

その少年は一度欠伸をすると、楽しそうに背後へ話しかけた。

「どうやった？」

「どうもこうも……不気味としか言いようがない」

そこには少年しかいなかったはずなのに、いつの間にか一人の少女が現れていた。だがその姿はジャージ姿の少年とは違い、戦闘服を纏っている。

長い白色のスカートに、白い衣服を着た上に白銀の胸当て。その上着として黒い袖の短いシャツを着ている。だが何よりも目を引くの

は、その右手が握った強大な盾だ。

両手を保護するように装着された黒い指だしグローブ。その右手が握るのは、巨大な紅蓮の盾。右腕全体で操らねばならない、ファイアの体を隠せそうなほどに巨大な盾。

その盾を見、少年が苦笑する。

「いつ見ても仰々しいなあ、それ。宝具やったっけ？」

「ああ。守護を司る騎士である私が受け継いだ聖盾だ。いかなる刃も防ぎ、打ち砕く協会の宝具」

自らの盾を誇り、ファイアは言う。宝具とは特殊な製法で作られた普通の霊具とは一線を画する性能を持つ霊具のことだ。騎士と呼ばれる協会の霊術師たちは、霊術を使わない代わりに宝具で魔と戦う。その様子を見て、確かめるように少年は聞いた。

「……それ、信頼してええよな？」

「当たり前だ。協会が古来より魔を討つために使用してきた武具だぞ？ 百の魔が迫ろうと、残さず討ち滅ぼせる」

「信用しとるで。万一の時は後頼むわ」

少年の表情が、真剣になる。普段の軽薄さは完全に消え失せ、その瞳には一種の責任感のようなものが宿っていた。普段なら決して見ることはない少年のその姿に、少女は少し緊張しながら言葉を紡ぐ。

「まさかと思うが、死ぬ気じゃないだろうな？」

どこか切実なその言葉に、少年は軽薄に答えた。

「さて、どやろな」

瞬間、少女が動いた。少年の胸倉を盾を持っていない左手で掴み、責めるように怒鳴る。

「ふざけるな……！ 自己犠牲が美しいと言っても言うつもりか！ お前がここで死んで、一体何の意味があるというのだ！」

少女自身何故ここまで必死になるのかわからなかったが、とにかく怒鳴っていた。いつもは軽薄な振る舞いばかりをするくせに、こういう時だけは一人ですべてを背負おうとするこの少年が、許せなかった。

少年は苦笑し、優しく少女の左手を握り締める。少女はただ、呆氣にとられた。

「意味があるかどうかを決めるんは、わいやないんよ。決めるんは、残された奴らや。身勝手なのは重々承知。恨んでくれてええ。せやけど、わいには責任がある」

「責任だと？」

「せや。この町がこんな風になるまで何もできんかった責任や。最初の行方不明者が出た時に気付いて準備を始めたけど、結局今日出た犠牲者で二十二人もなつてしもた。この町を守るのがわいの背負ったことやのに、情けないわ」

少年は少女を引き離し、苦笑したまま言った。そして再び、表情が真剣になる。

「今日で終わらせる。わいが守るのは、町に住む人たちや。相手が何者であろうとも、逃げるわけにはいかへん」

「……そうか。全く、頑固だな」

ふうとため息を吐き、諦めたように少女は言う。少年は笑った。

「これでも大分マシになったで？ 昔のわいやってたら、こんな風
話をする前に強行突破しとる」

「そのお前を変えたのは、一体なんだ？」

「それはまあ、あれや。企業秘密」

肩を竦め、少年はおどけて見せた。そして、石段へ向かう。
だが不意にその足を止め、振り返った。

「もし、一時間過ぎてもわいが戻らんかったら、これを使って目覚
めさせたって欲しい」

そう言つて少年が渡したのは、紙の束だった。少女は呟く。

「式神の形紙？」

少年が渡したのは、海外ではあまり知られていない日本独特の陰陽
術という霊術の流派が使う、式神という使い魔ファミリー・マジック魔法のために使われ
る霊具だった。少年が頷く。

「あれはいつ目覚めてもおかしくない状況や。それ使つてちよいと
きっかけ与えてやれば、目覚めるはずや。わいがどうにもできんか
つたら、希望はもうあれしかない」

「私では頼りにならないということか？」

「そうやない。自分はここで死んでええ人材やないゆうことや。本
当にどうにもならんくなつた時、外部に協力を要請できるんは正式
に騎士として協会に所属する自分だけや。頼りにしとる」

いつになく真剣な表情で少年は言い、少女は何かを言おうとしたが

結局言えなかった。

少年は少しだけ微笑むと、ゆつくりと石段を登り始めた。その背中に、少女が言葉を投げかける。

「帰ってくるだろうな？」

その問いは、愚かな問いだった。少年が相對しようとしているのは、絶對的な存在だ。生きて帰れる可能性は、限りなく零に近い。だが、それでも。少年は、頷いた。

「無論や」

それが嘘になろうとも。少女を不安にさせたくなかったから。少年は、ゆつくりと石段を登っていく。

そして、二十三人目の犠牲者が生まれた。

第二話 戻らぬ日常（後書き）

というわけで、第二話です。

一話一話が長いこの小説ですが、実はあと二話ほどで完結だったりします。

全部で文庫本一冊分ぐらいですので、良ければ読んでみてください。感想などございましたら、是非。

ありがとうございました。

第三話 不幻の瞳

その日は、朝から憂鬱だった。

どんよりと曇った雲が、涼牙の心を映しているように見えた。すべては感傷。くだらないことだとは知りつつも、考えざるをえない。

六月二十三日。天候、曇り。

その日の朝のニュース内容は、少しだけ変わっていた。今まで一人ずつだった失踪者が、今回に限って二人になったというものだったが、片方の女性はともかくもう一人の少年が消えた時間は定かではない。

もしかしたら、少年は今日の朝の犠牲者かもしれない。だがどちらにせよ、犠牲者が増えたことに変わりはない。

『行方不明になられたのは、大学生の土谷加奈さん十九歳と、高校生の二夜誠也さん十六歳です。目撃情報がありましたらお知らせください。尚——』

ふと聞こえたニュース。涼牙は、無意識のうちに拳を握り締めた。自分の部屋である離れのベッドに横になりながら、涼牙は天井を見上げる。

学校は休校になった。誠也が初めての犠牲者というわけではない。誠也は白鷺高校の生徒としては四人目だ。だがそれほどの数の犠牲者が出ると、流石に学校も休校するしなくなっている。

『この失踪事件は一体なんなのでしょう？』

『やはり、心の闇でしょうね。若い人が多いということは、それを暗に示していると思います。高校生の彼も、イジメがあったのではないのでしょうか』

『うるさい——』

不快な言葉に対し、涼牙は怒鳴った。正直、聞いているだけで苛々する。

リモコンを取り、テレビを消した。だが、気分は晴れない。

（何があつたんだ？ 誠也……）

ベッドに寝転がりながら、涼牙は心中で呟いた。失踪した友人はイジメになどあっていない。あう理由もない。軽薄だが、人のことを想える奴だった。そんな奴が、イジメになどあうはずがない。

そして当然、失踪する理由も持ち合わせてはいない。

だが現実には失踪し、誠也は消えた。

一体この町で何が起こっているのだろうか？　そして、何が起こるのだろうか？

わからない。霊術師が関係しているのかもしれないと昨日の夜、優飛に涼牙は聞いたが、首を振られてしまった。

『まだ、わかりません』

これが、優飛の回答。涼牙は引き下がるしかなかった。

（どうするか……）

自分が何をすべきなのか、それがわからない。そう呟いた時、扉をノックする音が聞こえてきた。

「どうした？」

「……涼牙さんにお話があります」

相手は、優飛だった。どこか言葉が重苦しい。

「わかった。入っていいぞ」

涼牙はベッドから身を起こし、優飛を迎える。扉を開けて入って来た優飛は、真剣な表情をしていた。

涼牙は座布団を取り出し、優飛を座らせる。

しばらく、沈黙が続いた。二人は言葉を発さず、ただ黙っている。そんな沈黙が数分続いた後、優飛がゆつくりと口を開いた。

「この国に存在する、霊術師の管理機関　十六夜八鬼　のことは以前、話しましたよね？」

「ああ。確か霊術師の一族と魔の一族が集まっている会合……だったか？」

「はい。十六夜　は　夜　の名を冠する十六の霊術師の一族で、八鬼　は　鬼　の名を冠する八の魔の一族です。この国は変わった国で、古来より誇り高き優れた魔が他の魔を管理していました。しかし、人間も対抗手段を必要とし、霊術師の一族が生まれました」

昨日は語られなかったことを、優飛は語る。涼牙は一言一句も聞き漏らさないようにと、真剣に耳を傾ける。

「今では二十四の一族の内、十七が滅びています。廃業したり、断絶したりと理由は様々ですが、今現在残る一族は七つしかありません。一夜、二夜、闇夜、乙夜^{いこや}、鬼神、鬼百合、鬼火……今回消えた二夜誠也さんは、現存する十六夜の一角　二夜　の霊術師です」

「なんだと？」

涼牙が、睨むように優飛を見る。優飛はただ頷いた。

「直接の面識は今日の朝までありませんでしたが、噂を聞いたことは何度もあります。世紀の天才と謳われる霊術師。五年前に自らの術式を完成させ、一族より離反。会合と協会が五年もの間葬り去るうとして未だに誰一人として超えられない至高の霊術師だ」と

「そんな大層な奴だったのか……。とてもそうは見えないが」

後半何気に酷いことを呟きながら、涼牙は驚く。軽薄な印象を与えてばかりのあの誠也がそれほどの存在だったとは知らなかった。というか気付けなかった。

「まあ、霊術師に性格は関係ありませんから。むしろ、霊術師であることを隠すためにわざと軽薄に振舞っていたのかもしれませんが」「わざとか……。とてもそうは思えないが。まあいいか。とにかく、誠也は霊術師だった。それも凄腕の。だがそれが一体、何を意味する？」

「単純なことです。一連の失踪事件は、魔が関わっている。それだけです」

きつぱりと、優飛は断言した。ある意味予想通りだったためか、涼牙はそこまで驚くことはなかった。

優飛は、涼牙に自身の見解を告げていく。

「二夜誠也。高名な霊術師である彼がどうしてこのような田舎町に隠れるようにして住んでいるのかはわかりませんが、それもおそらく関係しているでしょう。私がこの町に入って感じた『懐かしい気配』も、おそらく関係しています」

「待て待て。意味がわからない。つまり、どういうことだ？」

言葉を遮り、簡単な答えを涼牙は求める。優飛は真剣な表情のまま、涼牙に告げた。

「この町には秘密があります。それがどのようなものかはわかりませんが、これだけは私にも断言できます」

一度言葉を切り、優飛は息を吸った。時間の流れが、遅くなったように感じる。

「事件はまだ終わりではありません。むしろ、もっと残酷なことが起こるかもしれません」

その言葉を発した時の優飛は、ひどく冷たい目をしていて。世界を見限ったような、残酷さを宿した瞳。そこにいた少女は、涼牙の知らない姿をしていた。

「俺なんかが、役に立つのか？」

これから起こるであろうこと。自分がしなければならぬことに対する不安から、涼牙は目の前の少女に問うた。優飛が頷く。

「朝に涼牙さんの動きは見せてもらいました。あれはお座敷剣道ではありませんね？ あれは、人を殺すための殺人剣でしょう？」

真剣な表情で言う優飛に少し気圧されながら、涼牙は頷いた。視線は、手に持った布に包まれた状態の日本刀に注がれる。

「祖父によれば、歴史の裏に隠れ続けてきた名を持たぬ実戦剣術だ

そつだ。中学時代はこう見えて結構荒れていてな。何度も助けられた」

「それはまた、頼りになりますね。安心して戦えそうです」

「そつは言つても、魔と戦うことなんて初めてだぞ？」

涼牙の言葉を聞いて微笑む優飛に、ため息を交えて涼牙は応じる。人との実戦経験ならルール有り、無し問わずに何百と積んできた。だが、魔なんて非常識なものが相手となるとどこまでやれるか全くわからない。

そもそも魔というのは、生物がその存在を捻じ曲げたものをいう。神が生み出したとされる生物の形。ごく小の範囲での違いはあれど、それらは種類として分けられる程度のものだ。だが時に生物はそれを捨て去り、新たな存在になろうとする。

そうして生まれたのが、魔物と呼ばれる魔の生物だ。

人は生物としての本質を捨てた彼らを魔物と呼び、追い立てる。日本という国では一部の魔物が裏側で国を管理しているが、西洋では協会が彼らを抹殺しようと組織的に活動をしている。

それが、先程涼牙が聞かされた世界の裏側の仕組みだ。

そして、優飛は魔物の中でも最強種である吸血鬼だ。おそらく、涼牙が想像しているよりも過酷な立場にいる。

なのにこの少女は、涼牙に対して笑ってみせる。

「万が一の時は、私が守ります。だから大丈夫ですよ」

振り返つて言う優飛。涼牙は頭を掻くと、首を横に振った。

「大丈夫だ。自分の面倒ぐらい自分で見る。それに、俺だって内心穏やかじゃない。友人が一人消えているんだ」

刀を握り締めながら、友人の顔を思い浮かべながら、涼牙は歩き出

す。

「黙っていられる道理はない」

そしてその布を取り去り、涼牙は刀を抜いた。

一閃、刃が唸る。

いつの間にか二人を囲んでいた白い狼たちのうちの一体が、涼牙に斬り捨てられた。宙を舞った首と、首を失った胴体は程なくして塵となる。

鞘を投げ捨て、刀を正眼に構え、涼牙は背中合わせに立つ少女に聞く。

「こいつらが今回の犯人か？」

「わかりません。ただ、何かを知ってはいると思います」

「十分だ」

言葉を発すると同時に、涼牙が地面を蹴る。先手必勝の気合いと共に、狼たちへと斬りかかる。

向かってくる狼の爪を文字通りの紙一重で避け、その首筋に刀を突き刺す。柔らかいものを貫く感触と同時に白い狼から漆黒の液体が溢れ出し、涼牙の体を濡らす。だが涼牙は委細気にせず、次なる得物へと狙いを定める。

その様子を、優飛は半ば呆然として眺めていた。正直、ありえない戦闘能力だ。

相手は異形の存在。ついこの間まではただの一般人であつた涼牙には、本来なら一切関係性のない相手だ。人は得体の知れないものに恐怖する。白い狼が初めて涼牙の前に現れた時のように、普通なら恐怖を覚える。

確かに涼牙は知識を得た。こいつらがただ獰猛になって能力が上がっているだけで倒せない相手であるわけではないと、理屈では理解

した。

だが現実にそれを行える者が、果たしてどれだけいるのだろうか？

「……………」

全身を漆黒の返り血で染め上げながら、涼牙はただ敵を屠る。無心に。

優飛も迫り来る狼たちを素手で粉碎し、蹴散らしていく。月夜の下で戦う二人の姿は、舞を踊っているかのようにも見えた。そして、その舞いも終わりを迎える。

「とんだ茶番ですね。この程度の雑兵で、私を倒せると思いましたか？」

全身に吹き荒れるような霊力を纏いながら、静かに優飛は言葉を紡ぐ。涼牙は優飛が見つめる方向を見て、絶句した。

そこにいたのは、般若の面を被り、死装束を着た人物だった。いつの間に現れたのか——そんな疑問が涼牙の脳裏を過ぎる。多人数相手の戦闘だ。常に周囲には気を配っていたし奇襲も警戒していた。だがこの人物の気配は一切しなかった。

般若の面が、言葉を紡ぐ。

「元より、この程度で討てるとは思っておらぬ。千年の時を刻みし不浄の存在よ。貴様の月も今日で堕ちる。覚悟せよ。その命、我が望みに使わせてもらおう」

仮面の内側から紡いだ言葉なのに、はつきりと声は聞き取れた。そして般若の面が言葉を紡ぐと同時に、その影から何体もの敵が現れる。

白い狼。白い鷹。白い虎。白い——……

いちいち判別するのが面倒なくらいに豊富な種類の霊術を持って召喚された獣たちを前に、優飛は一度腕を振る。

ただそれだけで空間が裂け、獣たちが消滅した。

霊力を手先に集中させ、振るうことによって空間を切り裂く衝撃波を生み出す技。普通の霊術師ならば精々敵を斬る衝撃波を生む程度だが、超絶の魔物・吸血鬼である優飛にかかれば百の敵をも薙ぎ払える。

だが、獣たちは際限なく現れる。四方八方の広範囲から襲いかかってくる獣たちが相手では、優飛も防戦一方に回るしかない。いくら強大な力を持っていたても、所詮は単騎。一度に相手にできる数には限界がある。

「どうした、不浄の姫君よ？ 貴様の實力であればこの程度、物の数ではあるまい。力が弱っているようだが、それが原因か？」

般若の面が、悠然と戦場を見つめながら口を開く。優飛は再び一薙ぎで周囲の獣たちを殲滅し、言い放った。

「雑魚の魔物相手に吸血鬼の力はありません。我が身に宿る力のみで、すべてを殲滅して見せましょう」

「やってみるがよい」

「言われずとも」

優飛が身を翻し、背後に迫っていた獣の顔面を振り上げた掌で叩き潰す。更に振り返りもせず肘を後ろに突き出し、正確に額を貫いた。漆黒の液体が、優飛の体を濡らす。

だが涼牙が見ていられたのは、そこまでだった。

「……………」

刀を少し下ろし気味に構え、涼牙は自分を取り囲む相手に構える。涼牙には優飛のようなことはできない。できるのは精々、一体一体確実に斬ることだけ。

高鳴る鼓動。深呼吸でそれを押さえつけながら、涼牙は刀を上げた。正眼に構える。

それを待っていたとでもいうかのように、白い獣たちが一斉に襲ってくる。

「……………」

入り乱れる獣たちの間を抜けながら、涼牙は刀を獣たちの体に捻じ込ませる。咆哮と共に、獣が絶命した。純白の体躯に似合わぬ黒い体液を浴びながら、涼牙は次に向かってくる獣へと意識を切り替える。

正直、自分でも不思議だった。

涼牙が習得する剣術は文字通りの実戦剣術。相手から一本取る剣術ではなく、相手を殺すことに比重を置いた剣術だ。だから一太刀一太刀の威力が違うし、多人数戦も想定しているため今も戦えている。だが、それはあくまで人間相手だったはずだ。こんな、異形の敵が相手ではない。

なのに今、涼牙は何の違和感もなくこうして体が覚えた剣術を振るっている。まるで———そうあることが自然であるかのように。

そして、そんな戦闘が一时间ほど続いた後、すべての獣が消えた。般若の面が、少しの感嘆を言葉に乗せる。

「想像以上だ。流石は世界最古の吸血鬼。そしてその異能者も予定外だが我にとってはさしたる障害にもならない」

「余裕ですね。あなたの使い魔は既に全滅しました。残すはあなたのみです」

涼牙の隣に立ち、優飛が言い切る。心なしか、疲れているように見えた。

そんな優飛の様子を知ってか知らずか、般若の面が鼻で笑った。

「やはり貴様は本調子ではないようだ。普段の貴様であれば、その異能者が私の使い魔を切り裂いた瞬間に気付いただろうに」

「……………」

「漆黒の吸血鬼よ。貴様の曇った瞳で貴様と異能者を染めるものを見てみるが良い。気付けるはずだ。——もっとも、もう遅いが」

その言葉で優飛が何かに気付き、般若の面が指を鳴らす。瞬間、優飛の体を足下の黒い液体と体を染める黒い液体が鎖となって拘束した。

「くっ……………」

優飛を拘束する鎖。それを優飛は引き千切ろうとするが、頑丈な鎖は千切れない。

凄まじい力で彼女を地面に引き寄せようとする鎖。最初は優飛も抵抗していたが、すぐに膝をついた。

「優飛！」

「……………ッ！」

涼牙が呼びかけるが、優飛はそれに答えることができない。霊術で作られた鎖には、見た目以上の拘束力があつた。

そしてその様子を見て、般若の面は涼牙へと視線を向けた。

「貴様……………何故術が作用せぬ？」

「何？」

「吸血鬼の姫君でさえも捕縛せしめるために、この体の命を削った術だ。だというのに何故、貴様は平然としている？ 何故、貴様の体を覆う我が呪いは作用せず、その力を打ち消されている？」

般若の面が、一步だけ歩を進める。

「まさか、姫君の力の低下も貴様が原因か？ 元より妙だとは思っていた。いかに命そのものを犠牲にして作り上げた捕縛結界とはいえ、所詮は矮小な命。吸血鬼の姫君を捕らえることができた可能性は決して高くはない」

更に一步。般若の面は歩を進める。

「だが現実にはこの一手で姫君は捕らえられ、矮小なはずの貴様は生きている。この現実を、貴様はどう証明する？」

「知るか。知っていても教える義理はない。優飛を解放してもらうぞ」

刀を構え、涼牙は目の前の奇矯な男に敵意を向ける。般若の面は腕を組み、見下すような調子で告げる。

「我が問いに答える知恵もなしか。興が削がれた。その命で償ってもらうぞ」

影が膨らみ、今度は黒い獣たちが現れる。しかも先程までの白い獣より一回りは大きい。

大型の、人など爪だけで軽く引き裂けそうな体躯と威容を持つ獅子。それが真っ直ぐにこちらに向かってくる。

——つつつ。

それは、緊張からの汗か。恐怖からの汗か。一筋の汗が額から頬に

流れて顎に行き着き、地面に落ちた。同時に、凶悪な牙が迫りくる。涼牙は退かず、真っ直ぐにそれを迎え撃つ。だが、先程までの獣たちとは明らかに動きが違った。涼牙の刃が、空を斬る。

「純粹に相手を殺すために存在する我が使い魔だ。多少動ける程度の異能者に、生き残る術はあらぬ」

涼牙の体に衝撃と焼けるような痛みが走ったのと、その言葉が聞こえたのは同時だった。

地面を削りながら、涼牙の体が転がっていく。

「あ……ぐ……！」

血が溢れ出す脇腹を押さえ、涼牙が唸る。今、全く動きが見えなかった。気が付けば腹を抉られていた。

涼牙の側に、新たに召喚された黒い獣たちが寄ってくる。薄れていく涼牙の意識に、般若の面の言葉が届く。

「貴様程度の命であろつとも、微細な足しにはなるだろつ。姫君同様、我が望みのためにその命を頂く」

獣たちが、涼牙に喰らいつく。それを薄れる視界で涼牙は見上げ――
異変が起こったのは、その時だった。

フィティア・レウ・クラスハーケンは、協会では名の知られた少女

だ。

魔を討つために世界の裏側に存在してきた協会。そこには階級や部署など、ある程度完成されたシステムが存在する。彼女が所属するのはその中でも『聖騎士部隊』と呼ばれる戦闘部隊だ。フィアはそこで宝具を授けられた優秀な騎士である。

もつとも、数百年前ならともかく現代では魔物の存在もそう多くないし、いたとしてもほとんどが隠れている。

そのため聖騎士部隊も活躍は少なかったが、日本という国からの連絡がすべてを変えた。

極東の島国。それも現代では先進国の一角として世界に存在するその国は協会の本部がある国から遠く離れているため、今までは対して調査は行われなかった。元々日本の霊術師たちは閉鎖的で、協会との繋がりが薄かったのもある。

だが、この地を統べる霊術師と魔の一族の会合、『十六夜八鬼』が十二年前、教会に緊急の連絡をよこした。

曰く、『災厄が再臨した』と。

協会の上層部はこれを機に日本とのパイプを作ろうと十人の騎士を派遣した。全員が宝具を持たぬ騎士ではあったが、実力は申し分ないものだったという。

だが彼らは全滅し、『十六夜八鬼』も甚大な被害を被った。

十二年前に何があったのか——そのことを突き止めるために、フィアを含めて日本には数名の騎士が派遣されている。だが掴めたことは臍けな輪郭のみ。

そしてフィアが行き着いたのが、二夜誠也という少年。彼ならば何かを知っているかもしれない。そう判断し、この町に来た。

そして事実を知り、ここにすることを決めた。

だがその少年は己のすべきことを為すために一人で戦いに向かい、姿を消した。

そして今、遠くでは規格外の戦闘が起こっている。

「誠也が帰らず、状況も理解しきれていないというのに……！」

巨大な盾を右手に装備し、女性騎士の戦闘衣を纏った金髪碧眼の少女が走る。

走り、その体が揺れる度に金色のポニーテールが揺れる。彼女が走っているのは道ではない。民家の屋根の上やビルの上などを飛び移り、最短距離を走っている。

町は、静かだ。

時間も時間。深夜の、日付が変わる時間だ。だが普段なら、田舎町であるこの町でも車の一つや二つは見つけられる。

だが現実には、車の一つさえ見つけられない。

そしてそれはすべて、失踪事件のせいだ。誠也を入れれば二十三人の犠牲者を生み出し、未だ終わる気配を見せぬ事件。それが、町に静寂をもたらしている。

一日に一人の犠牲者が出る事件。その真相は、ファイアにはわかっていいる。わかつてはいいるが、できるのは誠也を送り出すことだけだった。そして今、それを後悔している。

だがもう、選択の時は去った。だから、できることは限られる。

そして今彼女がやろうとしているのは、この町に迫る危機を取り除くこと。誠也が望み、今まで果たしてきたことだ。

「私に、できるのだろうか？」

珍しく、弱気なことをファイアは呟く。普段なら決して見せない顔だ。魔物たちと戦うことは、多くはないが少なくもない。そもそも宝具を与えられる騎士は相応の結果と実力をもっていなければならない。だから、戦うことは不安ではない。しかし――

「これを、私は使えるのか？」

胸ポケットから、ファイアは紙の束を取り出す。誠也に渡された、式神の形紙だった。

これを使えと誠也は言った。そしてその理由も、十二年前の真実を知った彼女ならばわかる。使すべき相手もまた。

だが、敵は魔物ではない。それが、彼女を踏み止まらせる。

しかし、時間はそんな彼女を待ちはしない。

「……………！」

血の匂いと、風を巻き起こす濃密な霊力。それを辿って戦場まで来た。そしてそこで見たものは、ファイアの想像を超えるものだった。

「涼牙、か……？」

目の前の光景が、最初彼女には信じられなかった。だが、見間違えるはずがない。同級生であるあの少年とは、何度も言葉を交わしているのだから。

だがそれでも、目の前の現実が信じられなかった。

優飛が漆黒の鎖に捕らえられ、それを庇うようにして涼牙が立っている。日本刀を構え、目の前に迫ってきていた獣たちを粉微塵に斬り飛ばした。

そして、刃を振るう涼牙は笑っている。

凶悪に。残酷に。

ファイアは、無意識に拳を握り締めた。

（誠也。これが現実のようだ）

ここにはいない、彼女が唯一尊敬する霊術師へと、心の中で言葉を紡ぐ。

（私たちは、友人を殺さなければならぬらしい）

十二年前の、再来を防ぐために。
ファイアはただ、戦いを見下ろしていた。

体が、焼けるように熱かった。

死を迎えた体は、冷たくなっていく。そんなことをどこかの本で読んだ記憶がある。だが、今の自分は違う。冷たくなるどころか、全身が痛いくらいに熱い。

だからこれは死じゃないのか？ そんなことを考えたが、すぐに現実を見る。

薄れた視線の先には、漆黒の獣たちの姿があった。先程の獅子だけじゃない。馬鹿みたいな数、そいつらが存在する。

（なんだ、結局死ぬんじゃないか）

（馬鹿だな。らしくないことをして）

涼牙は苦笑する。霊術師だとか、吸血鬼だとか、慣れないことに関わり過ぎた。そしてその結果がこれだ。

別に後悔はない。親を失って、独りで生き始めた日から、自分に見切りはつけている。

世の中、ろくなことはない——そう自分に言い聞かせてもしないとやっていられなかった。今回、危険だと知りつつここに来たのも、きっと死を求めたからだろう。

俺は、死に場所を求めている。

何かしたいことがあるわけでもなく。夢があるわけでもなく。ただ

独りで生きていくしかない自分。そんな自分が嫌だった。
だからこうして死ねて、いいのかもしれない。

（優飛を、助けられなかったな）

そのことを考えた時、妙なものが湧き上がってきた。胸の奥に、何かが宿る。

（まさかと思うが、悔しいとも思っているのか？ そんな感情、忘れたはずだが）

心の中で冷めた言葉を口にする。匂いを嗅ぐようにして寄ってくる獣たち。心臓が、大きく高鳴った。だがこれは、恐怖ではない。

——これは、高揚感だ。
何かが、胸から溢れ出してくる。

「壊れかけの人間が足掻くか。無駄だ」

嘲笑を交えた声が届いた。涼牙は、笑った。

「はは……は……」

壊れかけ？ 今更何を言うのか？

この心は既に壊れている。感情らしい感情など、既に消えた。
俺の世界など、すでに壊れている。

殺される。誰に？

俺は誰に、殺される？

そうだ。俺は殺される。

？俺は俺に、殺される？

聞こえてきた、自分の声。涼牙は、それに身を委ねた。
死を運ぶ風が、吹き荒れた。

涼牙を囲んでいた獣たちが、すべて消える。黒い雨を降らせる。

「くっ、くっ……！」

涼牙が、笑う。顔を押さえ、天より降り注ぐ漆黒の雨を受け止めながら。

「アハハハハハハハハハハハッ！」

それは、狂人の姿だった。般若の面が、無意識のうちに一步後退する。

「さあ、殺し合おうぜ。丁寧に殺してやるよ。きっちりかつちり、異形のクソどもでも生きて帰れねえくらい完璧によお」

普段の涼牙とは思えない口調で、笑いながら涼牙は言う。刀を持った右手をだらりと下げ、黒い液体で染め上げられた左手を前に出し、
『かかって来い』とジェスチャーする。

「……行け」

般若の面は、再び影から獣たちを生み出した。自身が後退している

ことに、気付いている様子はない。

十三体。漆黒の獣が駆け、涼牙を狙う。涼牙は構えない。刀を振るう気配もない。

そして、獣であつてもありえないほどの速さでその牙と爪が体を裂こうとした瞬間、涼牙が呟いた。

「つまんねえ」

そしてそれだけで、獣たちが消えた。体が崩れ去り、塵となったのだ。

般若の面が呆然となる。涼牙は露骨に不満そうな顔をし、言った。

「お前、これはありえねえよ。ちよつと力入れただけで消滅？ ふざけんのも大概にしてくれ。せつかく、表に出られたつてのによお」

「貴様、何者だ？」

「んなこと教える義理があるとでも思つてんのか？ どんだけめでてえ脳みそしてんだよ。知りたきゃ考えろ。無駄だらうけどな」

言つて、涼牙は笑う。般若の面はそこで再び後退し、そこで初めて自身がしていることに気付いた。

「我が後退？ ありえぬ！」

般若の面から、靈力が噴き出す。高くなつた靈力密度は、般若の面の姿を二回り以上は大きくしたように思えた。

だが涼牙は口笛を吹き、諸手を上げてそれを歓迎する。

「最初からそうしろよ。そうしてくれたら、俺だつて全力出せるんだから」

涼牙の顔に刻まれる愉悅の表情。それを無視し、般若の面は獣を召喚した。

像ほどの大きさがある、巨大な漆黒の獅子。ズルズルと般若の面の影から這い出たそれは、天を見上げると咆哮を上げた。

その巨体が、動く。大きさからは想像できないほど俊敏に、獅子が涼牙を襲った。

爪が地面を抉る。それは最早、爆発だった。爆散する地面。だがそこに涼牙の姿はなく、無論血も付いてはいない。

「やるねえ。じゃあ、こつちの番だ」

獅子が涼牙を探すより先に、その言葉が届いた。足下にいる人影が、言葉と共に刀を振る。だが、その刃は少し食い込むだけで致命傷になりえなかった。

唸り声を上げ、獅子が爪を振る。刀を引き抜き、屈むことでそれを避けながら涼牙は感嘆の吐息を漏らした。

「一応これ、宝具レベルの名刀なんだけどな。全然通じないとは恐れ入ったぜ」

「時を重ねし武具は霊具に至り、時と共に想いを込められた武具は宝具に至る、か。宝具といえど所詮はただの武具。宝具だけで我が使い魔を破れはせぬ」

「その通りだな。じゃあ、ちょっとだけ本気だしちゃおう」

軽薄に言い、涼牙は距離を取る。とても常人とは思えない身体能力だ。

そして、その瞳が獅子を捉えた。鋭い眼光が、獅子を突き刺す。

だがそれだけで何かが起こるわけではない。しかし、般若の面は全身でその驚愕を露にした。冷静さを失い、般若の面が叫ぶ。

「まさか貴様—— 鬼裂 か！」

その言葉に対し、涼牙が唇の端を吊り上げる。

「正解だ。そしてそれが示す意味、わかるよなあ？」

驚愕を楽しそうに眺め、涼牙が地面を蹴る。迫り来る爪を紙一重で避け、その腕に刀を振り上げた。すると、先程は食い込む程度だったのに関わらずその腕はバターのように容易に斬り飛ばされた。バランスが崩れ、獅子の体が傾く。その瞬間に、涼牙は刀を振り上げた。

獅子の腹が裂け、そこから血が溢れ出す。それを心地良さそうに受け止めながら、涼牙は高々と笑った。

「アハハハハハハハハハハッ！ 足りねえ、こんなんじゃ全く足りねえよ！ 俺をもっと、もっと楽しませてくれ！」

首を狙い、一撃で殺すことができるというのに、涼牙は一撃で殺さず獅子の体を切り刻むようにして戦う。

「我が、全霊で戦わねばならぬだと……？」

般若の面が、おもむろに優飛の力を奪っていた術を解除する。優飛の力を奪っている力を含めた自身の全霊を懸けて戦わなければならないと判断したためだ。

「う……」

急速に力を奪われ、意識を失っていた優飛が呻き声を漏らし、意識を取り戻す。般若の面は苛立たしげに吐き捨てた。

「あれを仕留めれば次は貴様の番だ。待っているがよい」
「え……?」

言われて、手をつきながら優飛は顔を上げた。そこには、巨大な獅子を切り刻む涼牙の姿がある。

「涼牙、さん……?」

言いながら、優飛は内心で違うと否定した。今の涼牙が纏う気配は、普段の彼とは違い過ぎる。

そして優飛には、今の彼の気配に覚えがあった。遠い記憶の中に、今の涼牙と重なる人物がいる。

だが般若の面にとってはそのようなことはどうでも良く、また知らない。

般若の面は、倒された自身の使い魔を見つめながら言葉を紡ぐ。

「貴様、予定外にも程があるぞ」

「そいつはどうも。……なんだ、優飛を解放したのかよ」

ぐしゃりと、涼牙の手に握られていた獅子の頭が砕け散る。どす黒い液体が、返り血のように涼牙の体を染めた。

「てめえ脅して助けようと思ってただけだな。まあいいか。手間が省けた」

「貴様、鬼裂 でありながら魔を守るといのか?」

「関係ねえな。俺たちは優飛を助けることで意見が一致してる。主体の方も優飛を助けようとして気合を入れ直したみてえだし。まあ、とにかくてめえに生きる道はねえってことだ。死んで詫びろ」

刀を突きつけ、涼牙が笑う。だが、目だけは笑っていなかった。

「人間が……我を殺せると思うな！」

般若の面が叫び、影からいくつもの刃が生まれる。剣や槍、刀に加えて鈍器もある。百本近いそれらは宙に浮き、涼牙を狙う。

「消し飛ぶがいい！」

「冗談。この程度じゃあ、俺は死ねない」

嘲笑、侮蔑。それを表情に隠すこともなく宿し、涼牙は左手で顔に触れた。左目を掌で隠し、右目だけが指の隙間から現れるようになる。

百本を優に超える、漆黒の凶器たち。それらが、涼牙を襲う。

だがその凶器はすべて消えた。涼牙の体に触れるギリギリの場所まで到達した瞬間、塵となって消滅したのだ。

「無駄無駄。無意味だ。さっきみたいな密度が高え使い魔なら本調子じゃねえ今の俺じゃ精々、強度を脆くする程度しかできねえ。だが、一発一発の密度を低くしてるとんなら話は別だ。全力出しゃあ、消せる」

「？不幻の瞳？……！」

唸るように般若の面が唸る。涼牙の右目が、鋭く光った。

「さあ、て。色々と聞きてえことがある。今主体は眠っちゃってるから聞いてもらええつちゃあしやあねえんだけど、俺はやっぱ納得できねえわけだ。主体はひねくれてるが結構、心優しい奴でな。失踪事件のことはかなり真剣に考えてる」

「……………」

「俺としちゃあ正直誰が消えようが死のうが——生贄になろうが、興味はねえ。どうぞご自由に、ってところだ」

般若の面が、僅かに反応する。涼牙は笑みを深くした。

「昔の俺なら、主体みたいになんにかしようと悩んでたんだろうけどな。まあ、俺は今を生きる存在じゃねえし、この時代のことはこの時代で解決すべきって考えた。だがまあ、流石にそうも言ってもらえねえ状況だろ？」

「知ってどうする？」

「どうにかする。できる力がある。それが答えだ」

涼牙は、笑みを消した。般若の面の背後では、優飛が立ち上がっている。

本調子ではない。だが般若の面とて先程、規格外の霊術を連発したのだ。その疲労は相当なものである。

実際、少しだけ肩が上下している。

前面には、圧倒的な力を持つ異能者。後方には、本調子ではないとはいえ魔物最強種である吸血鬼。この状況で生き残る術はない。それを確認し、般若の面は静かに口を開く。

「成程、我が生き残る道はないようだ」

「ならどうするよ？ 大人しく全部話すか？」

「——そのような時間、我には残されておらぬ」

くつ、と笑い、般若の面が言葉を紡いだ。そして次の瞬間に起こったことに、涼牙と優飛も驚きを見せる。

般若の面の体が、崩壊を始めた。

「てめえ！」

涼牙が地面を蹴り、掴みかかる。だが、左手で掴んだ肩は一瞬で崩れ去った。それを見た般若の面は笑う。

「貴様が持つ魔を許さぬ瞳に加え、あれだけの霊力を使用したのだ。常人の体では限界よな。だが我は倒れぬ。切り札は手の内にある」

「言い逃げたあ、関心しねえな」

「逃げはせぬ。いずれ、貴様らの前に我はもう一度現れる。そしてその時こそ、貴様らは己の無知を嘆くだろう」

くだらねえ、涼牙がそう吐き捨てると同時に、般若の面の体は消滅した。残されたのは、顔に着けていた般若の面だけ。それを一瞥し、涼牙は刀を持つ右手で目を閉じながら優飛に視線を移した。

「さて。とりあえず挨拶だ。久し振りだな」

「やはり、あなたでしたか」

適当な挨拶をする涼牙に、優飛は冷たい視線を送る。普段の彼女からは想像もできない表情だった。だが涼牙は肩を竦めるだけで、大して気にしていない。

「そう怒るなつて。お前なら何となく気付いてたんじゃねえのか？

涼牙の中に別の誰かがいるって」

「ええ、気付いていました。確証はありませんでしたが、涼牙さんが私と初めて会った時に倒れたのはあなたの仕業でしょう？」

「まあな。でもそうしねえと、こいつ暴走してたぜ？ 無意識のうちに前を殺そうとして、どうにもならねえ状況になってたろうよ」

苦笑し、涼牙は自分の胸を左手の親指で指し示す。それには優飛も

頷いた。

「そうでしょうね。十二年前の惨劇を考えれば、起こり得る現実でしょう」

「だからこそ、その暴走を止めるために俺という人格が静止の方程式の一部として入れられたわけだが、それも長くもちそうにねえんだわこれが」

「どういうことですか？」

「血が強過ぎるんだよ。尋常じゃないくらいに」

初めて表情を少し変化させた優飛に、どこか面倒臭そうに涼牙は言った。

「そもそも、始まりから無理があるんだよな。鬼裂の力は奇跡を食い破る破壊と否定の力。そんな化物を霊術で封じる方が無理なんだよ。正直、俺が出てこれるのも多分これが最後だろうな」

「それはそれは、非常に歓迎すべきことです」

「……いや、別にいいんだけどな。とにかく、一つだけ言っておくぜ？ こいつが目覚めれば、『十六夜八鬼』と協会は確実に動き出す。殺されるぜ？」

「その時は、私が守ります」

一瞬の迷いも逡巡もなく、優飛は言い切った。涼牙は苦笑する。

「おっけ、了解。まあこいつも守られるような雑魚でもないけどな。……その想いは、千年前から続くものか？」

「ええ、そうです。私は千年の昔より、涼牙さんが現れる時を待っていました。この地の災厄を今度こそ終わらせるために。そして何より、もう二度と後悔せぬために」

強い意志。それが言葉に乗せられていた。涼牙は無表情に呟く。

「自分優先が悪いとは言わねえが、一つだけ言っとくぞ。そんな考え方でこいつを守ろうとしてたら、お前は近い将来、確実に後悔する」

「私がですか？」

「そうだ。……さて、俺も表に出過ぎた。しばらく寝る。多分これが永眠になんだろ。詳しい話は、隠れている騎士にでも聞け。ああ、それと——」

涼牙の言葉が理解できないというように怪訝な表情を見せる優飛に、涼牙は最後に一つだけ質問した。

「お前、俺を恨んでるか？」

その問いに一瞬だけ優飛は驚いたような表情を見せ、頷いた。

「ええ。恨んでいます。私を置いて一人で犠牲になった人など、許せません」

「そうか」

薄く笑い、涼牙は目を閉じた。その瞬間に体は力を失い、倒れる。優飛はその姿を見つめながら、口を開いた。

「出てきては如何ですか？ 協会の騎士様？」

「……気付いていたか」

言葉と共に優飛の背後に突如現れたのは、金色の騎士だった。振り返り、優飛は騎士を見つめながら言葉を紡ぐ。

「お互い、そろそろ腹を割って話すべきではありませんか？」
「かも、しれん。……私一人ではどうにもならない。手を、貸してくれ」

そう言った時の騎士——ファイアの姿は、どこか弱々しかった。

「鬼裂 が、盟約を絶った」

十一人の男たちが集まる、暗い空気の中で行われる会合。古い屋敷で行われたその会合で、宗主と呼ばれる男がそう口にした。先程までは音一つ無かった空間に、ざわめきが広がる。ほんの数分前までは、人がいることさえ疑わしいような状態だった。誰一人として、ここに在る気配を放っていなかったのだ。だが今、集まった高名な霊術師と魔物たちは明らかに動揺している。

「まさか、本当だったのか？」

「確かに 鬼裂 は連絡を絶っているが……」

「こちらの話では、 鬼瓦 と 鬼頭 が襲撃に遭い、断絶したと聞いている」

「出鱈目を。ありえん」

「だが 丁夜 の当主は 鬼瓦 のところへ向かったきり、連絡が無い。 鬼頭 と 鬼瓦 の両方とも連絡がとれん」

「ならば本当なのか？ しかしどうする？」

「討滅するしかあるまい」

「しかし、どうやってだ？」

「それは——」

「……静まれ」

騒ぎ出した者たちを、静かな一言が制する。宗主と呼ばれ、最奥に座す男の声だ。

全員が騒ぐのをやめ、男を見る。男はゆっくりと口を開いた。

「鬼裂 が盟約を絶ったのは事実だ。当主、鬼裂高楼は 鬼頭 を滅ぼした。その異変を察知した 鬼瓦 と 丁夜 が手を組んで掃討に当たったが、すべて無駄に終わった。やはり恐ろしき一族よ」
「ならば、どうなさるのです？」

宗主に最も近い位置に座っていた一人の女性が口を開く。宗主は頷いた。

「盟約を絶たれた以上、戦を始めるしかあるまい」

「しかし、 鬼瓦 に加え 鬼頭、 丁夜 を失った我らは全盛を誇った頃の半分以下の規模でしかありません。勝てるでしょうか？」

「そもそも 鬼裂 は我らに対して絶大な力を発揮します。我らは勝てますか？」

宗主の言葉に、次々と不安の言葉が投げかけられる。宗主は口を開いた。

「勝てる、勝てぬではあるまい。そもそも、我らとあの者たちは本来相容れぬ存在だったのだ。今こそ力を結集し、戦わねばなるまい」

そこで言葉を切り、宗主はここにいる全員を見渡す。息を呑む音が聞こえた。

「皆の者、各々の双肩にこの国の平和と安寧があると心得よ。出陣だ」

言葉を受け、全員が立ち上がる。そして宗主に一礼してから速やかに部屋を出て行った。

一人部屋に残り、虚空を見つめる宗主。そこに、一人の男が現れる。

「三十郎か」

「会合が終わったようなので、立ち寄らせて頂いた。如何なされるおつもりか？ 相手はあの 鬼裂。ここにいた当主たちも、果たして何人無事に帰還するか」

「だがいつかはやらねばならぬことだ。もう時は動き出しておる」

静かに、宗主は告げる。三十郎と呼ばれた初老の男はため息を吐いた。

「私も参りましょうぞ。あの者たちに任せるには、鬼裂は荷が重い」

「会合を侮るか？」

「鬼裂を侮ってはなりません」

二人の視線が交錯する。共に幾多の戦場を越えてきた身だ。吹き荒れる殺気は空気を凍りつかせる。

数秒二人は睨み合い、三十郎が口を開いた。

「魔を滅する？ 不幻の瞳？……目になさられたことはありますか？」

「鬼裂に会ったこと自体が私には無い」

「左様ですか。ならばわからぬでしょうな。あの者たちは真正の退魔師です。霊術師であろうと魔物であろうと、奇跡というものを孕む存在を許さぬ者たち。あの瞳が、それを可能としてしまう」

真剣な表情で、暗に忠告の言葉を三十郎は紡ぐ。立場でいうなら二人は会話さえできないくらいの差があるのだが、そのようなことは気にしていない。

「そして本当に恐ろしいのは、鬼裂 現当主、鬼裂高楼ではありません。確かにあの者の戦闘能力は群を抜いておりますが、真に恐怖すべき 鬼裂 の末裔が別に存在します」

「……何？」

そこで初めて、宗主の表情が変化した。彼が聞いた報告と違うことを不審に思っている。

宗主という立場は、会合を統べる立場だ。その宗主に届けられる情報に嘘だということはありえないといつてもいい。日本最強の霊術師。それが宗主だからだ。情報網も半端ではない。

だが三十郎が嘘を吐いている様子もない。宗主はただ黙って続きを待った。

「鬼裂高楼は確かに強力な術者です。？不幻の瞳？によつて霊力が使えないにもかかわらず、会合や協会の術者であろうともその刃の一振りで討ち滅ぼす現代の魔殺し。しかしながら、あの者は一族の最高傑作ではありません」

「それほどの存在が、最強ではないということか？」

「左様。鬼頭 の一件、どう聞き及んでおられる？」

「鬼裂高楼が襲撃したと聞いておる」

宗主のその言葉を聞き、三十郎はため息を吐いた。真剣な表情だ。

「鬼裂高楼は 鬼頭 を襲撃したわけではありません。むしろその逆。親交を深めるために 鬼頭 のもとへ息子と共に二人で出向か

れた」

「待て。それはどういうことだ？ 報告によれば、鬼裂高樓が 鬼頭 本家を皆殺しにしたと――」

「皆殺しにあった家で起こったことの真実を、誰が知り得るというのです？」

三十郎のその言葉で、宗主は彼の言いたいことを悟った。その姿を見て三十郎は少し口元を緩め、宗主に背を向ける。

「しかし、真実にどれほどの価値があるのでしょうか？ 宗主の仰られるとおり、時は既に動き出している。魔殺しでありながら魔と共に歩もうとした千年前の若造も、現代の平和主義者も、時に流されて望まぬ道を歩むことになりました」

「何を言っている？」

「だからせめて、私だけでも平和主義者の意志を汲み取りたいと思います。己のすべてを捨てても戦友が守ろうとしたものを、守りに参ります」

三十郎が、歩き出す。その背中に、宗主は何も言わなかった。ただ、三十郎が去った後、一言だけ。

「戦争か」

そう、呟いただけだった。

――今より約、十二年前の話である。

漆黒の空間。周囲に広がるのは闇のみで、地面に二つの不可思議な陣が描かれている以外、別に妙なところはない。光も、陣から発せられているもののみだ。

そんな異常な空間にありながら、涼牙は何故か冷静だった。

「なあ、お前。真実を知る勇気があるか？」

涼牙が立つ陣とは別の陣の上に座る、着物を着た涼牙と同じ顔をした少年が口を開いた。普通なら不審に思うところだが、涼牙はそいつを冷静に受け入れる。

「内容によるな」

「お、いい反応。嬉しいねえ。普通ならびびるとこだと思うんだけどな。ほら、ここはどこだー、とか」

「あいにくと、俺にそんな感情はない」

きつぱりと言い切る。普段から涼牙は感情に乏しい。呆れる顔や笑顔などを見せることはあるが、それは作り物だ。心の底からの感情など、見せたことはない。

心の底からの感情は、無防備だ。独りで生きることを決めた涼牙は、誰にも無防備なところをみせられないと幼い頃に思い、そう決めた。今でもそれは思いつし、だから彼の感情は至極冷めたものになっている。

相手は、そんな涼牙に話しかける。

「だろーよ。お前は感情を宿すことを自らやめた人間だ。そうすることでお前はお前を保つことができなかった。十二年前の記憶を封印すると共に、感情も封印した。まあ、孤独だったってのもあるみてえだけど」

「何を言っている？」

涼牙が問う。その表情は無表情だが、少しの動揺があった。相手が口にした『孤独』という単語。それは確かに、涼牙から感情を奪った要因だ。

そして何故かそれを知る相手は、簡潔に答える。

「何って、事実だよ。お前が外的要因と内的要因……要するに他人の干渉と自分の意志で封印してることがあるってことだ。だがそれも限界が近い。そこで急遽俺が出て来たわけだ。つか、俺が外的要因なわけだけど」

「意味がわからないな。何が言いたい？」

「つまり、真実を知る気はあるかどうかってことだよ」

先程の問いに戻った。相手が楽しそうに笑う。

だが涼牙は笑えない。夢の中の出来事だろうと笑い飛ばせばいいはずなのに、できない。

そんな涼牙を見ながら、言い聞かせるように相手は言葉を紡ぐ。

「まあでも、結局あれだ。お前は逃げらんねえよ。今回の件の中心近くにお前はいるんだ。この町の失踪事件だけどな、実を言ってお前が原因だ」

「何だと？ どういうことだ？」

言葉に納得できず、涼牙が口を挟む。相手は薄く笑った。

「そのまんまの意味。まあ、結局はお前次第なんだよ。お前がどうするかで、この町の道行きは決まるんだ。そしてお前が選んだ道次第では、凄惨な戦が始まる」

「話が読めない。大体、俺が失踪事件の原因だと？」

「まあでも安心しろ。お前が拉致してるわけじゃねえ。お前はあくまで原因——正確にはその右目がだけどな。それが原因だ」

そう言つて、相手は涼牙の右目を指差す。何がなんだかわからなかった。

だがそれでも、彼は決断した。

「真実とやらを知れば俺は何かができるのか？」

「さあ？　ただ、何も知らねえ状態なら何もできねえだろうよ」
「そうか、なら聞かせてくれ」

涼牙は頷き、自らの意志を告げる。相手は真剣な表情になり、口を開いた。

「まず言っておくぜ。お前は、人殺しだ」

第三話 不幻の瞳（後書き）

連続ですみませんが、第三話です。

いま読み返すと、説明不足な面が少し目立ちますね……。

《十六夜八鬼》については、まあ、設定の一つとってください。

感想など頂けると嬉しいです。ありがとうございました。

第四話 過去と現代、記憶と未来

その日、俺は世界が壊れたことを知った。

白鷺市の北に聳える山々。その中心にある一番高い、地元では霊山と呼ばれる山。そこには、神社がある。

長く、四百四十四段存在する石段を登った先にあるのは、質素な神社だ。

神主がいるわけでもなく、あるのは御神体が安置された社のみ。周囲にあるのは、石畳と砂利だけだ。地元民でもほとんど訪れない、ある意味隠された場所。

その普通なら人がいない場所に、それらはいた。誰かが、言葉を紡ぐ。

「これより、顕現の儀式を始める」

般若の面を被った、二十一人の人。全員が死装束を着た異常な集団は石畳の上に複雑な陣を描き、中心に一人の少年を置いて陣にあるそれぞれの頂点に立っている。

陣の中心に、眠るようにして横たわる少年は学生服を着ていた。寝ているというのにメガネをかけたその少年は、どこか苦しげに横たわっている。

そして、その中のリーダー格らしき男が錫杖を持ち、言葉を続ける。

「力は満ち、星は動いた。最上に至らぬものの、今を逃せば顕現は

不可也」

シャンと、錫杖の先端に取り付けられた環が鳴る。

「重きを置くは、より完全であるか否か。原理法則の干渉を一切気にせず、命を散らして顕現させん」

ジャリツと、砂利を踏み鳴らす音が響く。周囲にいた般若の面全員が、一瞬のずれもなく足の幅を広げたためだ。

「我らの命は今がためにあり。今こそ契約を果たさん」

パンと、乾いた音が響く。全員が手を合わせた音だ。

「靈力展開……発動！」

叫ぶような声が迸り、周囲の者たちが靈力を放出させる。リーダー格の男は錫杖を地面に突き刺すと、両手を合わせて詠唱を開始した。

「夢を与え給ひし者。夢を断ち切りし者。汝、今こそ我らの前に顕現せよ」

『我らは僕。^{しもへ}我らは刃。汝がためであるならば、卑しき生に価値など無き』

「数えし星は幾星霜。夢は始まり、時は続き」

詠唱が進むにつれ、膨大な靈力を陣が纏い始める。風が力に反応し、震え始める。

周囲の森からは、獣が消えていた。すべては、今から現れるものを恐れてのことだ。

この地に残され、今は忘れられた存在が、顕現しようとする。

すべては、この地に住む神の存在から始まった。

かつて、皇がまだ神であつた頃。地上にまだ神がいた頃の神話の一つ。

極東の島国には、八百万の神々と数千万の人。数百万の魔物がいた。彼らは各々の住む場所から離れず、干渉しないように生きていた。だが、一つの村は例外だった。

そこには神も人も魔物も存在し、共存していた。大きな村ではなかったが、そこは平和な場所だった。だがその平和も、一瞬で崩れ去る。

人の側に現れた、霊術師という存在。彼らは魔物を悪と断じ、襲い始めた。魔物も彼らに抗し、人を襲い始め——戦争が、始まった。神々はそれを嘆き、人と魔物を諫めようとした。

しかし、人と魔物はそれを受け入れず、神々に向かって攻撃を仕掛けた。

本来ならば、神は人や魔物に滅されたり封じられるような存在ではない。しかし、神々は地上に顕現する際その力を封じてしまっていた。世界を統べる原理法則を、神々は地上に存在するだけで壊してしまうためだ。

結果として大半の神々は封印され、その余波は平和な村にも降りかかった。

裏切り者と呼ばれ、殺される村人たち。その姿を嘆き悲しんだその地の神は、己の命をその地に眠らせ、結界を張った。

その地では誰も争わぬようと、願いを込めて。

「ここに捧げるは汝らが血を受けし高名なる存在」
『十六の夜が末、二夜誠也の名の許に』

陣が、輝きを増す。靈力が収束していく。

「我らが紡ぐは久遠の命。ここに生まれしは、絶対者なり！」

錫杖が輝き、砕け散る。月が、消える。

中心にいる少年に光が収束し、世界が弾けた。

風が吹き荒れ、木々を薙ぎ倒す。陣を囲んでいた者たちはその風により体が塵となり、消滅した。

そして、中心に立つ少年が立ち上がる。

「久方振りの世界は……やはり息苦しい」

歳相応の声質で、しかしどこか相手に圧迫感を与える声で少年は呟く。

空を、月の隠れた闇夜を見上げ、少年は呟く。

「我に宿るこの燃えるような感情は何だ？ 怒りか？ 憎悪か？」

答える者などなき場所で一人少年は呟く。

「よいだろう。我はすべてを許そう」

右手を広げる。

「我を忘れたことも。我が契約に反して争いを続けたことも。すべて許そう」

左手を広げる。

「だが殺す」

両手を広げた姿でその瞳に冷たい色を宿しながら、少年は言った。

「我が憎しみ、憎悪。その根源は貴様たちに在る。しかし我も一介の神。故に慈悲を与え、すべてを許そう。だが殺す」

風が、怯えるように吹き荒れる。

「すべてを滅し、すべてを終わらせよう。我は神——すべてを統べる者なり」

少年が歩き出す。ゆっくりと、石段を降りていく。そして、その姿は消えた。

「それが、すべてなんだな？」

確認の意味を込めて問うた涼牙の言葉に、フィアはしっかりと頷いた。

「そうだ。この町の失踪事件には、この地に封印された神が関わっている。千年前に封じられたが、今それを行えるかというところだと断言できる。当時の話は何一つとして伝わっていない上、神に抗する力もない」

「神といってもその力の大小は様々です。しかしどれほど矮小であろうとも神は神。人であろうと魔物であろうと、絶対者を越えることは許されません」

涼牙の隣に座る優飛が断言する。机の向こうにフィアが座り、涼牙と優飛が並んで座る構図だ。

フィアは真剣な表情で続きを話し始める。

「あいつは……誠也は、それを知っていた。だからこそ《十六夜八鬼》から自ら離反した靈術師が放置されている。誰もが、この地では争うことができないようになっていたためだ。それがこの町限定の原理法則として成り立つよう、結界が術を構築している」

「原理法則……確か、現象の在り方だったか？」

度々聞こえてくる言葉に対し、涼牙は確認の意味を込めて触れる。夢のような空間で聞いたことが本当であるならば、そういうことのはずだ。

そして、涼牙の言葉に対しては優飛が答える。

「そうです。例えば、物は地に向かって落ちる。それは重力という原理法則です。それに干渉することにより、靈術で物を浮かせたり自分自身が宙に浮かんたりします。要は、世界を支配する現実という法則が原理法則です」

「ようやく、靈術というものがわかってきた」

「それは何よりです。……フィア、続きをお願いします」

優飛がフィアを見る。フィアは小さく頷いた。

「裏切り者を会合は許さない。だから誠也はこの地に逃れた。そしてこの地を包む結界を説明しようとしたのだ。それを世界規模で実現できれば、世界中から争いが消えるのではないかと思っただけ。この町に来た、八年前の話だから」

「絵空事です。争いがなくなつた世界に未来はありません。悲し

き話ではありますが、人は争うことで成長してきました。それが現実です」

身も蓋もない優飛の言葉。それを受け、フィアは苦笑する。

「まあ、当時八歳の子供が考えることだ。今はその現実を誠也もわかってる。そして、この町がもう限界だという現実も」

「限界だと？」

「そうだ。この町を囲む結界。それが限界を迎えようとしている。誠也はそれを察知し、手を打っていたがすべて無駄に終わった。誠也が消えた夜、あいつは一人で賭けに出たが失敗した」

「一人とは、無茶をしましたね」

眩きと共に、冷めた視線を優飛がフィアに向ける。フィアは拳を握り締めた。

「私が愚かだった。理屈を無視して共に行けばよかったのだ。勝てぬ戦だとはわかっていたのに、あいつが笑っていたから……私は……」

「誠也が死ぬような奴か」

立ち上がり、涼牙は言った。

「あいつは馬鹿だ。お調子者だし、いつもいつも俺を巻き込んで騒ぎを起こしてくれる。こっちとしてはいい迷惑だ。だが、しぶといし人としての在り方はわかっている。あいつが帰ってくると言ったのなら、帰ってくる。約束を破るような奴じゃない」

「そうか。……ありがとう」

「いや。……それに、すべての原因は俺にあるんだろう？」

立ち上がり、台所へと飲み物を取りに行きながら涼牙は言った。フ
ィアの体が反応し、優飛の瞳が細められた。

「よくわからないが、俺の右目がすべての原因らしいな。？不幻の
瞳？だったか？ 俺の右目がこの町の結界を弱らせていたんだろう
？」

「……何故それを知っているのです？」

静かに、優飛が呟く。飲み物を入れたコップを運びながら、平然と
涼牙は答えた。

「俺の中にいるらしい人格が全部教えてくれた。右目のことも、こ
の町の結界を俺が無意識に食い破っていたことも、十二年前に俺が
七つの一族を滅ぼしたことも。全部」

「……………」

「だからまあ、俺としては事情を理解したい。責任を取らなければ
ならないし、その義務がある。やりかたも、教えてもらった」

コップを並べ、涼牙が微笑む。しかし、その笑顔を見た優飛とフィ
アの二人は背筋に冷たいものを感じた。

涼牙は、一般人だった。十二年前は確かにそうでなかったかもしれ
ないが、今はただの一般人のはずだ。なのに、その雰囲気はどうだ？
身に纏うは、静かなる殺気。静か過ぎて相手を恐怖させるような気
配がそこにある。

「涼牙さん——」

優飛が口を開き、自らの不安を消そうとした瞬間、地震が起こった。

「——ッ！」

涼牙が座り込み、優飛を支える。フィアも机にしがみつき、それを耐える。

一分か、それ以下か。時が過ぎ、地震が収まる。

「地震……？」

優飛の肩を掴み、支えていた手を涼牙が離す。日本という国で地震は珍しくない。だが今のはどこか異質な感じがした。涼牙に支えられていた優飛が、小さく呟く。

「……始まりました」

「え？」

「千年前、一度幕を下ろされた戦い。それが始まりました」

窓より見える空を眺め、優飛が言う。その言葉の意味を、涼牙は悟った。

優飛が、言葉を続ける。

「星は未だ最上に至らず。されど、彼の者の力は復活せし……」

「優飛？」

「それほどまでに世界を憎まれるのですか？ 絶対なる我が祖よ」

優飛の瞳が、光を失う。そして――

「優飛！」

その体が、崩れるように倒れた。夜が、更ける。

「凄い地震でしたね」

「ええ。そうね」

コツコツと深夜の学校に靴の音を響かせながら、香織が答えた。今日の宿直担当である彼女は校内の見回りをしているのだ。そしてその隣では、忘れ物をしたといって学校に来た藍那がいる。

「でもすいません。香織先生に迷惑かけちゃって」

「いいのよ。どうせすることなんて大してないし」

「そう言ってもらえたら嬉しいんですけど」

夜の学校に、快活な藍那の声が響き渡る。いつも通りに見えるが、藍那は極度の怖がりである。今も会話をすることによって恐怖心を隠そうとしている。

香織は恐怖など感じないのだが、生徒との会話は嫌いではない彼女にとって話しかけられることは別に嫌ではない。

香織と藍那は教室に向かって歩いていく。その途中で、思い出したように香織が言った。

「そういえば、二夜くんが失踪したらしいわね」

一応教え子である。複雑な背後関係があるとはいえ、気にならないわけではない。

突然のその言葉に藍那は驚き、どこか沈んだ声で答えた。

「あ、はい。正直、信じられないですけど……」

「わたしもそうよ。軽薄で問題な行動が多くてしょっちゅう職員会議で名前が挙がるけど、頭が悪いわけじゃない。物事の本質を見る力がある。その彼が失踪なんて、確かに性質の悪い冗談としか思えないわね」

「はあ……。よく知ってますね」

感心したように藍那が言う。香織は苦笑しながら言った。

「教え子のことを理解しようとするのは、教師の勤めよ。何なら、他の子のことも言いましょうか？」

そう言つて、香織は言葉を紡ぎ始める。

「例えば、フィティア・レウ・クラスハーケン。こんな辺境の田舎高校に留学してきた変わり者だけど、本人の性格は真面目で一途。これと決めたら迷わず突き進むタイプね。責任感が強くて、何でもかんでも自分のせいにしてしまうのが少し問題ね」

「あ、わかる気がします。それ」

藍那が苦笑する。フィアは優等生なのだが、融通がきかないとか頑固というか、とりあえず堅物である。いい人ではあるが。

「例えば、神谷涼牙」

その名が出た瞬間、藍那が鋭く反応した。それに気付かず、香織が言葉を紡ぐ。

「結論としていうならば、大人びた性格ね。多少のことでは動じないし、どこか達観している。いえ、諦めてるって言ったほうがいいかもしれないわね。現状がこれ以上良くなることを諦めている感じ

がするわ」

「……………」

「まあ、彼ほど腹が読めない高校生も珍しいけど。本当に、何を考えているのか……」

ため息でも吐きたそうな様子の香織。その香織に、藍那は口を挟んだ。

「涼牙は、怖いと思います」

「怖い？」

「はい。無愛想な感じがするけれど、話しかければちゃんと答えてくれますし、優しいとは思うんです。でも、絶対にある程度以上は踏み込ませない雰囲気があつて」

「成程ね……」

藍那の言葉を聞き、香織は考える。確かに、涼牙は壁を作っているように思える。自分から他者に話しかけるところもほとんどない。別に悪いとはいわない。それが涼牙のやり方なのだろう。高校生なのだから、いちいち口を挟むことでもない。だが、涼牙に限っては話が別だ。

（放置しておけるわけがないのよね……）

今はもうほとんど関わりがないとはいえ、一応自分は関係者だ。十二年前のことも考えると、放置はできない。

「まあ、土壇場までわたしにできることはないけど……」

「え？」

小さな呟きに反応し、藍那が首を傾げる。香織は首を横に振った。

「何でもないわ。それより、着いたわよ」
「あ、はい」

教室の前に辿り着いたことに気付き、藍那が教室内に入る。ほどなくして、チラシの束と一冊のノートを持って出てきた。

二人は校門に向かって歩き出す。その途中で、香織は藍那に問いかけた。

「そのチラシは？」

「あ、これですか。見ます？」

どこか楽しげにそう言つと、藍那はチラシの束から一枚だけ抜き取り、香織に手渡した。受け取った香織は、大きく書かれた文字を読み上げる。

「……『白鷺祭』……？」

「はい。六月二十五日に毎年この町の神様を降ろすお祭りをしていくらしくて。今年もやるそうなんです。夏祭りより少し早くて中途半端な時期ですけど、活気がありますよ？」

「へえ……それはまた面白そうね」

「うちの学校の部活動も屋台とか毎年出店してるんです。剣道部は演舞をするんですよ。是非見に来てください」

「暇だったらね」

熱が入り始めた藍那に適当に答え、改めて香織はチラシを見る。言われて気付いたが、これは結構前から騒がれていた記憶がある。忘れていたが。

しかし、何故今これを執り行つ？

今この町は非常に不安定だ。失踪者の多発。これはもう大事件とい

ってもいい。なのにどうして、祭りなどを執り行つ気になる？
そして何故、それを藍那は不思議に思っていない？

（何かありそうね）

確信に似た思いを抱く。このお祭り、関わるべきかもしれない。
二人はしばらく歩き、校門まで辿り着く。

「今日はありがとうございました」

「気をつけて帰りなさい」

「はい」

藍那は頷き、早足に帰っていく。夜道を女子高校生が一人で帰ると
いうのは危険な気がするが、一応保険はかけてある。大丈夫だろう。
香りは背伸びをし、白衣を翻す。それと同時に、背後にいる人物に
声をかけた。

「入りなさい。わたしに用があるんでしょう？」

「……はい。ですが——」

協会の戦闘衣を着た金色の騎士が、背後に立っていた。その右手に
は巨大な紅蓮の盾があり、いつでも戦闘ができるという様子だ。
対し、香織は無防備。その香織に対し、金色の騎士——ファイアが盾
を構えた。

「——その前に、実力を測らせて頂きたい」

言葉を発すると共に、地面を蹴ってファイアが香織に迫る。香織は白
衣の内側から液体の入った試験管を取り出すと、振り返り様に投げ
つけた。

フィアはそれに気づき、一度足を止めて右へと避ける。だが試験管はフィアのいた場所に到達する前に静止し、輝き始めた。

「——捕縛せよ、？水流の華？」

詠唱の言葉が紡がれ、霊術が発動する。試験管が砕け、中に収められていた液体が体積を増し、爆流のようにフィアを襲う。

「西洋霊術……！」

舌打ちと共に、フィアが巨大な盾を構える。触手のように伸びる数本の水柱はその盾を避けようとしたが、できない。

「うん？」

「盾の騎士、フィティアの名において命ず！ 我を守れ、聖盾！」

フィアの叫び声と共に盾が紅蓮に輝き、すべての水柱が吸い込まれるように盾に直撃する。傷一つない盾は、より輝きを増していた。

「宝具ね……。確かに聞いてた通り厄介みたい」

「聖騎士部隊に伝わりし最強の盾。易々と破れると思われぬよう」「そうみたいね。でも——」

やる気の無い表情は相変わらず。だが、珍しくその瞳の中に闘気を宿し、香織は白衣の中から試験管を取り出す。指の間に挟むようにして六本の試験管を持ち、言い放つ。

「守りだけじゃ、わたしには勝てないわよ。こう見えて、前衛型だから」

地面を蹴り、牽制のために六本の試験管すべてを香織は投げ上げる。宙を舞う液体の入った試験管。それが二人の中間地点に達した瞬間、香織が更に靈術を発動する。

「——オン・アララキ、蹂躪せよ、？久遠の水源？」

左手で印を刻み、右手で拳を作りながら香織が失踪する。試験管が、弾けた。

試験管から弾け出た液体は体積を急激に増やし、その半分は弾丸のように細かい形でフィアを狙い撃つ。残り半分はまるで檻を作るかのようにフィアの上へと降り注ぐ。

「陰陽術と西洋靈術の併用……！」

「使えるものは何でも使うのがわたしの主義よ。そのせいで会合から追放されたんだけど、元々興味なかったからどうでもいいわ」

降り注ぐ水の攻撃に加えて、接近してくる香織。フィアは意識的に呼吸を止めると、盾を上にも構えた。

すると、すべての術が吸い込まれるように盾へと直撃する。そして、盾が輝きを増す。

「……………」

それに対して眉を寄せながら、香織が踏み込む。普段のやる気のなさそうな姿からは想像できないほどに鋭い拳が、フィアを襲う。

ガキンと、鈍い金属音が響いた。香織が拳の先に装備した鉄の輪と、フィアが装備する手袋の中に備え付けられた金属板が激突した音だ。

「流石は協会の騎士ってところ？」

「先生こそ、普段からは想像できないお力ですね」

力の拮抗による硬直。しかしそれは一瞬。香織がファイアの手を弾き、距離を取る。

「正直、今更裏側に関わる気はないのよ。だから面倒だけど、倒させてもらうわ」

「そうはいきません。こちらにも、理由がある」

「なら、力で示しなさい」

その言葉と共に、香織は白衣のポケットから二枚の形紙を取り出す。式神を召喚する時に用いられるそれが、宙を舞う。

「——オン」

自己暗示とも取れる、陰陽道の詠唱。印を必要としない特殊な術式が完成する。

形紙が光を放ち、二体の式神が姿を現す。それは、鬼だった。

一体は青銅の肌を持つ、人と変わらぬ大きさの鬼。剥き出しの上半身には彫刻のような筋肉があり、研ぎ澄まされた霊力が漂う。

もう一体は赤銅の肌を持つ、上半身が地面から生えるようにして存在している巨大な鬼。上半身だけであるというのに、その大きさは三メートルを優に超えている。

「説明する必要、ある？」

「陰陽術師が好んで用いる、自らの守護のための守護神ですね？」

「ご名答。残念ながらわたしの手はこれが最後。これを打ち破れたら話を聞いてあげるわ。できなければ帰りなさい。どう？」

明らかな挑発を、香織はファイアに向ける。ファイアはそれを受けた。

「二言はありませんか？」

「無論よ」

「ならば、打ち破らせていただく」

凄まじいまでの輝きを放つ盾を構え、ファイアが言い放つ。右手の盾を前面に出し、突撃の構えを見せた。

香織はその姿を見てもやる気なさげな表情のまま、青銅の鬼に命を下した。

「天夜叉^{てんやしちや}。行きなさい」

天夜叉と呼ばれた鬼の式神が反応し、地面を蹴る。人外の速さで天夜叉はファイアに接近する。だが、その動きは急に止まった。

天夜叉の体を、突如現れた水の鎖が拘束している。

「……………！」

香織の表情が僅かに変化する。そして命を下そうとした瞬間、ファイアの突進が天夜叉の肉体を貫いた。そして、天夜叉の肉体に大穴を明けた勢いそのままに、ファイアが突進する。

「地夜叉^{ぢやしちや}！」

叫び声のような香織の言葉に反応し、上半身だけの赤銅色の鬼が動く。地夜叉の体が動き、香織の前に進み出る。その姿を見てもファイアは止まらず、盾を前面に出して更に速度を上げた。

地夜叉が腕を広げ、迎え撃つ体勢に入る。その瞬間、銃弾のような速さで迫るいくつかの水の弾丸が地夜叉を襲った。

「……………！」

地響きのような衝撃が響き渡り、香織は思わず目を瞑った。
そして、その隙が致命的となる。

「詰みです」

風が流れ、香織が目を開けたその先にいたのは、周囲が研ぎ澄まされた刃となっている巨大な盾を首筋に突きつけるフィア。その背後には、体に無数の穴と胴体に巨大な穴を穿たれた地夜叉だった。その様子をゆつくりと眺めると、ため息と共に香織は両手を上げた。

「まいったわ。手持ちが護身用程度しかなかったとはいえ、負けは負けね。その宝具の能力を過小評価してたみたい。まさかわたしの霊術を吸収して自在に打ち出すとは思わなかったわ」

「聖盾にはいかなる術も通用しません。すべてを吸収し、力に変えます。吐き出すこともできますが、純粋にこの盾の力に変えることも容易です」

「解説ありがとう。まあ、わたしが世間知らずだったってことで今日は退いておくわ。……それじゃあ、本題に入りましょう？」

フィアが盾を引いたのを見て、香織も手を下ろす。今更抵抗するつもりは無い。元々どっちに転んでも良かったのだ。

フィアは頷き、空を指し示す。香織はそれに従い視線を上げ、眉を寄せた。

雲一つないのに関わらず、星が無い空。田舎町である白鷺市ではある意味異常な光景だ。そして、その空に浮かぶのは――

「紅い月……？」

まるで血の色を写し取ったかのような鮮明な紅。それを宿す月が、

空に浮かんでいた。

香織は吸い込まれそうな魅力を放つその月から視線を外し、フィアを見る。

「何ともわかり易いわ。神様、目を覚ましたみたいね？」

「……ご存知でしたか」

「この町に来たばかりの時、彼——二夜誠也から聞いたのよ。この町を囲む超の上に十個以上は超が付くような高性能結界。その作り手は誰なのか、って思ってたね」

「それで、お聞きになれたのですか？」

「神様のこと。その憎しみの深さ。千年前、一人の人柱が封じたということ。知ってることは全部教えてくれたわ。そして今、それを凄く後悔してる」

言いながら、香織は状況をすべて理解した。ここへ来た去年に、誠也が教えてくれたこの町の秘密。そして、空に浮かぶ紅蓮の月。それが意味することを。

もしかしたら、あの少年はすべてを見越して自分に話したのかもしれない。

だって、すべてを知っていながら動かないのは矜持に反する。自分のその性質をおそらく、あの少年は見抜いていた。普段面倒臭そうにしているのは、それを隠すためだ。自分でいうのもなんだが、こう見えて情は深い。

そしてこの状況は、動く理由に値する。

（面倒なのは変わらない。でも、この町を消させるわけにはいかない）

止める方法は既に知っている。いや、授けられている。

香織は息を吐くと、フィアを見た。不安そうな表情だった。

「ええ、後悔してるわ。聞かなければ、抗う前に死んでいただろうし。だけど聞いてしまった。わたし個人という存在に対してわたしは何も思うところは無いけれど、それを他の人たちに強制させる道理も無い」

「ならば……」

「封印の靈術を発動させるために、会合レベルの靈術師が欲しかったんでしょう？ 多分だけど彼もそれを望んでわたしに全部教えてたんだろうし……仕方ない。動くわ」

心底面倒臭そうに、香織は言った。ファイアの表情に歓喜の色が宿る。白衣を翻し、香織が歩き出す。

「今夜はまだ、神も動けないはず。今のうちに、術式の構築を始めるわよ」

「はい！」

その背を、ファイアが追う。だが二人は気付いていなかった。この町の結界を壊した力。その力の強大さに。町の片隅で、戦いが始まっているということに。

「優飛、大丈夫か？」

眼帯で右目を覆い、？不幻の瞳？を封じた状態の涼牙が問いかける。優飛はベッドの上で力なく笑った。

優飛が寝ているのは、涼牙の部屋のベッドだ。優飛の部屋に入るの

が何となくできなかった涼牙が倒れた優飛を運んできた。フィアは涼牙にいくつかの助言をするとやることがあると言ってしまった。

そのため、今この家にいるのは二人だけである。

優飛が悪い優飛。それを見て、ポツリと涼牙が呟く。

「すまなかつたな」

「え……？」

「俺の右目が優飛を弱らせていたんだろう？ 無自覚だったとはいえ、申し訳ないことをしてしまった」

言って、涼牙は頭を下げる。優飛は慌てて否定した。

「涼牙さんの責任じゃありません。その瞳は血で受け継がれるもの。受け継いだだけの涼牙さんには何の責任もありませんし、吸血鬼の真祖たる私のような原理法則を外れた存在を滅するには強力な武器と成り得ます」

「だが、俺にそんな意志は無い。正直まだ霊術師に関しても認識しきれていないのが現実だ。この町の結界を俺が壊していたことに関しても、現実として認識できない」

この町を守る結界を自分が食い破っていたという話はフィアから聞いた。だが、それを実感として受け止められない。

「俺の中にいるもう一人の俺が言っていた。俺は奇跡と幻想に対する死神だと」

「……そうですね。その瞳は魔眼の中でも最上の能力を有するものです。どのような霊術師、魔物が相手でも互角以上に渡り合えるでしょう……っ……」

「優飛！」

言葉が尻すばみに弱くなり、優飛の体が傾く。涼牙はその体を支え、横にさせる。

「弱らせた俺が言うのもなんだが、ゆっくり寝たらどうだ？」

「いえ、真祖と呼ばれる吸血鬼は単純な時間経過で力を取り戻せます。なので、少しだけ……その、お話でも……」

ゴニョゴニョと、尻すばみに沈んでいく言葉。それがどういう意味を示すのかわからなかったが、涼牙はとりあえず微笑んだ。

「それならいい。一人にするのもどうかと思うし、しばらく付き合おう」

「ありがとうございます。……ちょうどいい機会ですから、吸血鬼についてお話しますね。この町の神にも関係していますから」

微笑みながら、しかし真剣に優飛は言った。

「……聞こつ」

表情を引き締め、涼牙は頷く。優飛はポツリポツリと話し始めた。

「吸血鬼といっても、種類は色々あります。例えば、私のように禁術を用いて自ら吸血鬼になる者。もはや失われた術ではありますが、禁術によって吸血鬼となった者はすべての吸血鬼の祖となる吸血鬼、『真祖』になります」

「優飛はその真祖だったな？」

「はい。今の時代に真祖はおそらく三人といたでしょう。魔女狩りの時代に大抵が狩られましたから。また、真祖が血を吸うことによって生まれる不完全な吸血鬼、『屍鬼^{ゲール}』になります。一般的な吸血鬼のイメージはこちらですね。陽の光を浴びると吸血鬼となった

体の組織が耐えられず、崩壊する。にんにくが苦手だというのは匂いがきついたためですね。十字架は苦手というわけではなく、吸血鬼の肉体を封じるのに一番適しているというだけです。見てくれが伝わったのでしょね」

「成程……。じゃあ、真祖は陽の光とかを苦手にしていないのか？」

相槌を打つようにして涼牙が発した問いに、優飛は難しいですねと苦笑した。

「陽の光で体が滅びることはありませんが、力は六割程度しか出せない上に、体も重いです。眠いですしね。にんにくは問題ありませんが、十字架が力を封じる霊具としては一番効果があるというのも変わりませんね」

「それはまた不便だな」

「全くです。しかし寿命は永遠ではありませんが不老不死ですし、力も圧倒的です。ハイデライトウォーカー……『陽の下を歩く者』なんて呼ばれる真祖は間違いなく最強種ですよ」

「……じゃあもう一つ。血を吸われれば必ずその屍鬼^{グール}になるのか？」

「量と相手の資質によります。屍鬼とは屍の鬼。つまり死体でなければ意味がありません。致死量の血を吸いとられた上で適正があれば屍鬼となります。屍鬼は吸血衝動が強く、血を吸わなければ体が崩壊するので人を襲うことも多いですね。協会が発見次第抹殺する要注意の魔物の一角です」

どこか自嘲するように優飛は言う。屍鬼を生み出すのは真祖だ。そういう意味では思うところがあるのかもしれない。

涼牙は数瞬迷った挙句、質問を口にした。

「屍鬼に血を吸われた奴はどうなるんだ？」

「死ぬだけです。稀に血を吸い続けることで真祖に至る屍鬼がいま

すが、歴史上一体しか存在しません。私の知る限り吸血鬼は協会でも伝説の存在で、文献ぐらいいにしか姿を現すことはありませんね」

「今日の前にいる以上、信用できません」

「確かに」

優飛が苦笑する。そして、苦笑が憂いへと変化した。

「……吸血鬼は血を吸う必要が無いんです。前に一度言いましたよね？ 昔は必要としていた、って」

「ああ。言っただ」

出会った日に聞いた記憶がある。長い年月を過ごすうちに必要なくなったということだったはずだ。

優飛は頷くと、どこか寂しげな目で話し始めた。

「吸血鬼は古来より敵視されていました。強大な力を持つとはいえ、単騎では霊術師に殺されてしまう。故に手駒を必要としたんです。それが屍鬼でした」

「……手駒を揃えるために敵方の存在を自分の劣化型に変える、か。理に適っているな。敵に送り込めば勝手に疑心暗鬼で殺し合いをしてくれるだろうし」

「はい。忌々しいほどに理に適っています」

吐き捨てるように優飛は言う。体から怒気が伝わってくるようだ。優飛は唇を一度強く噛み締めると、思い切ったように言い切った。

「そしてもう一つ。真祖が吸血行為をする理由があります。それは、快楽を得られるから」

「……………」

「吸血は普通の食事に比べ圧倒的な栄養と霊力を手に入れることが

できます。上手くいけば配下も手に入る。よくできたシステムです。何よりもその快樂は忘れられないほどのものだそうですよ」

「……まあ、そうだろう。吸血なんて元々人間だった奴にしてみれば忌避すべき行為だ。それをさせるほどの何かがあるからこそ吸血鬼なんだろうな」

言いながら、涼牙は自分を変だと感じていた。いくら何でも冷静すぎる。

元々周囲から達観しているだのオッサン臭いなどと言われてきたが、この状況で冷静に物事を判断するのは少し異常ではないか？

（まあ、順応しているということにしておこう）

危険な思考に陥りそうになったのを強引に引き戻す。そこで、涼牙の思考が一つの事実に行き着いた。

「なあ、優飛」

「はい？」

「俺の血を吸えば、回復も早くなるんじゃないのか？」

「……………！」

優飛の表情が劇的に変化する。その表情を見ながら、涼牙は冷静に告げた。

「元々俺の責任だ。致死量の血を吸われなければ死ぬことは無いんだろう？　だったら回復のために吸ってくれ」

「ちよつと待ってください。確かに血を吸えば回復は早くなります。でもその……怖くないんですか？　私が嘘を言っているかもしれないし、それに……」

「優飛は俺に嘘をつく理由があるのか？」

呆れたような声色で、優飛の言葉を遮りながら涼牙は言う。優飛が表情を変えた。

「ありません。ありませんよ、そんな理由」

「だっていいじゃないか。多少貧血になるかもしれないが、それは許容範囲内のことだ。存分についていうのも妙だが、遠慮なく俺の血を吸ってくればいい」

「あ……でも……その……」

「ん？」

未だ何か言い淀み、ゴニョゴニョと呟く優飛。涼牙は顔を近づけ、言葉を聞く。

「……私……血を吸ったこと……ない……ですから……その……怖くて……」

途切れ途切れの言葉がどんどん小さくなる。涼牙は苦笑した。

「成程。だから『らしい』という言い方だったのか。納得だ。でもな、優飛。フィアによると明日の夜、神とやらは動くらしいじゃないか。お前が万全じゃなくてどうする」

「う……」

「俺なら大丈夫だ」

念を押すようにして、涼牙は優飛を見る。優飛はしばらく視線を泳がせていたが、大きく深呼吸すると呟いた。

「…………わかりました」

「よしきた」

涼牙が頷く。その姿を見てもう一度ため息を吐くと、優飛は涼牙に手を伸ばした。

「……お礼に少しだけお返しします。拒絶しないでくださいね」
「ん？」

小さく優飛が言ったが、聞こえなかった。優飛は涼牙に構わず、口を開く。発達した犬歯が鋭く光った。
そして、ゆっくりと優飛の顔が涼牙に近付く――

夏独特の暑い空気が体に纏わりつく。涼牙は部屋から出ると大きく欠伸をした。

すると、ポケットの中で何かが振動した。携帯電話だ。

「……もしもし」

『あ、涼牙。やっほー！ 今大丈夫？』

眠気と少しふらつく頭を押さえつけながら涼牙が出ると、聞きなれたテンションの高い声が届いた。流石に涼牙も苦笑する。

「藍那。今はもう深夜一時だぞ？」

『あーホントだ。でも大丈夫よ。あたしたち今、明日……もう今日だけど、祭の準備してるのよ。ほら、声聞こえない？』

「何が大丈夫なのかわからないが……確かに騒がしいな」

電波状況が悪いための雑音だと涼牙は思っていたが、どうやら違うらしい。

「頑張ってるようだ」

『当たり前!』

「元気一杯だな。……そうか。今日の晩御飯がいらないうっていいのはこのためか」

戦いに赴く前、藍那からそんな連絡が涼牙にあったのだ。丁度良いといえば丁度良かったのだが、ようやく納得できた。電話の向こうでは、藍那が楽しそうに笑っている。

『うん。こっちに食べ物いっぱいあるから。涼牙のご飯のほう美味しいんだけどね』

「それはどうも」

苦笑する。こちらは先程まで死にそうになっていたというのに、こうして藍那と会話をしていると忘れられそうだ。

忘れることは絶対にはいけない——そんなことはわかっているが。

今回の責任を取らねばならないことも、また。

『涼牙?』

「あ、ああ。すまない」

怪訝そうな藍那の言葉で我に帰る。どうも最近、考え過ぎてしまうことが多い。

藍那は少し不審に思ったようだが、すぐに次の話題を切り返してきた。

『明日なんだけど、優飛と一緒に来なさいよ』

「優飛と？」

『そうそう。優飛はこの町に来たばかりだし、ちょうどいいじゃない。私と合流すれば賑やかになるしさ』

「……優しいな」

思わず笑みが零れる。昨日今日知り合った相手にこれだけ気遣いができるのは珍しい。

電話の向こうで、藍那が驚いていた。

『何か変なものでも食べた？』

「失礼な。……ただ、優飛は今寝ている。祭の件は本人に確認してからだな」

少しの真実を言葉に乗せる。祭にはおそらく行けないことも、口にはしない。

藍那はそんな微妙なことを悟ったのか、問いかけてきた。

『寝てるって、何かあったの？』

「いくら明日が土曜日とはいえ、普通なら寝てる時間だ。それにお前が言った通り、優飛は引越してきたばかりで疲れているんだろ
う」

『ふーん。まあいつか。とにかくそういうことだから明日の夕食も
いらないわよ。泊り込みで営業する予定だから』

あつさりとんでもないことを藍那は言った。

「……よく許可が下りたな」

『下りるわけじゃないじゃん。無許可よ』

「威張るな。……まあいい。とにかく祭には行けたら優飛と一緒に

行く。それでいいか？」

『おっけー！　じゃあねー！』

「ちゃんと寝るようにな。それじゃあ」

苦笑と共にそう返し、涼牙は携帯電話を切る。そして携帯電話を居間の机の上に放り投げると、のんびりと歩き出した。

歩きながら会話していたのだが、目的地にはまだ辿り着けない。本当にこの家の広さは異常だと思う。涼牙の両親が残してくれた遺産で涼牙の寝泊りする離れを多少改築したが、根本的な広さに変化はない。

霊術師であるという涼牙の祖父、神谷三十郎。あの男の仕事が気になる。

……ある意味知りたくないが。

「……………」

静かに道場の扉を開け、涼牙は中に入る。胴衣に着替えると、日本刀を抜いた。

正眼に構え、瞳を閉じる。漆黒の闇の中、閃光が煌く瞬間を待つ。どれぐらいそうしていたのか。ピクリとも動かない涼牙はまるで彫像のようだった。そして、締め切られた道場内の空気が変わり、涼牙の体が動く。

音もなく振り抜かれる刀。振り切られた後に、風が流れた。

そして、涼牙が目を開けたその瞬間——目の前に、敵がいた。

「——ッ！」

完全に虚を衝かれ、後退しながら涼牙は刀を構え直す。いくら何でも、この状況は異常だ。道場は締め切られていた。だというのに、目の前に誰かがいる。

いくら集中していたとはいえ、道場内は涼牙の領域。誰かが進入すれば気付いたはずだ。

そして、今尚目の前の相手から気配が感じられない。目を離せば見失いそうなほどに薄い気配を相手は漂わせている。

「誰だ？」

高鳴る心臓を黙らせ、涼牙が問う。道場の上の方に設置された窓から差し込む月の光が、その姿を露にした。

「なっ……？」

そして涼牙は、今度こそ冷静さを失う。

そこにいたのは、彼の祖父——神谷三十郎だった。

「いつ帰ってきた？ 温泉旅行中なんじゃないのか？」

「……………」

三十郎は答えない。ただ無表情だった表情を、凶悪な笑みへと変えた。

「……………！」

全身を駆け巡る悪寒を感じ、涼牙は横へと転がるようにして飛んだ。次の瞬間、涼牙が立っていた場所が粉碎された。

人間とは思えないほどの力で、三十郎が床を砕いたのだ。

「なんだというんだ、くそっ！」

刀を峰打ちへと構え直し、涼牙は床を蹴る。三十郎直伝の実戦剣術

の歩法だ。剣道の歩法とは速度も鋭さもレベルが違う。

何故ならこの剣術は、文字通り木刀や竹刀であろうとも敵を殺すための剣術なのだから。

涼牙が踏み込む音と同時に、三十郎が床を蹴る音が響く。涼牙が振り下ろした刀に向かって三十郎が突進したためだ。

七十を優に超える高齢であるはずなのに、その動きは鋭い。涼牙は迷いなく刀を振り下ろした。一般人なら峰打ちでも体が裂ける一撃。だが三十郎ならば致命傷にしない。そう判断してのことだ。

そして幸か不幸か、それは的中する。

「遅いわ」

「がつ！」

初めて三十郎が発した言葉と共に、激しい衝撃が涼牙の頭を襲う。

それが紙一重で刀を避け、体を回転させながら放たれた踵だと気付くのは、床を転がってからだ。

激しい音を立て、涼牙は床に激突する。だが手をつくともまるで体操選手であるかのような身軽な動きを見せ、体勢を立て直した。

「つう……」

立ち上がると同時に、呻き声が漏れる。額が割れ、血が流れていた。だが拭うことはしない。今の状況で少しでも気を抜けば、即座に殺されることは理解している。

無様とも取れる、涼牙の姿。それを見て、三十郎が笑う。

「くだらん。《鬼裂》の末裔がこの程度？ 期待外れだ。死んで詫びるが良い」

「うるさい。《鬼裂》のことだって最近知ったんだ。黙っていたお前に言われる筋合いはない。どういってもりか知らないが、冗談な

「やめてもらおうか」

「冗談？ 違うな。お前は未熟だから気付かんのだろうが、わしはわしであってわしではない。わしを構成するのは、お前の心。お前が思い描く罪がわしという姿となってここに在る」

そう言い切ると同時、三十郎が再び接近してくる。涼牙のすぐ後ろは壁。退く場所はないと判断すると涼牙は前へと踏み込んだ。

交差気味に二人の攻撃が振るわれ、今度は両方の体に傷がつく。

三十郎の右腕に一直線の刀傷が入り、涼牙は手刀を受けただけに関わらず、その左肩を切り裂かれていた。

鮮血が舞い、道場の床を汚す。涼牙は痛みを必死で堪えながら前を向いた。

その涼牙に、三十郎は楽しそうに語る。

「千年前、この国はかつてない混沌に追い込まれた。藤原という支配者が消え、次々と戦が起こった。その戦火は影の支配者であった会合にも及び、封印を守っていた者たちが殺された。すべては、絶対者を蘇らせるために」

はははと、三十郎が笑う。何が可笑しいのか、涼牙にはわからない。

「愚かな話だ。わしらは神。すべてを創造し、操り、この世界をこの世界として定着させた存在。所詮原理法則の域を出ん人間などという下等生物に、わしらを制御できると？ 片腹痛いとはこのことだ。

——だが、一つだけ例外があった」

右腕から溢れ出る、三十郎の血。それを舐め取り、三十郎は笑う。

「お前たちだよ、《鬼裂》。？不幻の瞳？などという原理法則の外

にあるものを一切許さぬ究極の魔眼。それ即ち、絶対者に対する死神。何故お前たちのような存在が生まれたのかは解せんが、千年前にすべてがそれで狂い始めた」

三十郎の姿をした、三十郎ではない存在。相手がそうであることに涼牙が気付くのは、そう難しいことではなかった。

答えは既に、涼牙の中にある。

三十郎は、笑う。

「醜き世界を壊そうとしたわしは、《鬼裂》の人柱によつてこの地に封じられた。忌々しい話よ。わしはすべてを見ていた。十二年前に起こったことも、この世界の在り方も。人間など低脳な下等生物に過ぎん。何故救わねばならぬ？」

だからわしは千年の年月、一つの術式を完成させるために費やした。再び再臨し、この地に惨劇を生み、血の紋を刻み、終わらせるために。故にわしはお前の前に訪れた。

——再び邪魔されては、話にならんなでな」

三十郎が、床を蹴る。血を撒き散らしながら、とてつもない速さで涼牙に迫る。

涼牙はそれを避け、間合いを取る。三十郎の動きは単調で読み易いだが速さが別次元だ。フェイントでも入れられれば、殺される。

そう悟り、今度は涼牙が踏み込む。素手で刀を器用に捌きながら三十郎は言葉を紡ぐ。

「わしはお前が思い描く罪の具現だ。十二年前、当時存在していた《十六夜八鬼》十四の名家。そのうちの七家を一片の慈悲もなく殺し尽くした。わしはその光景を見た数少ない存在。故に、お前はわしを罪の具現と選んだのであろう？」

「覚えていないな。そんなことは」

「轉るな。記憶などという曖昧なものに意味などない。お前が今こうして戦えているのは、間違いなくその身を流れる血の力だ」

ガツツと、鈍い音が響く。三十郎が素手で日本刀の峰を受け止めた音だ。

「壊れかけとはよく言ったものよな。お前はすでに死んでいるのだ。十二年前にな。忘れているのなら思い出させてやろう。あの時、敵も味方もすべてを失い、ただ一人血の海に立つお前の姿を」

三十郎の拳が迫る。それを、涼牙は右手で受け止めた。衝撃が右手を貫く。破れた掌の皮からは、血が滲んだ。しかし涼牙は一切それを気にせず、言い放つ。

「図に乗るな」

そのまま、全力で蹴りを放つ。涼牙が放った蹴りは正確に三十郎の胸を打ち、吹き飛ばした。三十郎は転がりながら軽業師のように体勢を立て直す。

「俺を裁けるのは、俺が殺した奴らだけだ。だが死人に口はない。だから俺は死ねないんだ。死ぬことは許されない」

「ほう……」

「これ以上戯言を口にするのであれば、今ここで殺してやろう。お前は三十郎ではないんだろう？　だったら問題はない」

正眼に刀を構え直し、涼牙は三十郎を見据える。

そして、一息の呼吸。刹那の間に涼牙は五歩ほどあった距離を縮め、刀を振り抜いた。先程とは段違いの速さに三十郎の反応が遅れ、肩が斬られる。慌てて後退するが、涼牙はそれを許さず、更に踏み込

む。

鮮血が舞い、道場の床が血に濡れる。今度は相打ち。涼牙の刀は右脇腹を斬り裂き、三十郎の拳は涼牙の腹を打ち砕いた。

骨が軋み、内臓が衝撃を受ける。だが涼牙は表情一つ変えずに更なる一撃を繰り出した。

月光を反射し、刀が残像を映し出す。三十郎はそれを紙一重で避け、大きく後退した。

「一体何があつた？」

その言葉と共に、涼牙の口から血が零れる。ついで、咳き込み始めた。ここで初めてダメージを負ったかのように。

三十郎は目を細め、嘲笑うように告げる。

「成程、魔殺しの力か。瞳だけかと思えば中々どうして。力満つる前とはいえ神であるわしにこれだけの手傷を負わせるとは、見事なり」

「……………」

涼牙は再び構え直し、それによって呼吸も止まる。広い道場を一人の死神が駆け抜ける。

「満月に至るは明日。名残惜しいが開演はここまでだ」

不適に三十郎が笑い、その体がまるで映像が消えるかのように歪む。その姿を見ながら涼牙は右手で眼帯に触れ、言い放つ。

「逃がすと思うか？」

その言葉と共に眼帯が引き千切られ、右目が現れる。

魔を討つために存在せし最強の魔眼、不幻の瞳？が。

「消えろ」

言葉と共に、涼牙の右目が三十郎を捉える。瞬間、その姿が激しく崩れ始めた。

「ぬっ、ぬおおっ！」

不敵な笑みを消し、三十郎が叫ぶ。憎悪の光を宿した瞳が涼牙を捉え、その手が涼牙に伸びる。

「だがわしは二度同じ苦汁を味わうつもりはない！ 消えるのはお前だああああっ！」

そう叫びながら迫ってくる三十郎。その三十郎に対し、涼牙はただ無感情に刃を向けた。

「近所迷惑だ。喚くな」

そして、刃が振り抜かれる。
すべては、それで決着が着いた。

[illegible]

崩れ行く体で、三十郎が笑う。その姿には狂気さえ感じられた。

「流石は魔殺し。わしらに対する死神よ。だがわしは死なぬぞ。幾

千の時を超え、この場所にいたわしを侮るな。明日の満月の夜、お前たちは終焉を目にする」

「くだらない」

涼牙は吐き捨てた。終わりなど正直どうでもいい。世界など既に見限った。

「俺はお前の思う通りにさせるつもりはない。さっさと消えろ」

「いいだろう。今宵は退く。だが忘れるな。わしは絶対者だ。いかに死神であろうと、わしを滅ぼすことはできん。死の運命からは逃れようがない」

.....

涼牙はただ押し黙る。今更ながら、傷が痛んできた。

[illegible]

それに対し、三十郎は笑う。高々と。壊れたように。

[illegible]

「五月蠅い」

吐き捨て、涼牙は刀を振るう。？不幻の瞳？によつて弱まっている虚構の体は、それだけであつさりと消え失せた。

文字通り、跡形もなく。塵一つ残さずに。

その光景を見つめながら、涼牙はフィアとの会話を思い出していた。

「誠也が残してくれたこの町の神についての情報だが、不可解なこ

とがある？

不可解なこと？

？『この地に神などいない』という結論に誠也は調査によって至ったらしい？

よくわからないな。どういうことだ？

？つまりここにいるのは神ではなく、その模倣をしているだけの存在かもしれないということだ？

「友人が残したものだ。受け継がないわけにはいかない」

呟くと、血を流す体を押して涼牙は歩き始めた。

満月が天に昇るまで、後十八時間――

第四話 過去と現代、記憶と未来（後書き）

第四話です。完結まで、あと二話ですね。

今回は少しバトルが出てきました。そして、《十六夜八鬼》の一角である先生も登場です。

では、感想などお待ちしております。

ありがとうございました。

最終話 意志と想い

町は活気に満ち溢れている。それもそのはず。二十四日。即ち昨日、失踪者が出なかったためだ。

無論、誰かが帰ってきたわけではない。行方不明者は変わらず行方不明なままだ。

だがそれでも、誰もが事件は終わりだと考えた。

そして、同時に開催される祭。形式的なれど神を降ろす祭が開催され、今日までの憂鬱な気持ちを忘れようとするかのように住民たちは一箇所を目指す。

四百四十四段の石段の先にある神社。屋台があるのは少し離れた麓。だが神降ろしが始まれば、住民は石段の下に集まり始める。

だから今はまだ、人影はない。この町の儀式は、一人の女性が石段を登り、神をその身に宿して降りてくるというもの。古来より守られてきたことであるため、誰もそれを破ろうと思わないし、破る理由もない。

だから今、石段の下にいるのは二つの人影のみ。

「……行こう」

夜空に浮かぶ、十五夜の月——満月。どこか妖しいその光を見つめながら、涼牙が呟いた。その身には道場で使う袴を動き易くした純白の戦闘衣を纏っており、闇夜の中異彩を放っている。

その隣に佇む、簡素な純白の鎧の上に黒の短い上着を羽織り、長い鎧と同じ純白のスカートを着た、紅蓮の盾を持つ女性騎士——フィアはその言葉を聞くと、眉を寄せた。

「待て。まだ《鬼頭》の姫君が来ていない。私たちだけでは殺されるぞ」

「《鬼頭》の姫君なんて呼び方はやめろ。優飛の家は既に断絶している。その名にもはや意味はない」

「……わかった。すまない」

フィアが頷く。協会の騎士としては吸血鬼を許せないのだろうが、優飛が血を吸わないことは説明してある。同級生でもあるのだから、敵のような呼び方はするべきではないだろう。立場があるのはわかるが、それがすべてではない。

涼牙はそちらに視線を送らず、静かに告げる。

「……それと、優飛なら来ない。眠っている」

「馬鹿な！」

涼牙の言葉を聞いた瞬間、フィアが声を荒げる。涼牙は月から視線を外し、フィアを見た。フィアは明らかに激昂している。

「相手はこの地を歴史に残る以前より影から守ってきた絶対者だぞ！ 協会の騎士一人と素人で勝てるわけがない！」

「優飛は俺の右目のせいで動けない。すべて俺の責任だ」

言いながら、眼帯に覆われた右目に涼牙は触れる。今の涼牙に？ 不幻の瞳？ を制御することはできない。下手をすればフィアの力までも消してしまいかねないための処置だ。

涼牙は左手で腰に差した日本刀の柄に触れると、静かに言い放つ。

「優飛を起こしに行くと言っても言うつもりなら、俺が全力で相手をする。優飛は限界だった。他者の血を吸ってもすぐに回復せず、より効率のいい回復方法である睡眠という手段までとらなければならないほどに弱っていた」

「だからどうした。わかっていて死に行くほど私は愚かではない」

ファイアも退かず、盾を構える。？不幻の瞳？のことは知っているはずだ。何かしら策があるのかもしれない。

涼牙は押し黙る。それに対し、ファイアは叩き付けるように言葉を紡ぎ始める。

「先程言ったが、すでに香織先生は誠也が刻んだ封印の起動準備を始めている。しかし実体を崩して精神の魂のみにしなければ術式は効果を示さない。神に最も近い魔物、真祖の力なくしてどうやってそれを為せというのだ？」

「俺の右目がある。真祖でさえも弱らせた瞳がな」

きつぱりと涼牙は断言する。ファイアは鼻を鳴らした。

「ふん、昨日今日に異能の力に目覚めた素人が何を――」
「それに」

ファイアの言葉を遮り、強い口調で涼牙はファイアを黙らせた。

「それにすべての責任は俺にある。確かに俺は素人だし、霊術が使えるわけでもない。だが、責任を人に押し付けることはしたくない。ファイアを巻き込んでいることもすまないと思っている。……本当に申し訳ない」

涼牙が頭を下げる。本当に心苦しく思っているのだ。

すべては涼牙の目が原因だ。涼牙がこの町にいなければ、こんなことにはならなかった。だから涼牙は決めたのだ。

責任はすべて自分が背負うと。

ファイアは涼牙の行動にしばらく呆然としていたが、やがて大きくため息を吐いた。

「顔を上げる。私も言い過ぎた。それに、策もある。騎士は死んだ時、協会にその報が伝わるよう霊術を施されている。どこで死んだかもそれでわかる。報が伝われば協会も会合も動くだろう」

涼牙が顔を上げる。そこには更なる覚悟が宿っていた。

「そうはならない。させはしない」

先程よりも強い口調。意志が言葉に宿っているようだった。フィアは首を横に振る。

「最悪の場合の覚悟は必要だ。違うか？」

「違う」

涼牙は即答した。一切の迷いがそこにはない。

「自己犠牲に意味はない。最悪は起こらない。起こさせないと誓うこと。それもまた覚悟だ。俺はそう教わった」

自己犠牲の先にあるのは、自己満足だ。決して諦めず、どれだけ絶望的になろうと最悪には至らないようにする。後ろ向きだが、それも覚悟だ。

最高でなくていい。だが一匙の希望さえも残らない最悪の結末だけは避ける。それが重要だと、涼牙は教えられた。顔をさえ覚えていない、両親に。

「言うのは簡単だが実行は難しい。そんなことは百も承知だ。だが実行できれば、何かが変わるかもしれないだろう？」

そう言い切った涼牙を、やはり呆然と見つめるフィア。そして数秒後、フィアの表情は苦笑に変化した。

「先程の素人というのは取り消そう。お前は立派な戦士だ」

「そう言つて貰えると、心強い」

微笑みながら涼牙はそう返し、石段を見上げる。

三つの四が並ぶ石段。覆い茂る木で先が見えず、どこか恐怖心を煽る。町の住民が滅多に近付かない理由もまた、納得できる。

足を踏み出し、涼牙は言った。

「行こうか。最後の夜だ」

二人が石段を登っていく。その姿は、すぐに闇へと紛れて見えなくなった。

満月が天に昇るまで、あと二時間――

山の奥にあるのは、白鷺市唯一の神社だ。しかしその反対側である海の砂浜には特に何かがあるわけでもない。ただ白い砂が広がっているだけだ。

妙な町である。大きくないのに海と山が町を取り囲むように存在している。

この町は決して有名ではない。同じ県に住む者たちでさえ、存在を知らないことが多い。そしてそれを誰も不思議に思わない。ここは、そういう町だ。

まるで隠された町——そんなことを考えながら、香織は一人砂浜に立っていた。

もう夏と呼んでもいい季節だ。一週間もすれば遊泳客で溢れ出すことだろう。だが今は誰もいない。人を吸い込もうとするような気配を放つ海は、静かな波の音を響かせている。

「……始まったみたいね」

その様子を見つめながら、静かに香織は呟く。町の北。神社がある方向から荒れ狂うような気配を感じる。

おそらく、始まったのだろう。

そして始まったのなら、彼女にもしなければならぬことがある。香織は一度息を吐くと、両手で印を結び、呟いた。

「——オン・アロリキヤ・ソワカ」

大きくはない。しかし研ぎ澄まされた霊力が香織を包み、凝縮される。

ソフトボールぐらいの大きさに圧縮された霊力が香織の眼前に現れた。高密度の霊力淡い青の光を放ち、ゆっくりと海へと向かっていく。

そして、海の中へと波紋一つ立てずに吸い込まれた。

瞬間、竜巻のように円を描く風が吹き荒れた。香織は印を結んだまま、飛ばされないようにと踏ん張る。

そして、弾けたように風が霧散する。

風が止んだ。先程までの嵐のような風が嘘だったかのように周囲は静まり返る。波の音さえも止まっていた。

香織が印を崩し、新しく別の印を結ぶ。すると地響きのような音を響かせ、渦潮が生まれた。その規模は徐々に大きくなっていき、渦の中心に水がなくなる。それを確認すると香織は印を崩し、白衣の

ポケットから形紙を取り出した。

「——オン」

起動の言葉を紡ぎ、形紙を一枚宙に投げる。式神に印は必要ない。必要なのは形紙と起動の言葉のみ。

青銅の肌を持つ、天夜叉と呼ばれる香織の式神が姿を現す。

「天夜叉。わたしを運んで」

香織は天夜叉にそう命を下し、渦の中心を見る。天夜叉は頷くと、俗に言うお姫様抱っこの体勢で香織は天夜叉に抱きかかえられ、空中から渦の中心を目指す。

渦の中心。海の底にあったのは、小さな社だった。

香織は天夜叉の腕から降りると、白衣のポケットに手を入れたまま無造作にその社へと近付く。高さは香織の身長より少し小さいくらいのものであったが、纏っている力は尋常ではなかった。

天夜叉に待機するように告げ、香織は社を見つめる。

「……流石は、天才・二夜誠也といったところね」

無表情にそう感想を漏らし、香織は印を組む。瞬間、社を中心とした複雑な陣が現れた。それを確認すると、香織は両手で次々と印を結んでいく。

「——オン・レーヤ・クラン・ソワカ」

術式を起動するための言葉を紡ぐ度に、新たな印が結ばれる。描かれた陣が徐々に靈力を発し始める。そして、香織の瞳が開かれる。

「我は代替なる夜なれば、そなたの真の主が想いを受け継がん。されど、我にも意志はあり。故に我は願わん。そなたの力を顕現せんと」

詠唱の言葉が紡がれ、天才が残した術式が発動しようと力を増す。その光景を見下ろす月が、天頂に達しようとしていた。

満月が天に昇るまで、後三十分――

そこは、静かな殺意が漂う場所だった。

最奥に存在する社へと続く石畳。敷き詰められた砂利。神体が祀られている社の他には三つの誰もいない建物がある。点いていないが古びた松明が、いくつか立っている。

一昔前の時代に戻ったような感覚が、涼牙の中を駆け巡った。

「……出てこい。いるんだろう？」

石段を登り切り、誰もいない神社で虚空を眺めながら涼牙が呟く。その涼牙の後ろには、既に臨戦体勢入ったファイアがいる。

涼牙は刀を抜き、周囲を警戒しながら石畳の上を歩き出す。

「……………」

神社の中心に立ち、無防備な姿で涼牙は相手を待つ。微弱な風が流れ、涼牙を撫でる。瞬間――

「危ないっ！」

フィアが吼え、涼牙の左側へと飛びつくように現れた。同時に、爆発の巨大な音と衝撃が二人を撫でる。

起こったのは、霊術による爆発。だが、涼牙は反応できなかった。反応して涼牙を守りにきたフィアも受け切れなかったようで、痺れる体を押さえ込んでいる。涼牙は刀を両手で握り締めると、フィアと背中合わせになるよう正眼に構えた。

——ジャリッ。

砂利を踏み鳴らす音がやけに大きく響いた。爆発で起こった煙が晴れ、人影がその姿を現す。そこにいたのは、一人の少年だった。

「……やはりか」

見覚えある少年の顔を見て、フィアが唇を噛み締める。涼牙も聞いて覚悟していたはずだが、信じられなかった。

メガネをかけ、無表情にこちらを見る少年は、二夜誠也だった。

（幻覚じゃない）

正眼の構えのまま、涼牙にとって背後に現れた誠也に向き直り、心中で涼牙は呟く。昨日現れた三十郎は、フィアによると神の用意した幻想らしい。

だが涼牙は直感した。目の前にいる友人は本物だと。理由もなくただ確信した。

誠也は無感情な瞳でフィアと涼牙を映すと、威圧感のある声で言う。

「私の力が満つる満月の夜だというのに、無粋な者たちだ。我に慈悲でも乞いにきたか？」

声を聞いた瞬間、二人は何かが体を押し潰しているような感覚に襲われた。間違いなく声は誠也のもの。だが気配は全く違う。涼牙は無意識のうちに刀を握り締め、唸るように言葉を紡ぐ。

「お前を、俺たちは止めにきた」

「誠也を返してもらおう。人を滅ぼすと決めた貴様は最早崇められる立場にない。恐れ多きは重々承知。しかし捨て置けない」

ファイアが言い放つ。誠也はその姿を見て、笑った。

「くだらぬ！ 実にくだらぬぞ愚かなる我が子らよ！ やはり救われぬわ！ 千年前は邪魔をされたが、此度はそうもいかぬぞ！ 我が末裔たるこの男の体のすべてを汲み取り、我は再び世界を変革せん！」

刃のような靈力が吹き荒れる。涼牙は右目の眼帯を取り去ると、誠也に向かって駆け出した。その背に、ファイアが叫ぶ。

「涼牙！」

「先手必勝だ！」

そう返事し、涼牙は刀を振り抜く。だがその刀は右手の指二本で受け止められた。

「なっ……？」

「業物だ。素晴らしい。だが腕が未熟。出直すが良い」

言葉と同時に、涼牙の腹に誠也の左の拳が放たれる。減り込むほどの威力の拳を受けた涼牙の体はくの字に折れ曲がり、吹き飛んだ。

砂利の上を無様に転がり、血と胃液を吐き出す。反射的に腹筋を締めたというのに全く関係なかった。人間離れどころの騒ぎではない力だ。

「おおおっ！」

そして涼牙が殴り飛ばされると同時に駆け出していたファイアが、盾の先端を誠也に向けて突撃する。誠也は笑ったまま掌で受けようとしたが、右の掌が貫かれた。誠也の掌が貫かれ、血を撒き散らす。だがその光景をむしろ心地良さそうに誠也は眺め、少し感情の乗った言葉を口にする。

「宝具か。これは見誤った。人間の体とはいえ我に傷をつけたこと、褒めて使わす」

余裕の込められたその言葉を聞き、ファイアが靈力を練り上げる。

「まだだっ！ 聖盾よ、魔を貫け！」

咆哮するかのようにファイアが叫び、紅蓮の盾が輝きを増す。次の瞬間、聖盾から無数の紅に輝く刃が吐き出された。

圧倒的な数の刃。聖盾に溜め込まれた靈力が形を成し、刃となったためだ。

刃が誠也に突き刺さる。肉体が人間である以上、死は免れないはずだ。だが誠也はあろうことが自身を貫く刃を見て、笑った。

「見事。これが痛みか。思い出したぞ」

刺され、貫かれた場所から血を流しながら血を吐き出すように誠也が言葉を紡ぐ。そして次の瞬間、ファイアの体は涼牙の隣へと叩き付

けられていた。

「がはっ！」

自分の体がどうやって吹き飛ばされたのかもわからぬまま、ファイアが腹部を押さえ、血を吐き、気を失う。誠也はその様子を心地良さそうに眺め、指を振るだけで紅の刃をすべて消し去ると、笑った。

「くくつ、良い。許す。だが、殺す。我はすべてを許し、殺そう」
「その物言いでは、許しているとは思えないな」

痛みを堪え、涼牙は立ち上がる。霊術を使えない涼牙は傷を治す術がない。だが、胃液が逆流するほどの痛みは幼少時代から幾度となぐ三十郎との稽古で体験してきた。我慢できないものではない。

涼牙は立ち上がると、再び正眼に構えた。数ある剣術の流派で最も多く使われ、同時に最強と謳われる型だ。

誠也を睨むように凝視し、呼吸を整える。誠也はその涼牙にただ一言こつ言った。

「参るがよい」

その言葉が鼓膜を震わせると同時、涼牙は意識的に呼吸を止め、踏み込む。無音の足捌きが砂利の上でも発揮され、音無く誠也に迫る。それをやはり楽しみに眺め、誠也は呟く。

「座興だ。一太刀浴びさせてやろう」

そして宣言通り、涼牙が振り下ろした刀が誠也の左肩から右腹部にかけての大きな傷を作る。血が噴き出し、砂利を紅に染めた。だが誠也は痛みを覚えた様子を一切見せず、涼牙の腹に左の拳を入

れる。

「ぐっ……？」

呻き声を僅かに漏らし、しかしそれでも涼牙は誠也から視線を外さない。外せば死ぬ——そんな直感があった。

誠也は更に腹部へ膝蹴りを叩き込むと、涼牙の顔を驚掴みにした。

「これだけの實力差を見せ付けられて瞳を閉じぬとは、見上げた根性よ。褒めてつかわす」

見下すように誠也が告げ、涼牙は頭を締め付けられながら声を振り絞る。

「……を……」

「む？」

「誠也を、返せ！」

右手の刀を振り上げ、涼牙が自分を掴んでいる右腕を切り裂く。一瞬だけ力が弱まり、涼牙はその隙に後ろへと退いた。再び正眼へ構え直し、牽制するように涼牙は言い放つ。

「その体の本来の持ち主は、俺の友人だ。その体でこれ以上罪を犯し、友人を侮辱することは許さない」

風が止む。研ぎ澄まされた涼牙の殺気が、神社を支配していた誠也の靈力を引き裂いた。

「きっちりと殺してやる。覚悟しろ」

そう涼牙が口にした瞬間彼の中で何かが、かちりと填った。幾千の死体と血の海の中で嘲笑う自らの姿が脳裏を過ぎる。魔に対する絶対的な死神として過ごした幼き日々を、思い出す。

「ほう……」

霊力を扱えない、異能の少年。取るに足らぬ存在だと認識していたそいつが見せた外には現れぬ劇的な変化に、誠也は感嘆の吐息を漏らす。

「もしやと思えばやはりか。十二年前の記憶は封じられていたとみえる。されどその瞳はその封印さえも打ち破り、意志と共に記憶を呼び覚ましたか——面白い」

顔を右手で抱え、血で汚しながら誠也が笑う。その笑みは、先程までの人を見下すような笑みではなかった。凶悪な、争いで悦楽を得る者の顔だった。

「面白い。十五夜が天に至るまでの座興と思っていたが、これは楽しめそうだ。死神よ。不死の我を砕けるか？」

「消し去る。それが俺の意志だ」

迷い無く涼牙は答える。心はやけに落ち着いていた。まるで陽の光がない闇の中にいるようだ。静かで、何も無い。

そして、空気のように自分の中を漂う殺気が身を包む。

誠也は涼牙の言葉を聞き、初めて構えを取った。腰を落とし、右半身の構えとなる。右腕は前へ。左腕は胸の前へ。基本的とも思える構えだ。

「参れ」

凜とした誠也の声。口元は笑みを刻み、目は狂気を孕んでいる。その様子に根源的な恐怖を煽られる。誠也の内側にいるのは神。その力の一端を見せ付けられたような気がした。だが、退かない。退けはしない。

「ああっ！」

裂帛の気合いと共に、涼牙が踏み込む。だが音は無い。音無しの歩法に乱れは無い。

刃が唸る。風が裂ける。誠也が放つ超絶の霊力が支配していた神社という空間が、涼牙の研ぎ澄まされた殺気によって穿たれる。

刃が走り、拳が飛ぶ。だがしかし双方の攻撃はすべて紙一重でやり取りされ、深い傷を与えない。

涼牙が踏み込む。拳を左肩に受けながら、刀を振り下ろした。

鮮血が舞う。誠也の左肩を切り裂いたことによって生まれた傷は、周囲に血を撒き散らす。誠也は後ろに飛ぶと、心地良さそうに言い放つ。

「我の体の再生が遅いのは、貴様の仕業か。伊達に死神を名乗っておるわけではないようだ。よいだろう。確かに我が末裔たる『十六夜八鬼』の七つを滅ぼした死神を相手に、手加減など失礼な話」

ぞくりと、背筋に悪寒が走った。霊力とは別の圧迫感が、涼牙を襲う。

「さあ、殺し合おうぞ。不死の我と死神の貴様。似て非なる絶対の存在がどのような幕を上げるのか、月に見せようではないか」

言葉と共に殺気と霊力が吹き荒れる。先程までは本気ではなかった

らしい。

涼牙は刀を構える。今度は正眼にはない。刺突の構えだ。左肩の骨がやられている。両手を使う正眼の構えは取れない。

右手で肩まで刀を持つてくると、涼牙は半身の体勢となった。後は捻るように右腕を突き出すだけで、突きが放てる。

「しっ」

小さな呼気の声とともに空気を裂く、風切り音。次いで、鮮血が舞った。

誠也の腹を貫く、涼牙の刃。誠也の拳は、放たれなかった。力なく両腕は垂れている。

「ぐっ……お……？」

何故体が動かないのかわからず、呆然とした声を漏らす誠也。涼牙は刀を引き抜くと、冷たい声で言い放った。

「本来とは違う者がその体を操っているんだ。肉体は現実でも、精神は幻。ならこの瞳に打ち破れないことはない」

涼牙が宿す？不幻の瞳？は一切の幻想を許さない。涼牙が認識できぬものであっても、瞳に映ればそれは消される。

そしてそれは相手が神を名乗る存在であっても、例外ではない。

「くくっ、成程……」

腹部を押さえ、片膝をつきながら誠也が唸るように呟く。

「原理法則を覆すことを許さぬ存在か。確かに我らに対する死神よ

な。……この体は流石は我が血筋なだけはあるって具合が良かったが、やはり全力は出せぬか」

「何？」

呟きに反応し、涼牙が眉を寄せる。その涼牙を嘲笑うように誠也は言葉を紡ぎ始めた。

「死神よ。まさか少しも考えなかったのか？ 神は不滅にして永遠の存在。その存在が肉体を必要とすると本気で考えていたのか？ ならば、何たる愚かさよ」

ゆつくりと、誠也が立ち上がる。口元から血を滴らせながら、笑っている。

「すべては十五夜が天に至るまでの座興よ。お前たち如きでは我を滅するに至らぬ。今、それを示してやろうぞ！」

鼓膜を打ち破るかのような叫び声が響き渡り、突風が吹き荒れる。涼牙は思わず後ろに下がった。誠也の体を、黒い光が包んでいく。

「う……っ……？」

吹き荒れる靈力に反応してか、フィアが目覚める。その目が開いた瞬間、その表情は驚愕に彩られた。

「なっ、なんだこれは！」

フィアの目に映ったのは、秩序など根こそぎ破壊してしまいそうなほどに吹き荒れる黒い靈力と、その靈力に反応して暴走を始めている天候だった。

風が吹き荒れ、雲が天を覆い、しかし月だけは隠れない。そんな明らかに普通とは違う状況が、展開されている。

「目を覚ましたか」

その隣まで退避し、右手で左肩を押さえながら涼牙はフィアに声をかける。フィアは怒鳴るように誠也に言葉を投げつけた。

「一体何が起こっている？ この状況は一体なんだ？」

「誠也の中にいる存在が出てこようとする余波だ。体に深手を負わせたらかうなった」

「……貴様の瞳でも無理だったのか？」

不安定な足取りで立ち上がりながら、どこか縋るような声でフィアが聞いてくる。涼牙はゆっくりと首を横に振った。

「弱らせることはできたが、滅するまでは届かない。相手が霊術ではないのだから仕方がないがな。？不幻の瞳？はあくまで書き換えられた原理法則を強引に元に戻す力だ。幻想を打ち砕くが、完成された幻想が相手では分が悪い」

「ならばどうするつもりだ？ 貴様の瞳が唯一の勝機だったんだぞ？」

「どうもしないな。ただ俺は最期まで刃を振るう。それだけだ」

右手を肩から離し、涼牙は強く刀の柄を握り締める。その涼牙に、フィアは小さく問いかけた。

「死ぬつもりか？」

「どうだろうな」

素っ気なく涼牙は答える。ファイアがなお口を開こうとした瞬間、

「くだらぬ下策は生まれたか？」

全身に響き渡るような、そんな重い声が聞こえた。視線を送ると、そこには紅の月があった。

石畳の上に倒れ伏す誠也の真上に浮かぶ、紅蓮の球体。血のように禍々しい色をした月を象ったその球体は、空気を震わせる。

「我は不滅。永遠に続く命を手に入れた究極の存在。肉体などという鎖は捨てた。十五夜は天に至り、今こそ惨劇の幕を上げん！」

圧倒的な靈力を放ちながら、その球体が宣言する。その光景を見つめていた涼牙の頬に、冷たいものが触れた。

「雨……？」

眩き、天を見上げる。そこには、月を中心として渦巻く漆黒の雲があった。異常な光景だ。だが涼牙の瞳はそれを打ち破らない。

あらゆる幻想を打ち砕く瞳。だが、その能力を上回る幻想が相手では効果を為さない。

所詮は人。能力には限界がある。

人である身では、神には敵わない。

「所詮は人よ。我に抗うことなどできません！ 我が生は永久に続く！」

高く笑いながら誠也が叫ぶ。

雨が、強くなった。鋭い雫が涼牙とファイアの体を打つ。

「……………」

息を吸い、涼牙は刀を握り締めた。覚悟を決め、前を見る。覚悟とは勿論、刺し違える覚悟だ。

だが、その覚悟が現実となることはなかった。

「いいえ。あなたの命は、ここで終わります」

鋭い雨を切り裂くような透き通った声。

満月の下に、四枚の翼を宿した吸血鬼が現れた。

「あれ……雨だ」

屋台の準備をする途中、掌に触れた雫に対し藍那が呟いた。それに反応し、周囲からも声が上がる。

「マジかよー！ 雨降ったらもの売れねえじゃん！」

「今日雨降るって予報あったの？」

「いんや、ねえはず」

「でも降ってるし。てか降ってきたし」

手を止め、好き勝手に全員が話し始める。藍那は空を見上げ、不審なことに気付いた。

「ねえ、何か変じゃない？」
「変って？」

隣に立っていた友人が藍那の言葉に反応する。藍那は頷くと、空を指差した。

「だってほら、月を避けるみたいにして雲が渦巻いてる」
「……ほんとだ。気味悪い」

友人がそれに気付き、体を震わせる。確かに気味が悪い光景だ。こんな現象が起こり得るのだろうか？
言い知れぬ不安を藍那は感じる。何かが起こっているような感覚だ。不意に、藍那の瞳は妙なものを捉えた。

「あれ……？」
（今、月の下に誰か……）

月の下に、天使のような翼を纏った人がいたような気がした。そしてその姿を見た瞬間、藍那の瞳から一筋の涙が流れた。

（あれ？ なんだろ……？）

その涙を拭いながら、藍那は空を見上げる。もう既に、月の下には誰もいない。

なのに、この喪失感は何だろう？
まるで、大切なものが終わってしまったような、そんな気がした。

風が勢いを増し、嵐のような勢いを得る。
月下に行われる戦いは、終焉を迎えようとしていた。

「今宵の月は十五夜。鬼たる私も存分に力を振るえます」

満月の下、背中より現れた四枚の漆黒の翼で宙を浮く、一人の美しい女性。漆黒の髪とどこかの民族衣装のような黒いドレスを身に纏った女性が言葉を紡ぐ。

涼牙もフィアも、いきなりのことについていけない。女性が何者かもわからず、ただ呆然と見上げている。

女性は右手を前に出し、紅蓮の球体へと言葉を投げかける。

「千年振りですね。我が祖。神——いえ、円心とお呼びすればよろしいでしょうか？」

「貴様、まさか……」

紅蓮の球体が身を震わせる。女性は微笑を浮かべ、頷いた。

「千年前、貴方が従属にし損なった吸血鬼です。あの時の私はただあの方を見ていることしかできませんでした。今は違います。千年積み上げし我が想い。易々と打ち破れると思われぬよう」

女性がゆっくりと下降する。涼牙たちと紅蓮の球体の間に少しか浮いた状態で佇む。すると、球体が再び震えた。紅蓮の球体がぶれ、全体にノイズが走る。

「これ……は……！」

「人の力を侮った結果です。貴方が利用した夜の末裔。彼が残した

幻想が貴方のすべてを封じます」

女性の宣言と共に、突然球体の周囲に陣がいくつも現れた。取り囲むようにして現れた陣は、いくつもの光の帯を召喚し、球体を縛り上げる。

「今です！ 協会の騎士！ 彼を！」

今までこちらを見もしなかった女性が突如叫び、ファイアが反応する。その視線の先にいるのは、傷ついて横たわる誠也の姿。ファイアは全力で地面を蹴り、突撃するように走る。

「おおおっ！」

後先を考えず、霊力が吹き荒れる中を雄叫びと共に駆け抜けるファイア。掠め取るように誠也の体を抱きかかえると、そのまま転がるようにして反対側へと逃れた。

「見事です。……これで、障害は消え去りました」

その光景を眺め、女性は呟く。そして両手を前に出し、印を結んだ。

「——オン・コロリヤ・アロ・ソワカ」

言葉が紡がれ、球体の周囲に浮かぶ陣が反応する。球体を締め付ける力がより強くなった。球体はしばらく暴れるように形状を変えていたが、徐々に押され始める。そして、抵抗が無くなる。

「神を騙りし愚かなる鬼よ！ 今こそ真実の姿を晒せ！」

女性が大声で宣言する。その言葉が後押しとなり、紅蓮の球体が閃光に包まれる。

そして、そこに現れたのは一人の男だった。純白の衣を身に纏い、漆黒と純白が対となった四枚の翼を持つ、黒髪の男。

「この、体は……」

自身の体を見つめ、どこか呆然と男は呟く。女性は男に対し、冷静に言い放った。

「懐かしい姿でしょう？ 貴方がまだ吸血鬼であった時の姿です」
「馬鹿な！ 我は幻想の極地に至り神となった！ この体に戻るはずが無い！」

男が喚く。女性はどこか見下すように言葉を続けた。

「貴方の不死は強大な力による肉体の廃棄によってなされたもの。ならばその力を封じてしまえばその方程式は覆され、貴方は吸血鬼に戻ります。今の術式は貴方を封じるため、夜の末裔たる少年が創り上げた奇跡です」

「ふざけるな！ 霊術師如きが我の力を封じただと？ ありえぬ！
断じて認めぬぞ！」

「現実として存在しているのです。是非もないでしょう。……もつとも、貴方の言い分は正解です。確かに神に至った貴方の力は彼の術式だけでは封じるに至りませんでした。月の霊力を利用してさえ。ですが、ここには私がいます」

女性のその言葉を聞き、男の表情が変わる。

「まさか、お前は……」

「すべてはこの時のために。復讐のためだけに千年間、私は力を蓄えました。十五夜の月の恩恵ありし時でしか行使できない力なれど、今の私の力は神に及びます」

「私の力を封じるためだけに、千年の時を浪費したというのか……！」

唸るように男が呟く。女性は頷いた。

「私の想い、侮らぬように」

強い言葉だった。強い意志を内包した、確かな言葉。

「く、く、く、く、く……」

男は、笑った。

[illegible]

高々と、降りしきる雨の中で。

「そうか、これは誤算だった。まさか千年前の座興がこれほどの力を有して我が前に現れようとはな。だが、我は死なぬ！」

男の周囲を取り囲むように、白と黒の靈力が吹き荒れる。

「我は不死を體現せし不滅の存在！ お前たちを葬れば我が力も戻るだろう！ 夜はまだ長い！ 所詮は人を滅ぼすまでの座興よ！ その魂、極彩と散らしてくれる！」

言い知れぬ圧迫感が言葉と共に発せられ、涼牙を打つ。女性は一度退くと、涼牙の背後まで移動した。驚く涼牙に、女性は静かに告げる。

「涼牙さん。真に申し訳ないのですが、代わりに戦っていただけませんか？」

「は？」

涼牙の表情に理解不能の色が宿る。今の状況が理解できないのだ。更に戦えと言われても、頭が追いつかない。女性は苦笑し、言葉を続けた。

「私の力の大半は、あの者の力を封じるために使っています。そのため、戦闘などできない状況で……。だから涼牙さんをお願いしたいと思っています」

「いや、元々戦うつつもりでここに来て戦っていたわけだから構わないんだが……あんたは誰だ？」

涼牙は女性に問いかける。そもそもこの女性が出てきてから状況が一気に変化したのだ。一体何者だろうか？

女性はその問いに驚いたような表情を見せ、すぐに微笑むと口を開いた。

「普段の私とは姿が違いますから、仕方ありませんね。私です。…涼牙さんの血、美味しかったですよ？」

その言葉で涼牙は結論に至り、驚きの表情を浮かべる。

「まさか、優飛……？ いやちょっと待て。その姿は何だ？」

戸惑いながら涼牙は言葉を紡ぐ。目の前にいる女性は明らかに二十代の成人した女性だ。優飛は高校生の姿をしている。優飛は微笑み、涼牙の問いに答える。

「満月の夜のみ、こうして本当の姿になれるんです」

「……吸血鬼だからか？」

「吸血鬼だからです」

きつぱりと優飛が言い切るのを聞き、涼牙は苦笑した。この雰囲気は間違いなく優飛だ。

涼牙は刀を右手で握り締め、構える。片手の正眼だ。

「まあいい。面倒なことは後回しだ。要は、あいつを殺せばいいんだな？」

すんなりと口から出た『殺す』という言葉に、涼牙は内心で苦笑した。どうやら自分は真正の殺人鬼らしい。思い出した記憶の中にあつた殺戮は現実だったようだ。

所詮は人殺し。ならば罪を背負ってどこまでも堕ちよう。

——命、尽きるまで。

優飛は涼牙の背中にどこか寂しげな視線を送ると、頷いた。

「……あの者の名は円心。かつて神が世界を治めていた神代の頃、吸血鬼となつて得た不死の肉体と膨大な霊力を用いて神に至る霊術を編み上げ、神となつた存在です」

「だが今はただの吸血鬼。……そうだな？」

「はい。しかし私とは比べ物にならないほどの時を生きてきた真祖です。《十六夜八鬼》の祖でもある円心はいかに《鬼裂》の死神でも容易には討ち滅ばせません。十二分に警戒してください」

「わかった」

「――相談は終わったか？」

涼牙が頷いた瞬間、円心が威圧感のある声を発してきた。涼牙は少し離れた位置にいる円心へと意識を集中させる。

「くくつ、これは好都合。協会の騎士はすでに肉体が限界を迎え動けず、真祖の姫君たるその吸血鬼も我を封じるために動けぬとは。ならば我の敵は死神――お前だけか」

「……………」

「よいだろう。ならば十五夜に恥じぬ踊りを見せようぞ。

我は円心！ 神に至りし不滅の存在なり！」

叫びと共に吹き荒れる突風と肌を打つ雨を感じながら、涼牙は深く、深く深呼吸をする。

――さあ、ここが正念場だ。

人を滅ぼすなんて冗談じゃない。そんなことは絶対させない。

人を殺すことの意味を俺は知っている。だからこそ、そんなことはさせない。

「魔殺しが一角《鬼裂》筆頭、鬼裂涼牙――参る」

決意と共に、涼牙は忌むべき名を名乗る。

嵐となった天候の中、戦いが激化した。

雨が肌を打ち、傷口からは血が流れる。

長時間の戦闘は不可能。そう判断を下し、涼牙は呼吸を止めた。刹那に等しき時間で、涼牙は円心との距離を詰める。

「——！」

どちらが発した声か。空気を裂くような雄叫びはしかし、雨の音に掻き消された。涼牙が放った突きは空を裂き、雨の雫を切り裂く。だがその先に、円心の姿は無い。

涼牙が視線を下げる。涼牙の懐、足下に頬を切り裂かれた状態で屈む円心の姿があった。その拳が涼牙に向かって放たれる。

涼牙はそれを右に動くことで避け、そのまま体を横に回転させると左足を軸に後ろ回し蹴りを放った。

だがやはり、攻撃は届かない。円心の姿は既に数歩離れた場所にあった。

「——チッ」

涼牙は舌打ちすると、数歩後退した。瞬間、口元から血が溢れる。

「ぐっ……」

刀を持つ右手で口元の血を拭い、涼牙は呻き声を漏らす。円心はその姿を興味深そうに眺めている。

かつて、この国には侍という人種がいた。

彼らは己の信念のために命を懸け、戦の際はその肉体を変化させたという。感情、呼吸、思考——戦いに必要のないものをすべて、排除したのだ。

刀を持った瞬間、侍は自身を作り変えた。そして、ここにいる死神もまた、同じことをしている。数メートルの距離を一瞬で縮める歩法もまた、侍の技法だ。

円心が、笑う。

「戦国乱世を生きし至高の武士の顕現か。距離を距離とせぬ縮地の歩法といい、飽食の国に住むとは思えぬ力だ。——面白い！」

円心が地面を蹴る。涼牙は右手で刀を握ると、再び呼吸を止めた。動ける時間は僅か。されどその時だけは、痛みも苦しみも思考も感情も戦いに必要ないすべてが彼の肉体から消え失せる。

素手で円心は涼牙の刀を捌き、高笑いしながら言葉を発する。

「見事！　されどこれでは我には届かぬ。我は不滅の存在。例え相手が死神であろうと、負ける道理はない！」

「——！」

涼牙の左肩を衝撃が襲う。攻撃を受けた場所は左肩だというのに衝撃が、全身を砕かんとする。

涼牙の思考は停止している。だが本能が、生き残るために後退を選んだ。

数メートルの距離を刹那の時に駆ける歩法を用い、涼牙が退く。呼吸が直り、戦闘の行える僅かな時間が途切れると同時に、全身に痛みが走った。

戦闘に必要なものはすべて排除する——それは刹那の間、人間離れた強大な力を行使できる代わりに、体に異常なまでの負担をかける。ただでさえ傷を負った状態の涼牙は、リバウンドとでも言うべき痛みに気を失いそうになる。

涼牙は左肩を動かそうとして、自身の状態に気付いた。

（……骨が砕かれてる）

折れていても、僅かに動くぐらいの反応はあるはずだ。だが動かな

い。痛みは麻痺しているが、左肩の骨は完全に砕かれているようだった。

「……………」

無言のまま、再び涼牙は右手だけで刀を構える。血反吐を吐くような経験は幾度となく積んできている。骨が砕かれたぐらい、障害ではない。

その様子を見て、円心が唇の端を吊り上げて笑った。

「骨を砕かれてもなお気力は衰えぬか。素晴らしい。だが所詮は人よ。肉体をどれだけ鍛えようと無心の境地に至ろうと、限界が存在する。……すでにその両足、気力だけで動いている状態であろう？」

「……………」

表情には出さぬようにしながら、涼牙は内心で唇を噛んだ。そう、人間離れた動きの代償は確実に涼牙に蓄積し、足はもう限界を迎えていた。動いているのは、自分以外にやる者がいないからというだけだ。

自分が倒れれば、みながやられる。だから涼牙は踏ん張っている。

「——シッ」

息を吐き出すと同時に、涼牙は全力で突進した。短期決戦。それしかない。

刀を振り下ろす。だがそれは素手で受け止められ、円心の自由な右手が拳を作つて襲つてくる。それを体を独楽こまのように回転させることで避けると、水平に刀を振り抜いた。

肉が斬られる嫌な音を響かせ、円心の左脇腹に刃が食い込む。

血が噴き出し、砂利の一部を紅に染め上げた。しかし、円心は倒れ

ない。倒れるどころか左腕で刀を押さえ込み、より深く刀を自分の体に食い込ませる。

「――！」

動けない――涼牙がそう判断した瞬間、円心の右拳が涼牙の顔面に迫った。

円心が笑っているのが涼牙の瞳に映った。

刹那、涼牙の心に熱いものが宿る。激情のような感情が涼牙を支配し、全身を駆け巡る。

次の瞬間、涼牙は『左手の掌で』円心の拳を掴んでいた。

メキリと、何か硬い物を握り潰したかのような音が響く。

「ぐ……むっ……！」

同時に、右手の拳を砕かれた円心が苦悶の声を漏らす。尋常ならざる握力で潰された右手の骨は、吸血鬼の肉体を持っても容易には回復できない。

更に涼牙は左手で円心の右手を握り潰しながら刀を握る右手に力を込める。

「おおおっ！」

気合いを込め、刀を振り上げる。吸血鬼の真祖――最強種であり高い硬度を持つはずの肉体から、左腕が飛ばされた。

棒のようなそれは回転しながら宙を舞い、雨でぬかるんだ地面に堕ちた。

腕を失った円心の左の肩口から血が噴き出す。涼牙は膝をつく円心の喉元に切っ先を突きつけた。

「勝った……のか？」

誠也を抱え、戦いを見守っていたファイアが呟く。涼牙は無言を通し、不意に円心が笑い出した。

「くくつ、成程。お前の差し金か」

二人から少し離れた場所に腕を組んで立つ優飛に、円心は視線を向ける。だが優飛は円心を冷ややかな目で見ていただけだ。しかし優飛の反応を気にせず、円心が言葉を呟いていく。

「真祖の血を分け与えたな？ 肉体の反応速度といい、回復速度といい異常だ。……復讐のために、死神さえも己が眷属とするか姫君よ」

「いかに私が貴方を祖とする《鬼頭》の末裔であり、真祖であるとしても……魔を退ける瞳の血を伝える《鬼裂》を眷族とすることはできません。ですが、今宵は特別です。千年前、この時のためだけに私はすべてを費やしてきました。一夜限りの夢なれど、今の私には《鬼裂》の力に幻想を付加することができます。眷族という形にはなりませんが、それは一夜限りの夢。屍鬼となることはありません。魔殺しの血は、実体があるならば神をも殺せるのですから」

静かに、しかし威圧感のある声で優飛が告げる。涼牙は黙したまま、円心に刀を突きつけている。

円心は無駄だとわかっているのか、抵抗しない。ただ口を開く。

「死神よ。理不尽だとは思わぬのか？」

今度は——涼牙へと。

「その姫君は千年前、我に仇名した一人の男を殺した復讐の責任を我に押し付け、自らの手を汚すことなくお前にさせようとしているのだぞ？」

「……………」

「醜い。千年前の復讐を己が手で成し遂げようとしなひとは。そう
は思わぬ——」

「黙れ」

すべての反論を許さぬ確かな言葉が、発せられた。

「千年前にお前がしたことは、当時十六だった優飛を真祖へと強制的に変え、自らの眷属として人殺しをさせるために強制的に従者に
したことだ」

「……………！」

断言する涼牙の言葉を聞き、円心と優飛が表情を変えた。涼牙は驚きの表情をする円心に変わらず無表情のまま言葉を紡ぐ。

「どうした？ 俺が知っていることがそんなに意外か？ 確かに俺
が知らない可能性が高いことは認めるが、知っている可能性もある。
そうだろうか？」

「……………そうか。姫君が——」

「優飛は話していない。人殺しの話なんてものを、そう易々とはし
ないだろう。この話はすべて、俺の中にいるお前への復讐を願う男
に聞かされた」

「お前の中にいる男？」

先程までの傲慢な態度からは想像できない間抜けな言葉——おそろく考える前に口から出ただけだろう——に、涼牙は頷く。

「俺は十二年前、現代に残っていた三人の《鬼頭》を殺した。顔も思い出せないが、父親と共に。《鬼頭》はすでに真祖となる禁術を失っていて、その三人は三百年前に真祖となった現代で一番新しい吸血鬼だった。

俺の父親は《鬼頭》の当主と仲が良かったらしい。息子連れて訪れることは多々あったようだな。《鬼裂》は魔殺しだが俺の父親はその力を完全に制御していた。だから争うことも無かったんだろう。——だが俺は未熟で、力を制御することができなかった」

静かに、涼牙は言葉を告げていく。いつの間にか、雨が止んでいた。

「俺の魔殺しの血は、あまりにも濃過ぎたらしい。千年前にお前をその命を持って封じた最高傑作をも凌ぐそうだ。……俺はその後、六つの一族を滅ぼし、力を封じられた。人柱になることで靈魂と化した魔殺しを触媒として、魔殺しの力を封じた」
「……………」

優飛も円心も、フィアも何も言わず黙っている。ただ涼牙の言葉を聞いている。

涼牙は乾いた声で笑い、言葉を続ける。

「俺は記憶と力を封じられ、神谷三十郎によって秘密裏にこの町へと移された。友との約束だそうだ。俺は愚かにも人殺しの記憶を忘れ、今まで生きてきた。だが、全部思い出した。背負うものの大きさを俺は知った」

涼牙は、左手を刀の柄に添える。

「俺は人殺しだ。地獄に堕ちるだろう。だから先に逝って待っている。お前を殺すことは、俺に罪を教えてくれた男の望みだ」

涼牙が、刀を振り上げた。円心は、抵抗しようとさえしていない。

「俺は、お前の死を背負う」

刀が、振り下ろされた。

刀を鞘に収め、涼牙は歩き出す。既に空から雲は消えていた。

涼牙はまず、誠也を抱きかかえた状態のフィアのところへと歩いていくと、ゆっくりと頭を下げた。

「今回の事件はすべて俺に責任があった。円心は俺の存在を感知したからこそ復活をこの時に合わせたんだろう。……すまない」

驚くフィアにそう告げると、涼牙は顔を上げた。

「誠也は、大丈夫か？」

「あつ、ああ。傷は深いが急所は外れている。手当てをしたから死にはしない」

フィアが慌てて答える。涼牙は微笑むと、

「そうか。なら伝えてくれ。……すまなかった、と」

そう言い残し、背を向けて歩き出した。向かう先にいるのは、本来の姿になった優飛だ。

「一つだけ聞かせてください」

「……なんだ？」

優飛の横を通り過ぎ、背中合わせになった状態で立ち止まりながら、涼牙は聞き返した。

静かに、漆黒の吸血鬼は言葉を紡ぐ。

「あなたの中に、もう彼はいないのですね？」

どこか、諦めたような声色だった。

「？不幻の瞳？の力は血に宿るもの。未熟だったからこそ封印が効いていたんだ。魔殺しに魔殺しの魂を重ねることで。だが何の誤算か二十歳になった時に消えるはずの封印は十六歳で消え、封印されていたすべてを俺に伝えて靈魂は天に逝った」

涼牙は、静かにそう答えた。優飛はそうですか、と小さく呟く。

「行き先は俺がいずれ逝く地獄だろう。人殺しの末路は、そんなものだ」

涼牙は呟くと、歩き出した。

山から見下ろした町は、祭を再開して賑やかだった。

最終話 意志と想い（後書き）

とりあえず、後はエピソードだけです。
意外と時間がかかってしまいました……。

感想など頂けると嬉しいです。ありがとうございました。

エピソード

「今回ええとこなかったなあ、わい」

「黙れ。二度とあんな真似は許さんからな」

病室のベッドに横になり、呟く誠也にフィアは強い言葉を口にする。誠也は苦笑して首を横に振った。

「なあ、ええ加減機嫌直してーな。わいが悪かったて」

「いいや許さん。許してたまるか」

病室でりんごを剥きながら、誠也と頑なに視線を合わせようとしないうフィアは言い切る。誠也の苦笑がますます深くなった。仕方なく、話題の転換を試みる。

「……そついや、涼牙がわいに謝ってたんやて？」

「ん、ああ。すまなかった、だそつだ。それがどうした？」

「いいや。あいつもアホやなあて思てな」

言って、誠也は病室の窓から空を見上げる。フィアもつられて空を見上げた。そこには、青々とした空が広がっているだけだ。

「まあ、判断は正しいけどな。あいつはこの町におらんほうがええ。情も何もかもを無視した絶対的に正しい結論としては、それしかあらへん」

「……そつだな。納得できないが、それしかないのだろうな」

「まあ、大丈夫やろ。あいつには、味方がある。無敵の味方がな」

そつ言って、誠也は空から町の奥へと視線を向けた。ここからは見

えないが、この先には駅があるはずである。
頑張りや。小さく、誠也は呟いた。
親友と信じる、一人の男へ。

風が肌を撫でる。田舎町の駅に人影はないのが日常だ。
だが今日だけは、そこに一人の少年の姿があった。

右目を眼帯で隠し、肩に布に包まれた刀と少量の荷物を提げた少年
——涼牙だ。

「……………」

目を閉じ、意識を耳に集中させる。聞こえてくるのは、町の喧騒だ。
昨日に引き続き行われている祭。雨のせいで儀式ができなくなった
とかで、本来なら普通の縁日になるところが、今日に儀式を行うせ
いで昨日と規模が変わらない。
まあ、その方が誰にとってもいいのかもしれない。
それは、ここを立ち去る涼牙にとってもだ。

「……未練は残るな」

左目を開け、涼牙は苦笑する。この町の争いを失くす結果は、生きていた。
誠也が用意し、香織が作動させた封印術。それによって封印された
円心の力は結界に注がれ、永遠とはいかずとも後数百年に渡って起
動するようになったらしい。幸運なことだ。都合がいいが、いいの
であればそれが一番良い。

この町は再び、争いを拒む町になった。

だが——だからこそ、涼牙はこの町にはいられない。

今は右目だけだが、いずれ涼牙が成長すればいるだけで幻想を壊す魔殺しと成る。そうなれば町を守る結界は壊れ、この町に身を守るために住んでいる誠也も戦わねばなくなるだろう。

誠也は悪友で、親友だ。迷惑はかけたくない。

だから涼牙は書き置きだけを残して立ち去ることにした。未練はあるが、こうする以外に彼には解決策が思い浮かばなかった。

彼は電車が来る方を眺め、顔をしかめる。田舎町であるため電車は少ない。まだ来ないのか、そう呟こうとした瞬間。

「……何をしているんですか」

呆れたような声音で、肩に大きめの鞆を提げた優飛がこちらに向かつて歩きながら涼牙に言った。優飛は涼牙の側まで来ると、人差し指を突きつけて言葉を紡ぐ。

「私に一声もかけずに、どこかへ行く気だったんですか？」

昨日とは違い、涼牙と同じ十六歳の少女の姿をした優飛はどこか拗ねるような口調で言う。涼牙は苦笑した。

「俺はこの町にいるべきじゃない」

「ええ、そうですね。同意します。そしてそれは私にも当てはまることです」

「何？」

いきなり優飛が言い出したことに、涼牙は眉を寄せる。優飛は頷いた。

「私は吸血鬼。それも真祖です。争いの火種そのものなんですよ？ 満月の晩は本来の力を取り戻してしまうので、結界の力が悪い意味で私に作用しないんです」

「どうということだ？」

「この町の結界は、住民の力を隠すことで争いが起こらないようにしているんです。力が無ければ余計な争いは起こりませんから。ですが本来の私は結界の力を超えてしまうんです。よって、外に力が漏れてしまうわけですね」

「つまり、あと一ヶ月もすれば優飛は狙われるということか？」

涼牙が頭の中を整理してそう聞くと、優飛は頷いて口を開いた。

「それに、涼牙さんにはお願いしたいことがありますから」

「お願いしたいこと？」

「はい。——私を、殺してくれることです」

「——」

いきなりの言葉に、涼牙は二の句が告げなかった。優飛は真剣な顔で涼牙の目を見ながら言葉を続けていく。

「千年、私は私を吸血鬼にし、彼を殺させた円心を憎んできました。その想いが終わりを迎えた今、私にこれからの展望はありません。千年も生きてきたのですから、今更未練というほどの未練もありませんし」

「ちよつと待て。なら何故俺が——」

「わからない人ですね。私は不死の真祖。千年を生き、吸血鬼の弱点すべてを克服しています。協会の騎士でも殺せないほどの力を有しているので、協会も敵視したところでどうしようもないでしょう。そうなると私を殺せるのは、？不幻の瞳？のみとなります」

眼帯で覆われた涼牙の瞳を見、優飛は告げる。涼牙はため息を吐いた。

「すまないが、お断りだ。俺は快樂殺人者じゃない。これ以上人殺しはできない」

「今すぐ殺せと言っているわけではありません。私自身、ようやく自由になれたわけですからね。ただ私を殺せるのは貴方だけですから――」

真剣に、切実に。優飛は、涼牙に言った。

「貴方が死ぬ時、私を――殺してください」

涼牙はその瞳を見つめ返す。見つめ合うこと、数秒。

優飛の瞳を見つめたまま、涼牙は言った。

「わかった。共に地獄に堕ちよう」

太陽の陽が照りつける陽だまりの中、漆黒の吸血鬼が、笑っていた。

エピローグ（後書き）

エピローグです。とりあえず、ここで完結ですね。

この作品については、それなりに思い入れがあります。色々と試行錯誤して書いたものでもあるので……。

これについては、続編を考えています。その前に、SFの長編を上げようとしています……。

読んでくださった方、ありがとうございます。
感想など頂けるとありがたいです。

ありがとうございます。

文章の一節、一言でも、あなたの心に残るものがありますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9047v/>

陽だまりの吸血鬼

2011年10月9日14時57分発行